

目 次

第 1 章 調査の概要	1
(1) 調査の目的	
(2) 調査の内容	
(3) 調査の方法	
① 大学生のボランティア活動の実態に関する調査	
② 「学生ボランティアフォーラム」参加者への調査	
(4) 調査体制	
① 委員（五十音順）	
② 事務局	
第 2 章 大学生のボランティア活動の実態 ～web アンケート調査結果～	3
(1) 回答者の属性	
(2) ボランティア活動・社会貢献活動への参加状況	
(3) 活動の内容・今後やってみたい活動	
(4) 活動した日数	
(5) 活動に参加した動機	
(6) 活動に参加してよかったこと/よくなかったこと	
(7) 自主的に参加した活動の概要	
(8) 授業等で参加した活動の位置付け	
(9) 活動に参加しなかった理由	
(10) 大学入学前の活動の状況	
(11) ボランティア活動に関する意識	
(12) 大学生のボランティア活動のために求められる支援	
(13) ボランティア活動をしてみたい教育施設等	
(14) 東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動に関する意識	
(15) 大学によるボランティア活動への支援とのかかわり	
(16) 子供の頃の体験とボランティア活動・社会貢献活動の実施状況の関係	
(17) ボランティア活動・社会貢献活動の実施状況と社会を生き抜く資質・能力の関係	
第 3 章 ボランティア活動に意欲的な大学生の実態	35
～「学生ボランティアフォーラム」参加者へのアンケート調査結果～	
(1) 回答者の属性	
(2) ボランティア活動・社会貢献活動への参加状況	
(3) 活動の内容・今後やってみたい活動	
(4) 活動した日数	
(5) 活動に参加した動機	
(6) 活動に参加してよかったこと/よくなかったこと	
(7) 自主的に参加した活動の概要	

- (8) 授業等で参加した活動の位置付け
- (9) 活動に参加しなかった理由
- (10) 大学入学前の活動の状況
- (11) ボランティア活動に関する意識
- (12) 大学生のボランティア活動のために求められる支援
- (13) ボランティア活動をしてみたい社会教育施設等
- (14) 東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動に関する意識
- (15) 大学によるボランティア活動への支援とのかかわり

第4章 調査のまとめ..... 59

第5章 考察..... 63

- 考察1 大学に求められる役割について (興梠 寛)
- 考察2 大学生の地域におけるボランティア活動を支援する視座 (服部 英二)
 ~若者達が地域で活躍 (ときめき)、学び成長をしていくために社会教育行政にできること~
- 考察3 社会教育に求められる役割について (坂口 緑)
 ~ボランティア活動に関する政策と言説に注目して~
- 考察4 若者に潜むボランティアリズムをどう引き出すか? (齊藤 ゆか)
 ~「一歩踏み出せない若者」に活動の楽しさを~
- 考察5 スポーツボランティアと大学教育 (二宮 雅也)
- 考察6 「ちょっと不安」と「もっと不安」(西尾 雄志)
 ~大学生のボランティア活動の意味をめぐって~

資料..... 99

- 調査票 [大学生のボランティア活動の実態に関する調査 (web アンケート)]

第1章

調査の概要

第1章 調査の概要

(1) 調査の目的

国立青少年教育振興機構では、青少年の発達段階に応じた体験活動の充実方策を検討する上での基礎資料を得るため、4年制大学および短期大学の学生を対象に、ボランティア活動に関する実施状況や意識等を把握し、その実情を明らかにすることを目的として、平成29年度および平成30年度に大学生のボランティア活動等に関する調査を実施した。

(2) 調査の内容

本調査では、大学生のボランティア活動（自主的に参加したものおよび大学の授業やゼミの一環として参加したもの）の実施状況や活動に関する意識、子供の頃の体験、大学等に求める取組等について調査した。

(3) 調査の方法

本調査では、以下の2つのアンケート調査を実施した。2つのアンケートは、一部異なるところがあるものの、概ね共通した内容となっている。

① 大学生のボランティア活動の実態に関する調査

調査対象：4年制大学および短期大学の学生

調査方法：web アンケート（(株)クロス・マーケティング社に依頼）

調査期間：平成31（2019）年3月上旬

回収数：2,176名

② 「学生ボランティアフォーラム」参加者への調査

調査対象：国立青少年教育振興機構が主催した「第6回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会（学生ボランティアフォーラム）」（平成30年3月2～4日）の参加者

調査方法：質問紙調査

調査期間：平成30（2018）年3月上旬

回収数：462名

(4) 調査体制

調査研究に当たっては、青少年教育・高等教育・民間のボランティア団体関係者からなる研究委員会を設置した。

① 委員（五十音順・所属等は令和2年3月現在）

(委員長) 興梠	寛	昭和女子大学総合教育センター特任教授 コミュニティサービスラーニングセンター長
齊藤	ゆか	神奈川大学人間科学部教授
坂口	緑	明治学院大学社会学部教授
西尾	雄志	近畿大学総合社会学部准教授
二宮	雅也	文教大学人間科学部准教授
服部	英二	桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部客員教授

② 事務局

青山	鉄兵	青少年教育研究センター副センター長 文教大学人間科学部准教授
大嶋	尚史	青少年教育研究センター研究員

第2章

大学生のボランティア活動の実態

～web アンケート調査結果～

第2章 大学生のボランティア活動の実態 ～Web アンケート調査結果～

(1) 回答者の属性

本調査は、(株)クロス・マーケティング社を通じて、2019年2月上旬にwebアンケート調査として実施した。調査に回答した大学生3380名のうち、2問のダミー項目(「この質問には「1」と回答してください」等)をいずれも正答した2176名を分析の対象とした。

回答者の基本的な属性についてみると、性別は、男性と女性がほぼ同数となっており(男性49.1%、女性50.0%、どちらとも言えない0.8%)、四年制大学(医・歯・薬学系を含む)の学生が約98%、短期大学の学生が約2%となっている。[図2-1-1]

学年についてみると、4年制大学の学生は、1～3年がそれぞれ2割強、4年生以上が3割強となっており、短期大学の学生は、1年生と2年生が約半数ずつとなっている[図2-1-2]。また、学年ごとの性別については、1年生では女性の割合が高く、4年生以上では男性の割合が高くなっている[図2-1-3]。

在籍する大学の種別は、3割強が国立大生、6割強が私立大生となっている[図2-1-4]。

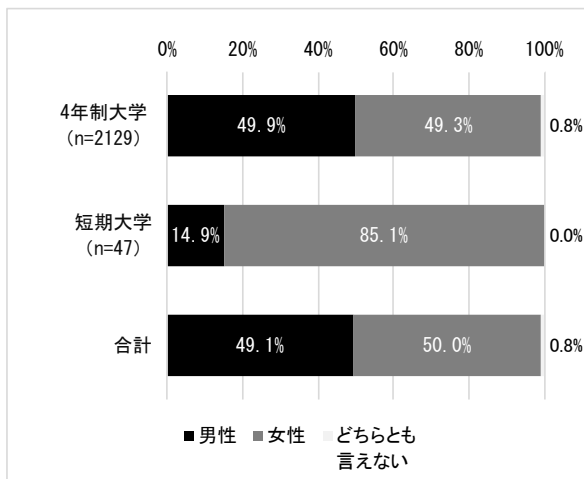


図 2-1-1 回答者の大学×性別 (n=2176)

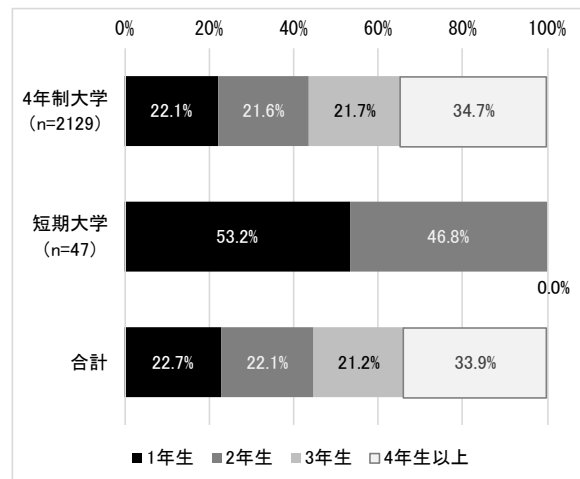


図 2-1-2 回答者の大学×学年 (n=2176)

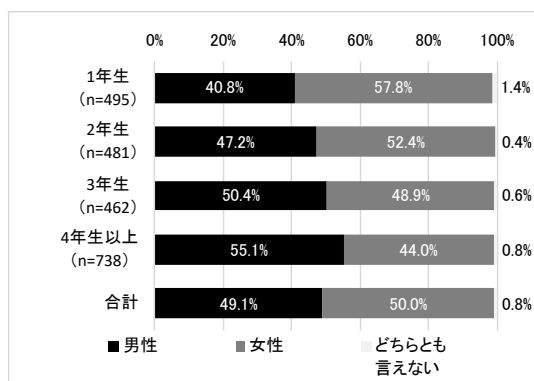


図 2-1-3 回答者の学年×性別 (n=2176)

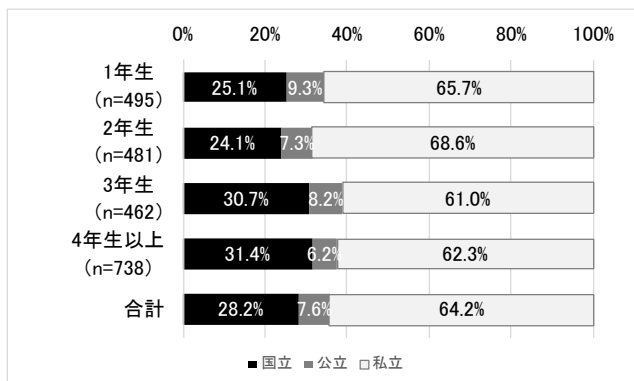


図 2-1-4 回答者の学年×大学の設置主体 (n=2176)

大学での専攻分野についてみると、「社会科学系」(24.1%)の割合が最も高く、次いで「理学・工学系」(18.0%)、「人文科学系」(14.1%)、「医・歯・薬学系」(13.4%)の順に高い割合となっている [図 2-1-5]

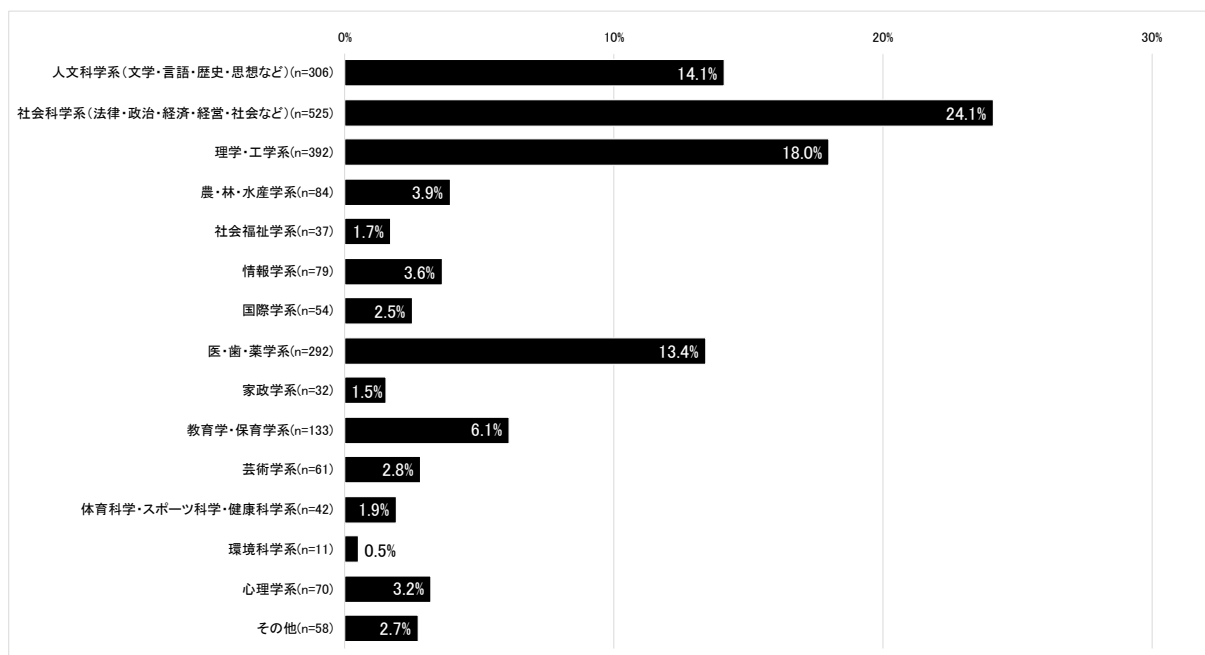


図 2-1-5 回答者の専攻分野 (n=2176)

(2) ボランティア活動・社会貢献活動への参加状況

本調査では、「ボランティア活動・社会貢献活動」を、①「自主的に参加したもの」(サークル等での活動も含む)だけでなく、②「大学の授業やゼミの一環で参加したもの」(単位にかかわるもの)の双方を含むもの(ただし、「アルバイト」「インターン」「資格のための実習」は含まない)として捉えている(以下では、それぞれ必要に応じて、「自主的に参加」および「授業等で参加」と表記する)。

大学入学後に、①・②のいずれかのボランティア活動・社会貢献活動に参加したことがある学生は全体の37.5%であり、内訳は「自主的に参加」のみの割合が23.1%、「授業等で参加」のみの割合が6.8%、両方に参加した学生が7.6%となっている [図 2-2-1]。これらを合わせると、全体では、①「自主的に参加」したことがある割合は合計で30.7% (「自主的に参加」のみ+両方)、②「授業等で参加」したことがある割合は合計で14.4% (「授業等で参加」のみ+両方)となる。

学年別にみると、参加したことがある割合は、概ね学年が上がるごとに徐々に高くなるものの、明確な差は見られない [図 2-2-1 及び図 2-2-2, 図 2-2-3]。

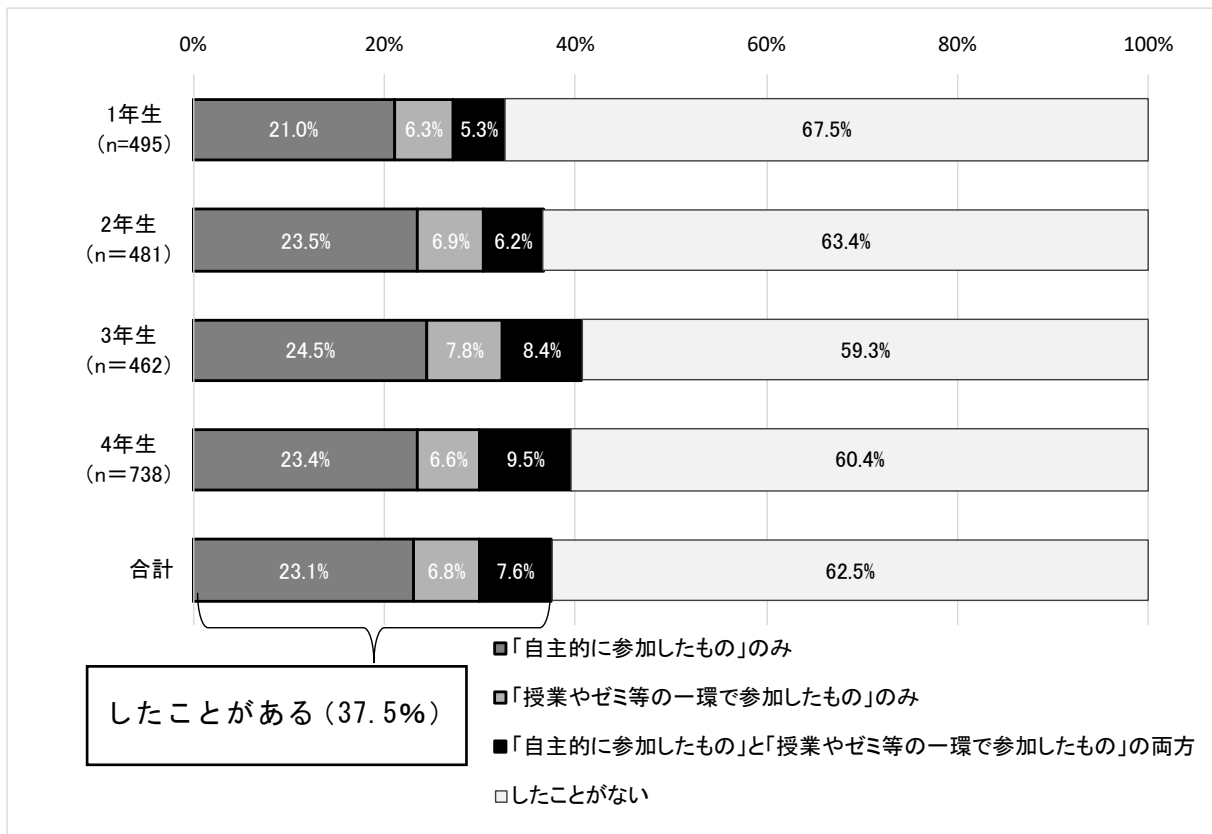


図 2-2-1 ボランティア活動等の活動状況

回答者の属性別に「自主的に参加」（自主的のみ＋両方）したことがある割合に注目すると、ア）公立大学の学生ほど参加した割合が高い[図 2-2-6]、イ）専攻が「教育学・保育学系」「社会福祉学系」「環境科学系」「国際学系」の学生で、参加した割合が高い[図 2-2-8]、ウ）卒業後の希望進路の決まっている学生ほど、参加した割合が高い[図 2-2-10]、エ）アルバイトの日数が多い学生ほど、参加した割合が高い[図 2-2-14]、オ）入学前にボランティア活動をしているほど、活動している割合が高い、といった特徴が見られる[図 2-2-16]。

回答者の属性別に「授業等で参加（授業のみ＋両方）したことがある割合に注目すると、カ）専攻では「教育学・保育学系」、「社会福祉学系」、「体育科学・スポーツ科学・健康科学系」で参加した割合が高い[図 2-2-9]、キ）アルバイトの日数が多いほど、参加した割合が高い[図 2-2-15]、ク）入学前にボランティア活動をしているほど、参加した割合が高い[図 2-2-17]、といった特徴が見られる。

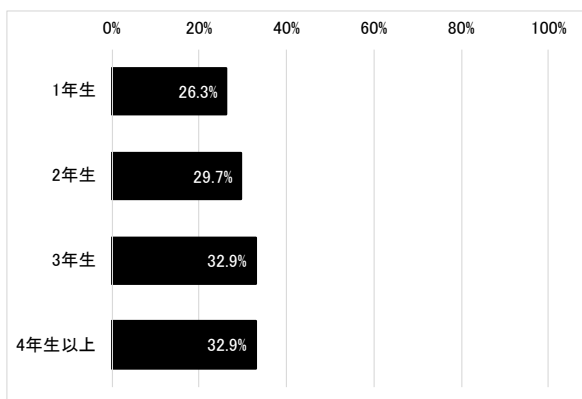


図 2-2-2 学年 × 「自主的に参加」の割合

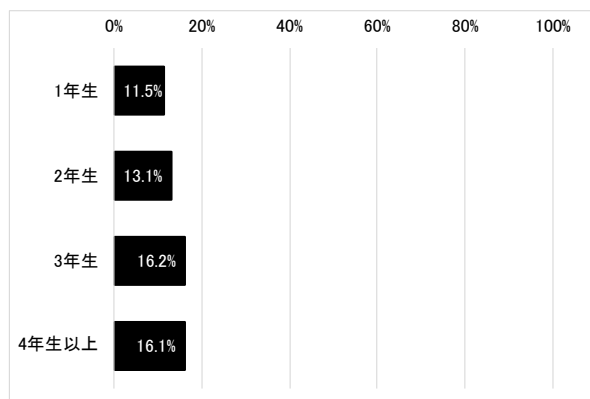


図 2-2-3 学年 × 「授業等で参加」の割合

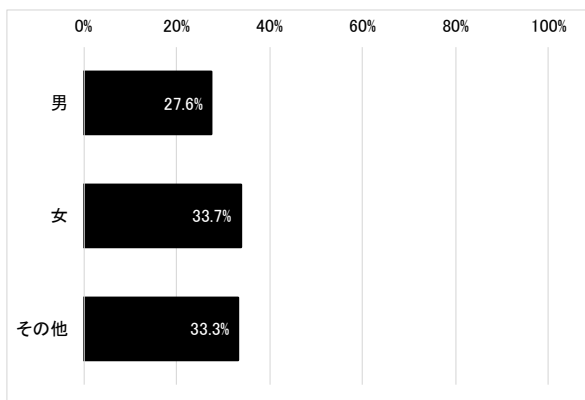


図 2-2-4 性別 × 「自主的に参加」の割合

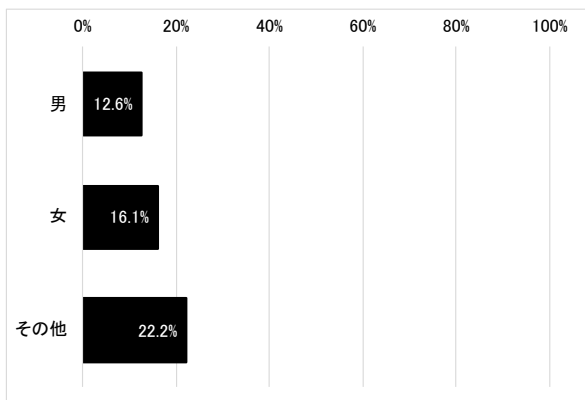


図 2-2-5 性別 × 「授業等で参加」の割合

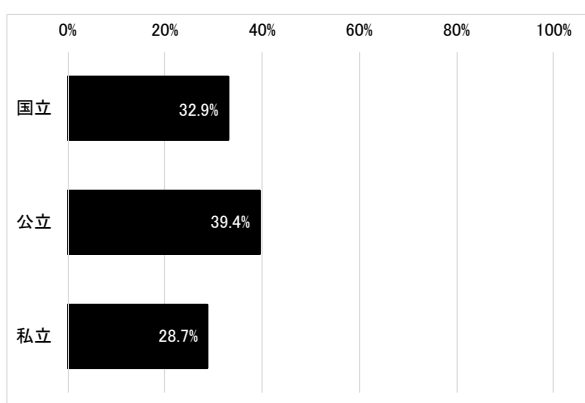


図 2-2-6 大学の設置主体 × 「自主的に参加」の割合

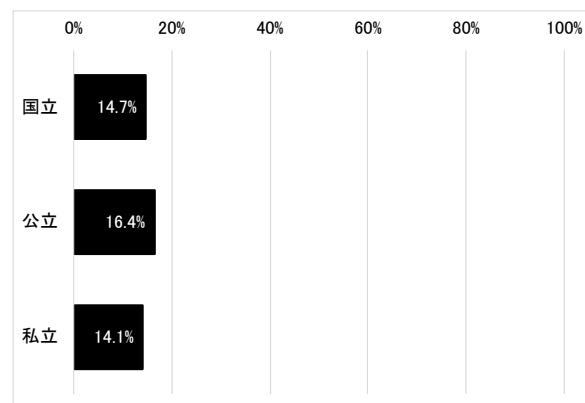


図 2-2-7 大学の設置主体 × 「授業等で参加」の割合

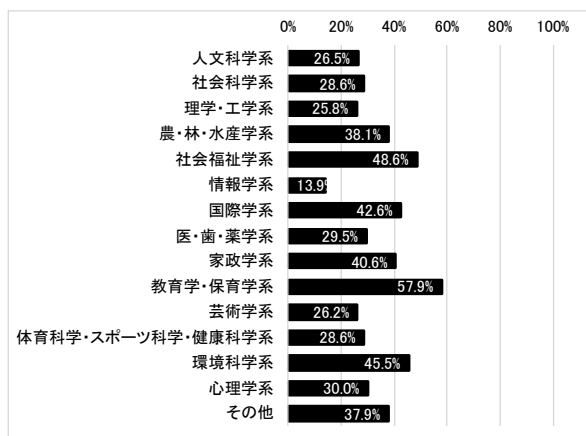


図 2-2-8 専攻分野 × 「自主的に参加」の割合

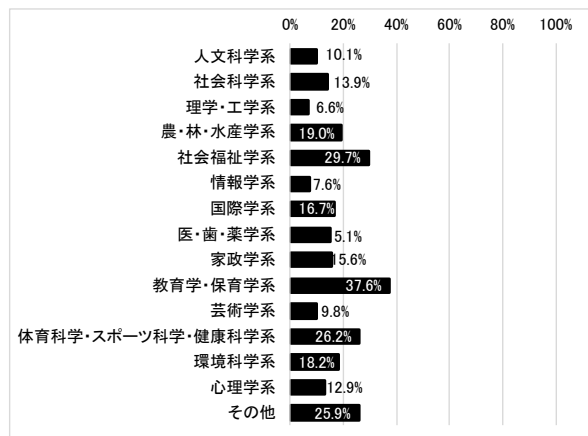


図 2-2-9 専攻分野 × 「授業等で参加」の割合

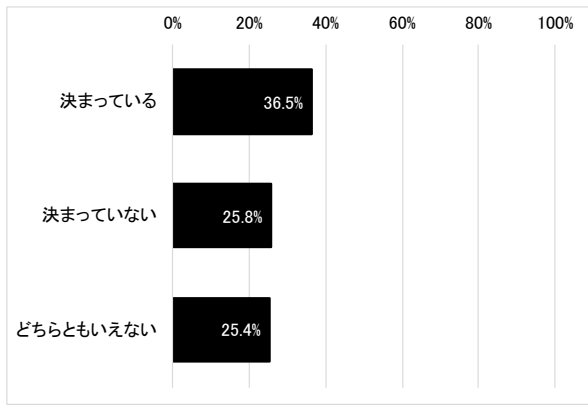


図 2-2-10 卒業後の進路 × 「自主的に参加」の割合

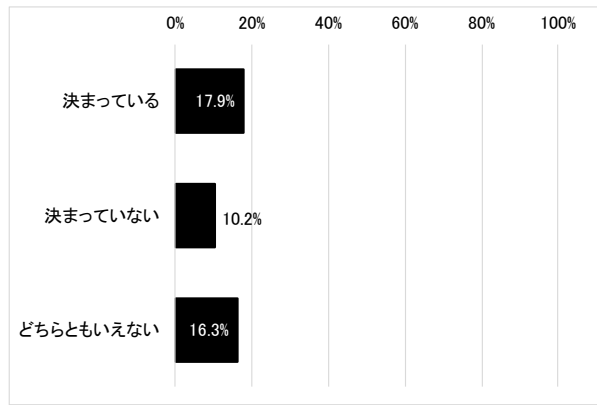


図 2-2-11 卒業後の進路 × 「授業等で参加」の割合

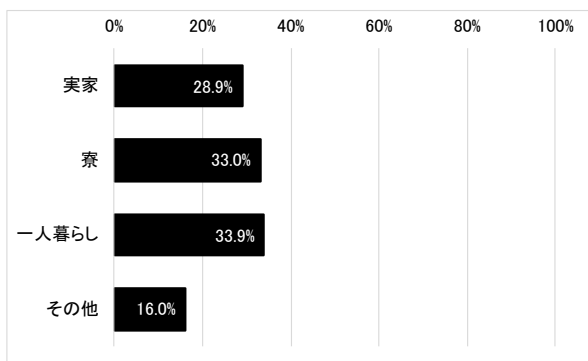


図 2-2-12 住居形態 × 「自主的に参加」の割合

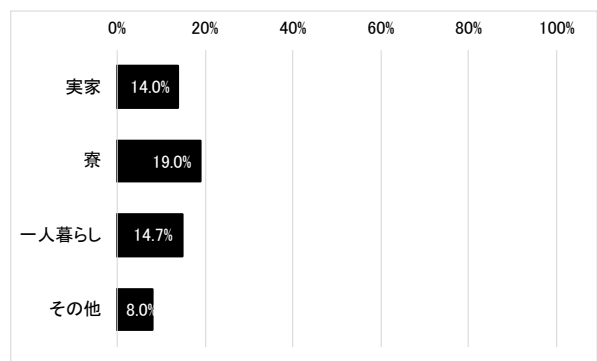


図 2-2-11 住居形態 × 「授業等で参加」の割合

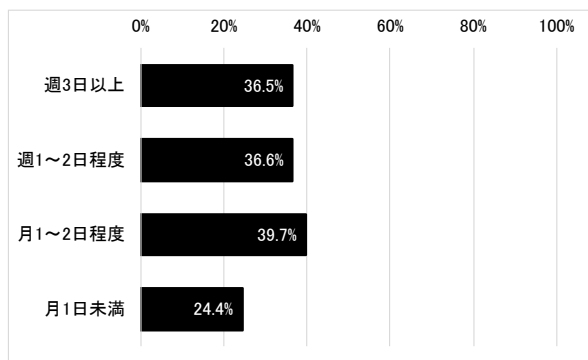


図 2-2-12 サークル・部活の状況 × 「自主的に参加」の割合

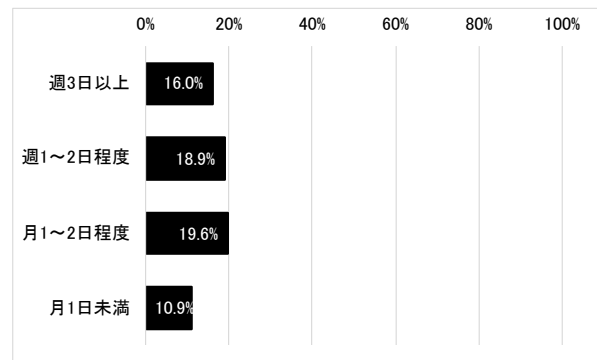


図 2-2-13 サークル・部活の状況 × 「授業等で参加」の割合

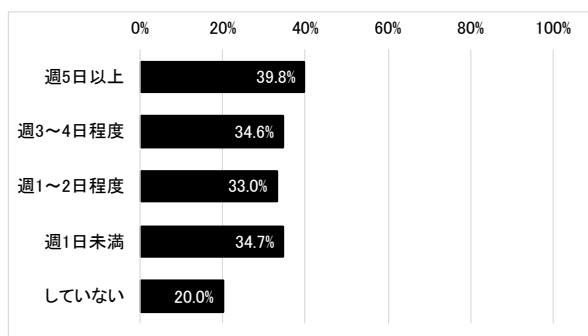


図 2-2-14 アルバイトの状況 × 「自主的に参加」の割合

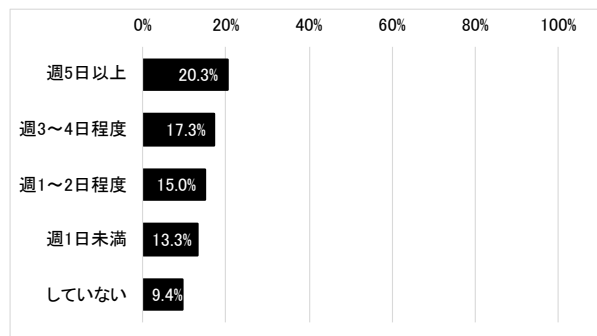


図 2-2-15 アルバイトの状況 × 「授業等で参加」の割合

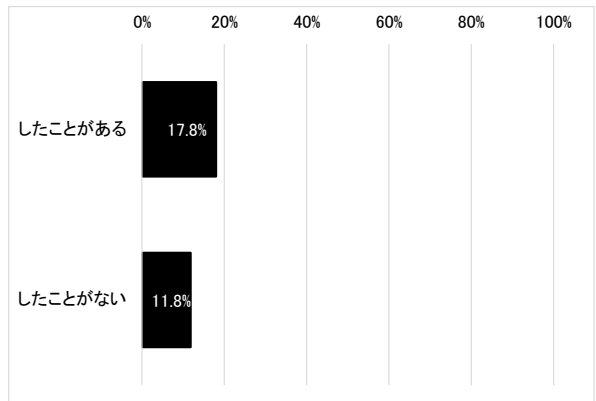
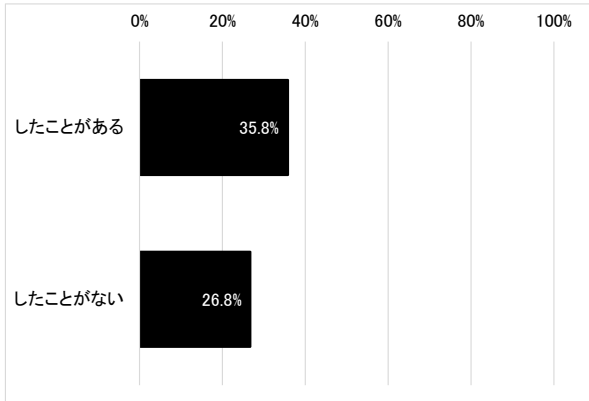


図 2-2-16 大学入学前のボランティア活動×「自主的に参加」の割合 図 2-2-17 大学入学前のボランティア活動×「授業等で参加」の割合

(3) 活動の内容・今後やってみたい活動

「自主的に参加」したことがある回答者 (n=668) を対象に、活動の内容についてみると、活動したことがある内容全てを複数回答で求めた場合には「小学生を対象とした活動」(31.1%)、「まちづくりのための活動」(20.8%)などの割合が高く、最も重点的に取り組んだ内容を単数回答で求めた場合には、「小学生を対象とした活動」(13.2%)の割合が最も高く、ついで「まちづくりのための活動」(11.2%)となっている [図 2-3-1, 図 2-3-2]。

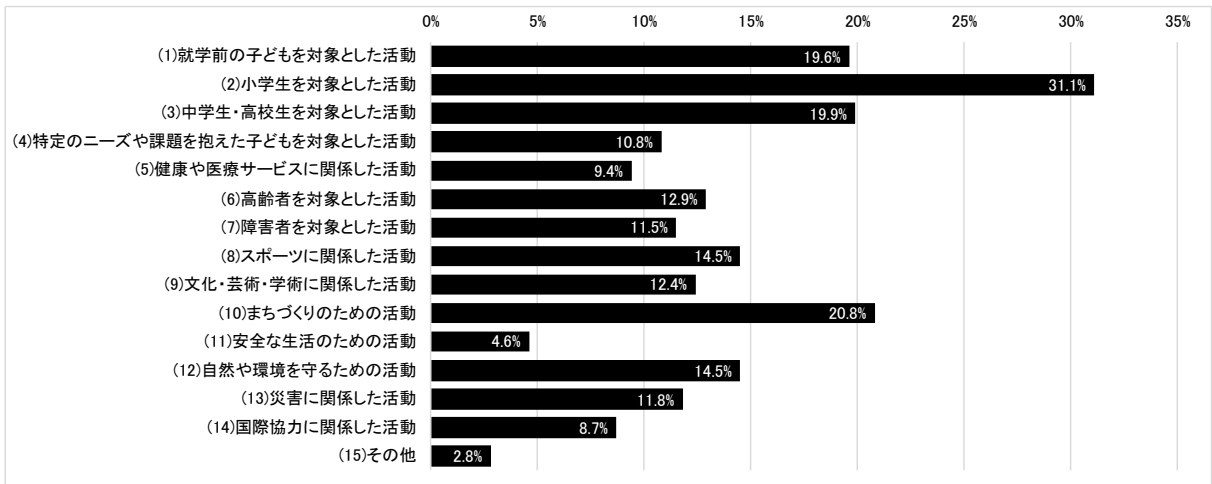


図 2-3-1 「自主的に参加」した活動の内容 (複数回答・n=668)

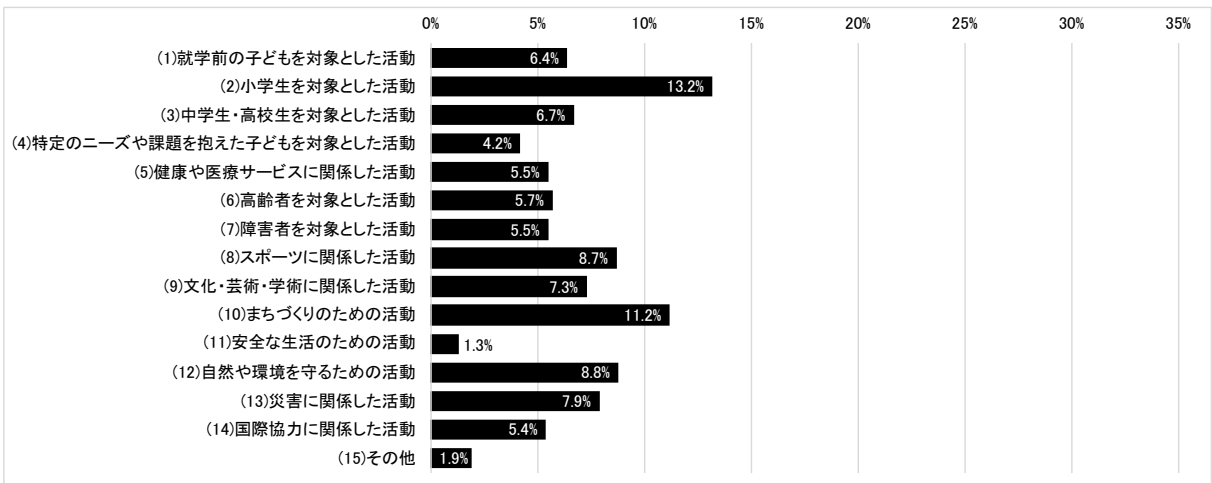


図 2-3-2 最も重点的に取り組んだ「自主的に参加」した活動の内容 (単数回答・n=668)

「授業等で参加」したことがある回答者（n=314）を対象に、活動の内容についてみると、活動したことがある内容全てを複数回答で求めた場合には「小学生を対象とした活動」（28.0%）、「高齢者を対象とした活動」（21.0%）、「まちづくりのための活動」（20.7%）などの割合が高く、最も重点的に取り組んだ内容を単数回答で求めば場合には、「小学生を対象とした活動」（14.6%）の割合が最も高く、ついで「まちづくりのための活動」（13.7%）となっている〔図 2-3-3, 図 2-3-4〕。

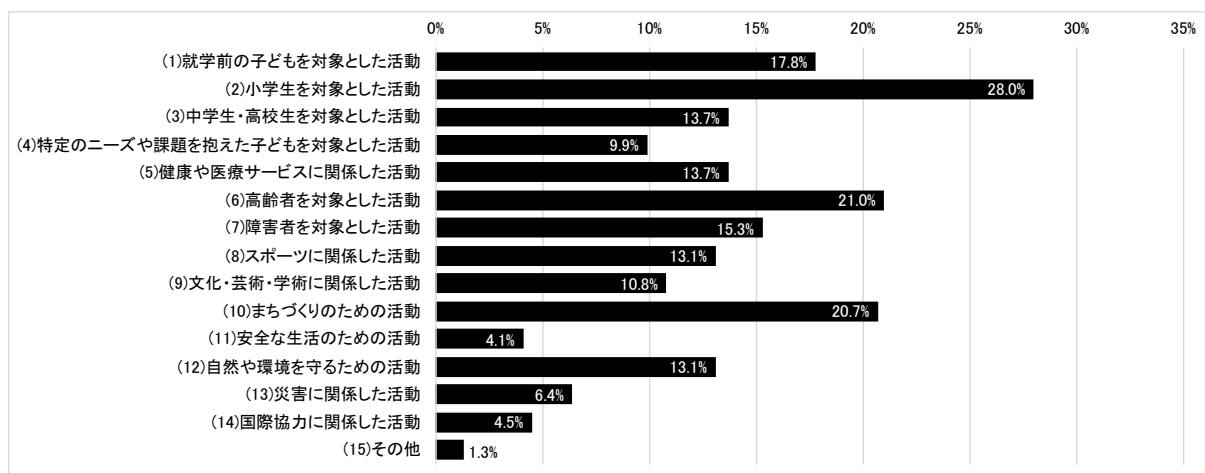


図 2-3-3 「授業等で参加」した活動の内容（複数回答・n=314）

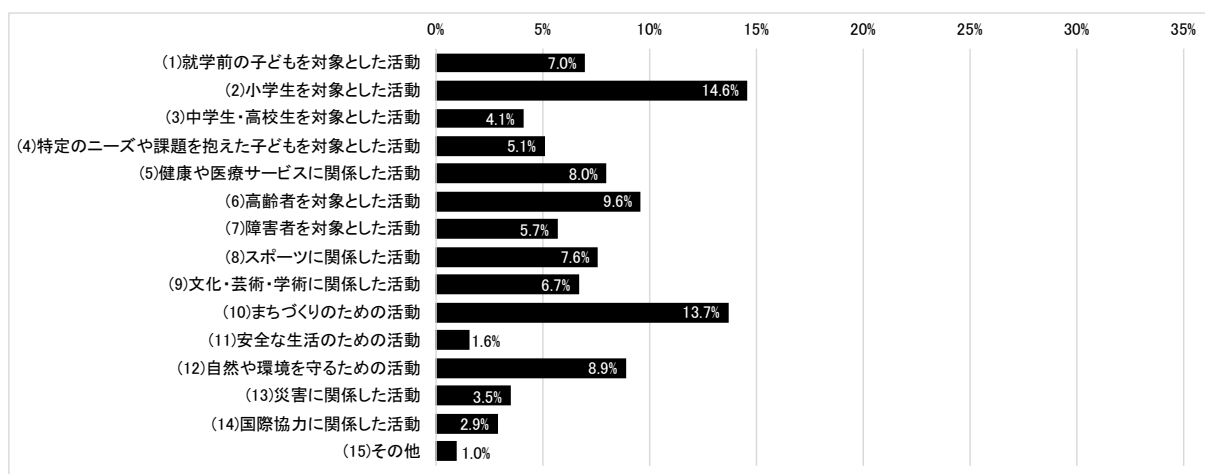


図 2-3-4 最も重点的に取り組んだ「授業等で参加」した活動の内容（単数回答・n=314）

活動経験の有無を問わず、今後やってみたい活動（複数回答）としては、「まちづくりのための活動」（31.3%）が最も割合が高く、ついで「文化・芸術・学術に関係した活動」（30.6%）、「小学生を対象とした活動」（28.3%）、「自然や環境を守るための活動」（28.2%）等の割合が高くなっている [図 2-3-5]。

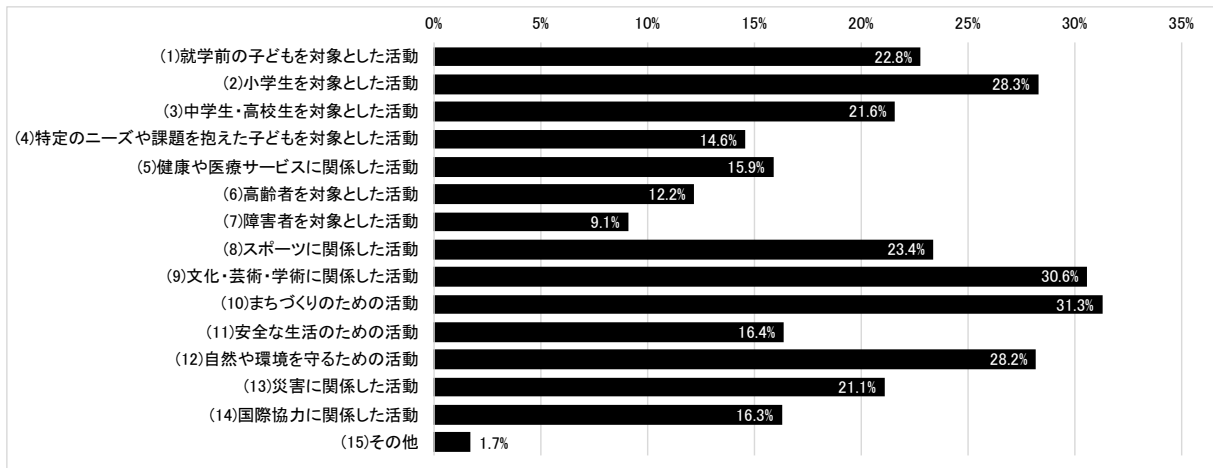


図 2-3-5 今後やってみたい活動の内容（複数回答・n=2176）

(4) 活動した日数

活動の日数（準備等も含む全日数）についてみると、「自主的に参加」した活動および「授業等で参加」した活動のいずれも「1~2日程度」の割合が最も高くなっており、次いで「3~10日程度」の割合が高くなっている [図 2-4]。

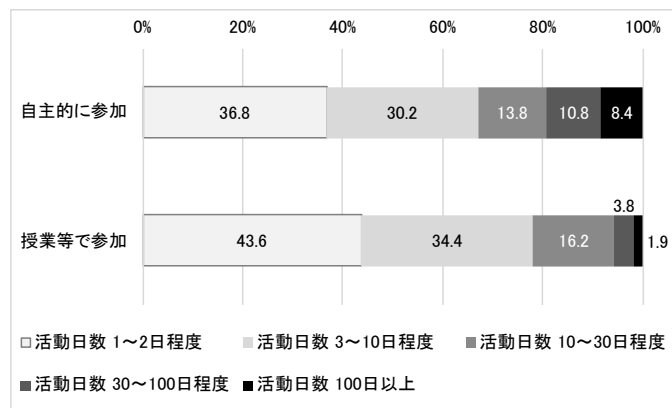


図 2-4 活動日数

(5) 活動に参加した動機

「自主的に参加」か「授業等で参加」かを問わず、活動に参加したことがある全ての回答者（n=817）を対象に、参加した動機（複数回答）についてみると、「自分の成長につながると思ったから」（45.4%）の割合が最も高く、ついで「さまざまな人と関わりたかったから」（28.5%）、「楽しそうだったから」（26.7%）「関心のある分野や社会問題の現場を見たかったから」（26.2%）などの割合が高くなっている[図 2-5-1]。

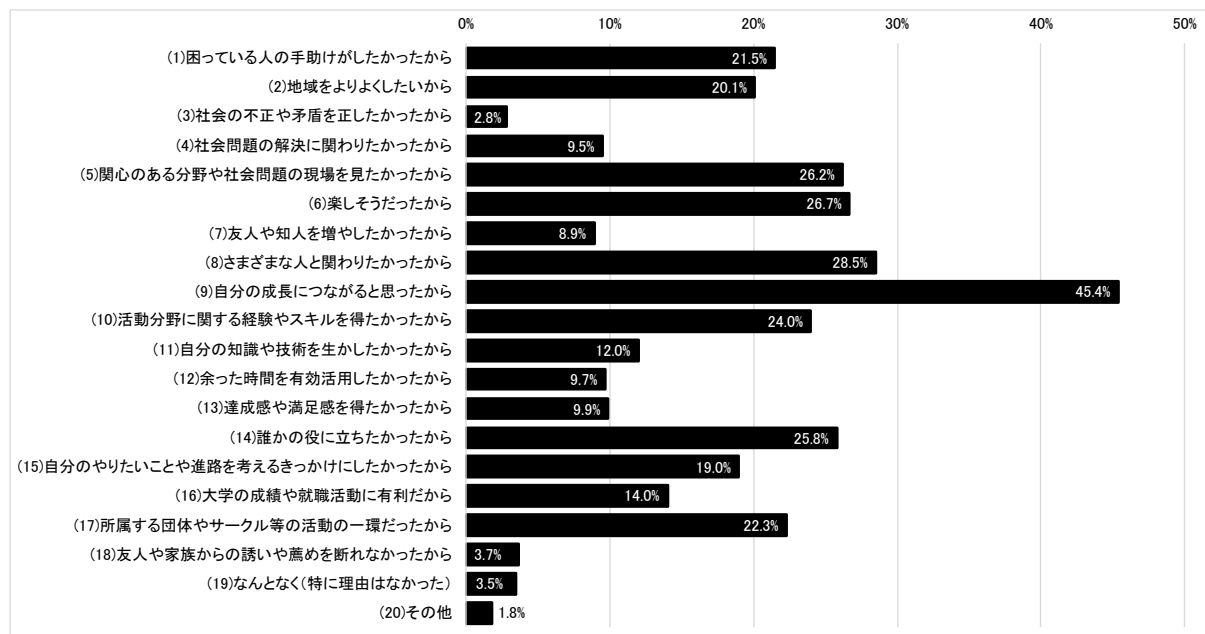


図 2-5-1 活動に参加した動機（複数回答・n=817）

次に、「自主的に参加」および「授業等で参加」ごとに最も中心的な動機（単数回答）についてみると、「自主的に参加」の場合（n=668）は「自分の成長につながると思ったから」（17.4%）の割合が最も高く、「授業等で参加」の場合（n=314）は「所属する団体やサークル等の活動の一環だったから」（15.6%）の割合が最も高くなっている[図 2-5-2, 図 2-5-3]。

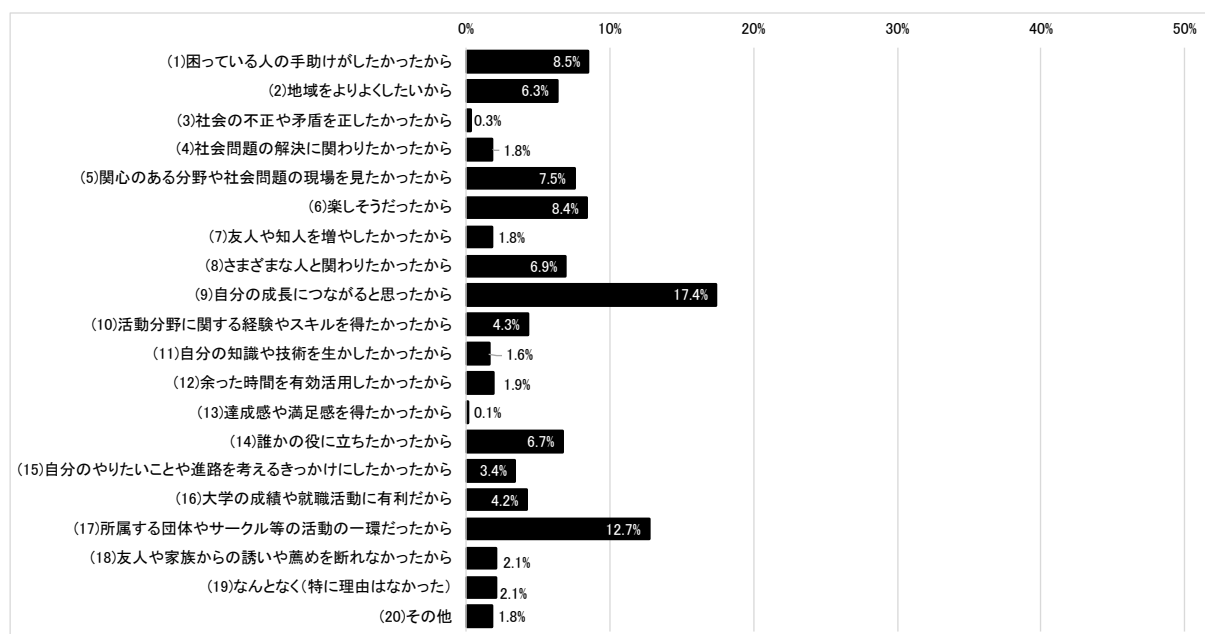


図 2-5-2 「自主的に参加」した中心的な動機（単数回答・n=668）

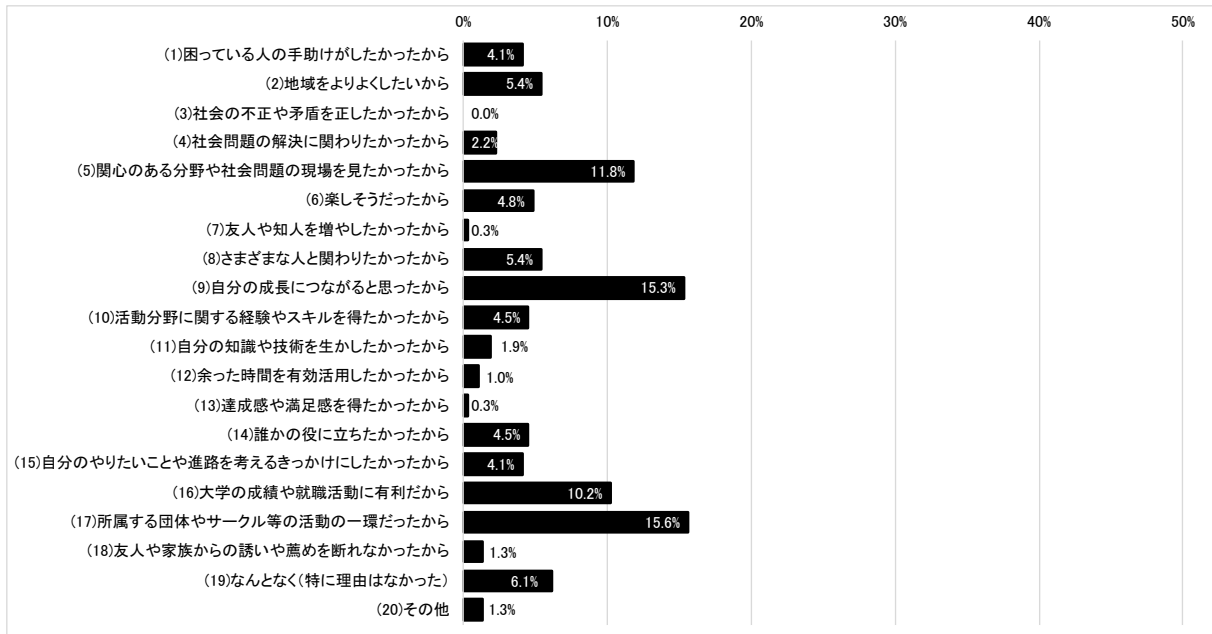


図 2-5-3 「授業等で参加」した中心的な動機（単数回答・n=314）

(6) 活動に参加してよかったこと/よくなかったこと

「自主的に参加」か「授業等で参加」かを問わず、活動に参加したことがある回答者（n=817）を対象に、参加してよかったこと（複数回答）についてみると、「楽しかった」（41.6%）、「ものの見方、考え方が広がった」（40.5%）、「相手から感謝された」（38.9%）、「達成感や満足感が得られた」（32.3%）の割合が高くなっている。[図 3-6-1]。

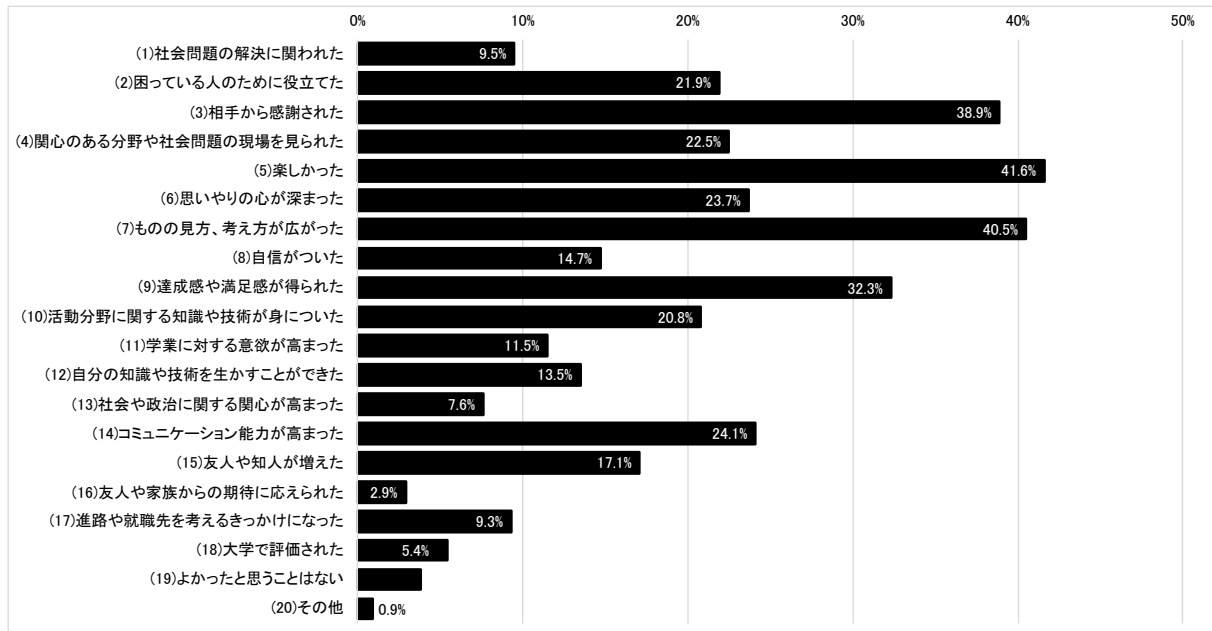


図 2-6-1 活動に参加してよかったこと（複数回答・n=817）

次に、「自主的に参加」および「授業等で参加」ごとに最もよかったこと（単数回答）についてみると、「自主的に参加」の場合(n=668)は「相手から感謝された」(15.6%)の割合が最も高く、ついで「ものの見方、考え方が広がった」(15.1%)、「楽しかった」(13.6%)の割合が高くなっている。「授業等で参加」の場合(n=314)は、「ものの見方、考え方が広がった」(18.8%)の割合が最も高く、ついで「関心のある分野や社会問題の現場を見られた」(13.1%)、「楽しかった」(11.5%)の割合が高くなっている[図 2-6-2, 図 2-6-3]。

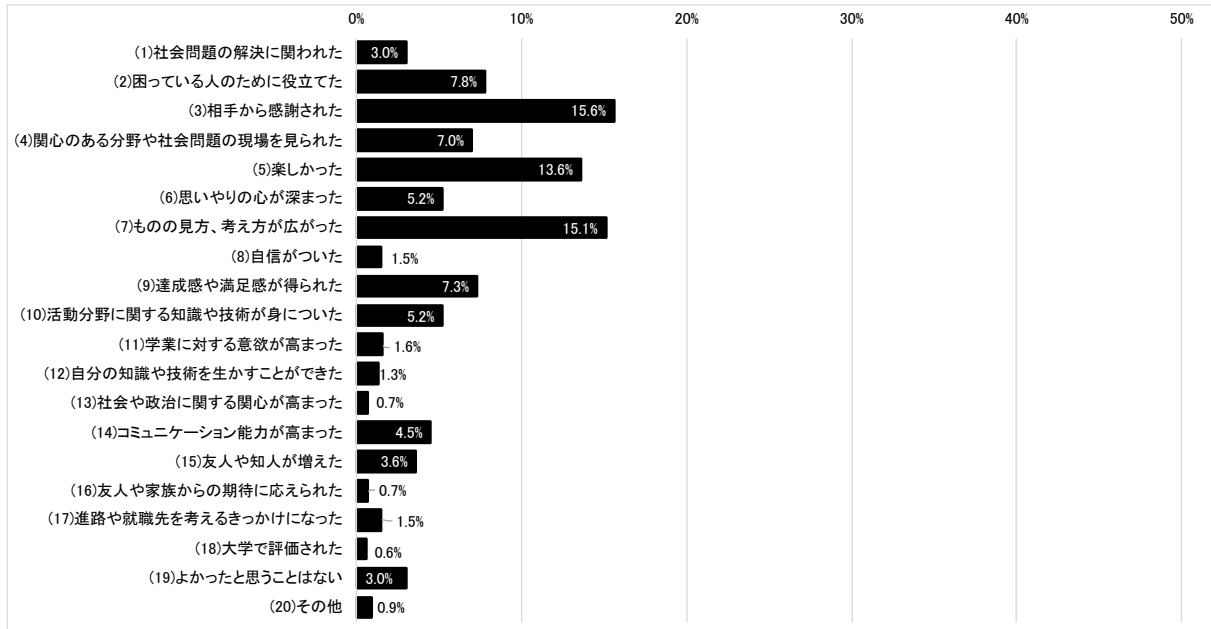


図 2-6-2 「自主的に参加」してよかったこと（単数回答・n=668）

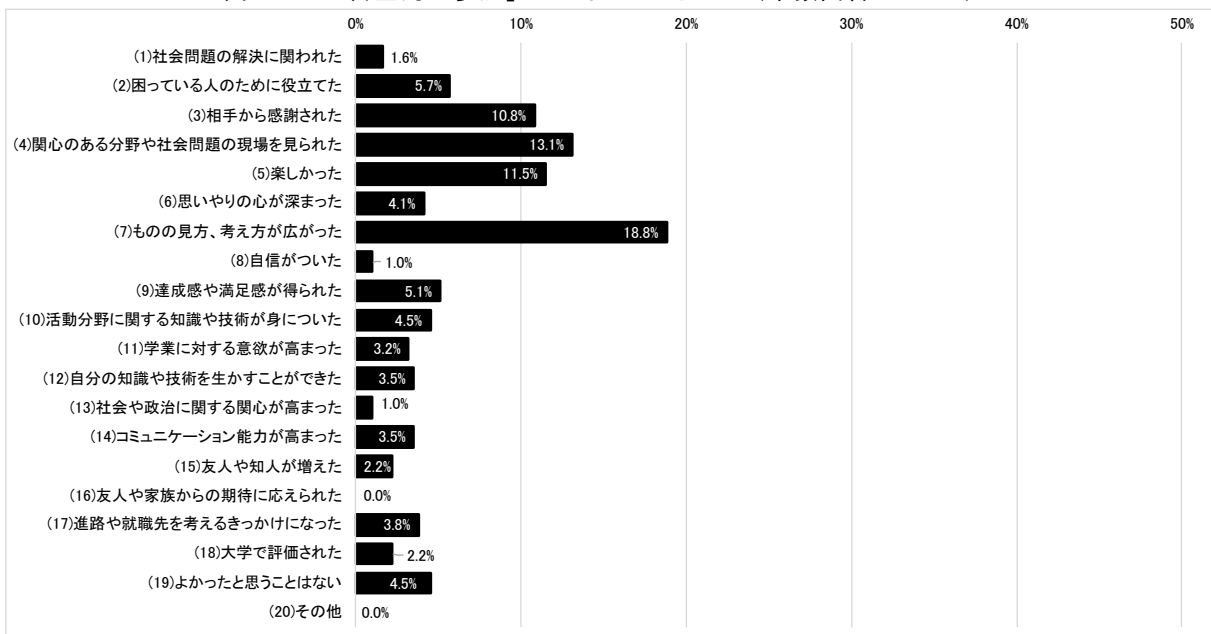


図 2-6-3 「授業等で参加」してよかったこと（単数回答・n=314）

「自主的に参加」か「授業等で参加」かを問わず、活動に参加したことがある回答者 (n=817) を対象に、参加してよくなかったこと (複数回答) についてみると、「よくなかったと思うことはない」を除くと「活動に時間が取られすぎた」(17.6%) の割合が最も高く、ついで「継続的に活動ができなかった」(14.7%)、「経費 (お金) がかかり過ぎた」(11.0%) の割合が高くなっている [図 2-6-4]。

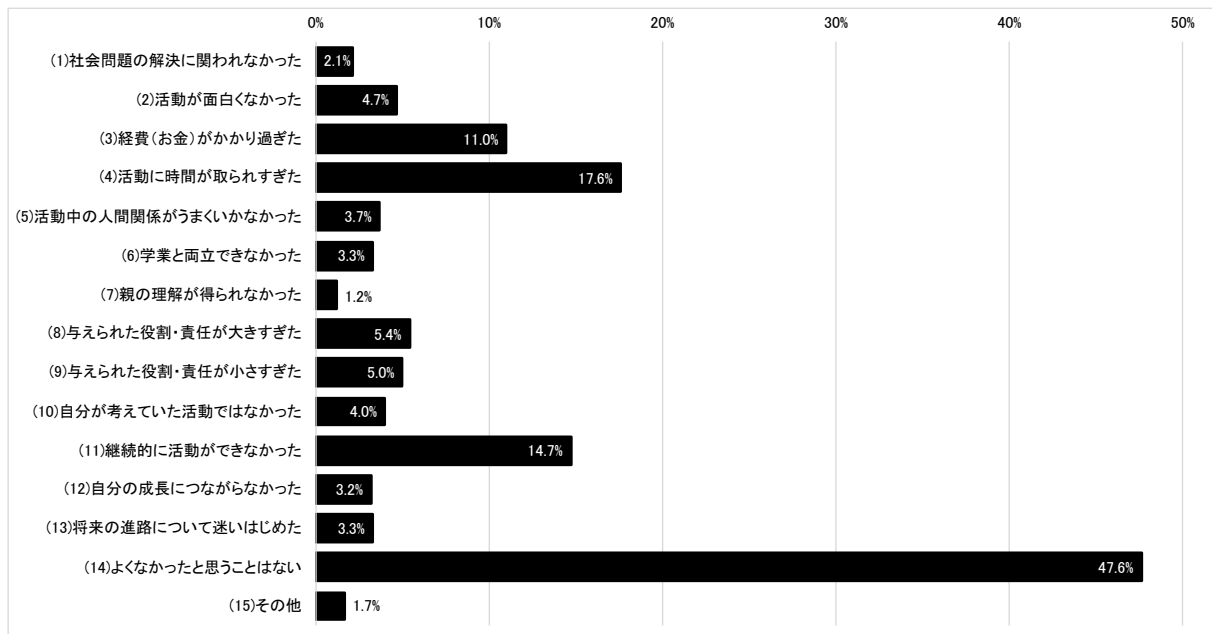


図 2-6-4 活動に参加してよくなかったこと (複数回答・n=817)

次に、「自主的に参加」および「授業等で参加」ごとに最もよくなかったこと (単数回答) についてみると、「よくなかったと思うことはない」を除くと、「自主的に参加」(n=668) の場合は「継続的に活動できなかった」(11.8%) の割合が最も高く、ついで「活動に時間が取られすぎた」(10.2%) の割合が高くなっている。「授業等で参加」(n=314) の場合は「活動に時間が取られすぎた」(15.3%) の割合が最も高く、ついで「継続的に活動できなかった」(10.5%) の割合が高くなっている [図 2-6-5, 図 2-6-6]。

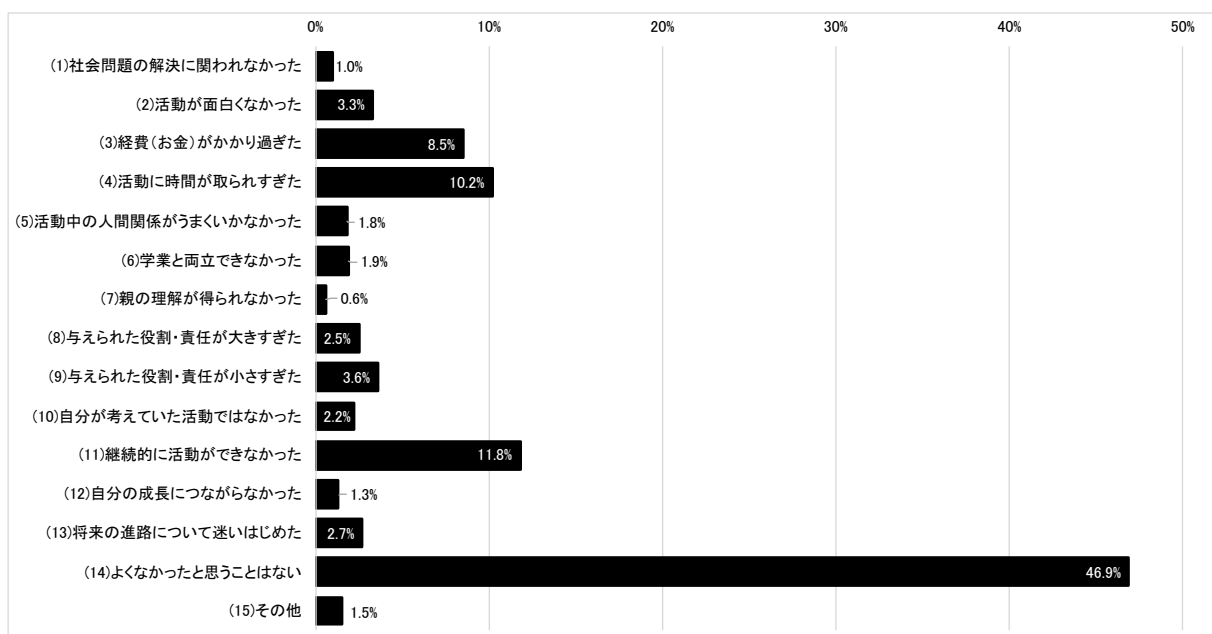


図 2-6-5 「自主的に参加」してよくなかったこと (単数回答・n=668)

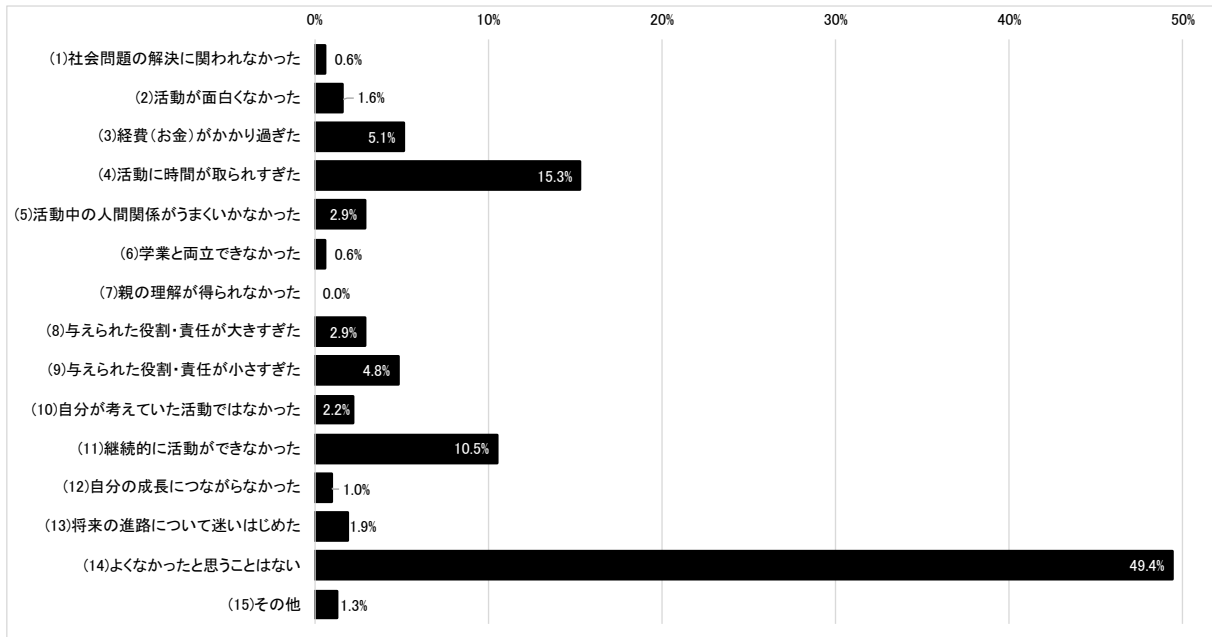


図 2-6-6 「授業等で参加」してよくなかったこと（単数回答・n=314）

(7) 自主的に参加した活動の概要

「自主的に参加」したことがある回答者（n=668）を対象に、活動した時間（複数回答）についてみると、「土日・祝日」（65.0%）の割合が最も高く、ついで「長期休暇中」（31.6%）の割合が高くなっている〔図 2-7-1〕。

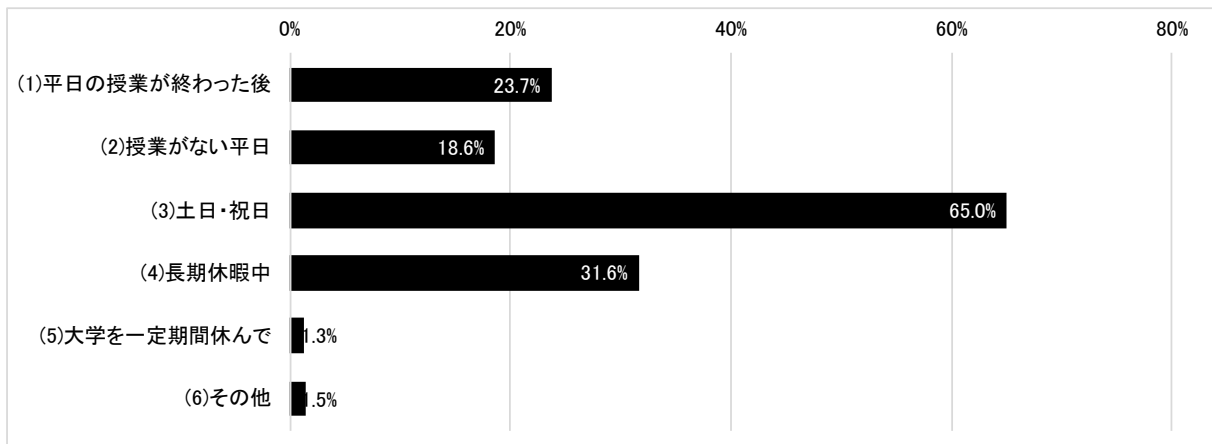


図 2-7-1 活動した時間（複数回答・n=668）

「自主的に参加」した場合の活動の形態（複数回答）についてみると、「大学内の部活動・サークル活動として行ったもの」（39.4%）の割合が最も高く、ついで「一人で行ったもの」（28.0%）の割合が高くなっている [図 2-7-2]。

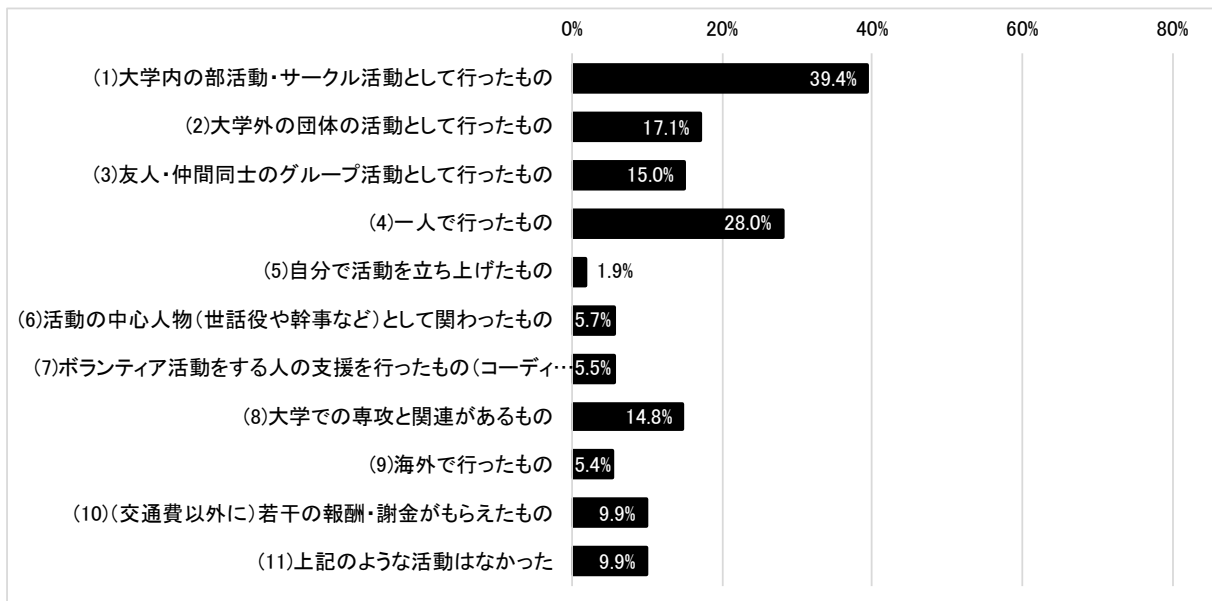


図 2-7-2 活動の形態（複数回答・n=668）

「自主的に参加」した場合の活動の情報源（複数回答）についてみると、「友人や知人、先輩ボランティアから紹介されて」（31.3%）の割合が最も高く、ついで「大学のサークル等の所属する団体から紹介されて」（25.9%）、「大学の授業で紹介されて」（19.2%）の割合が高くなっている [図 2-7-3]。

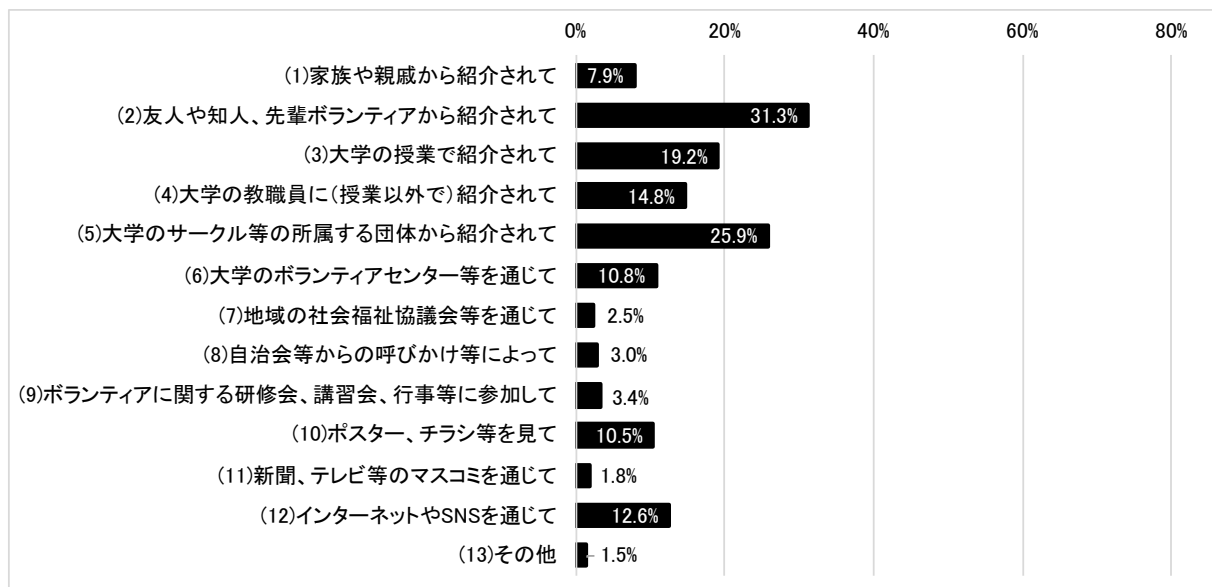


図 2-7-3 活動の情報源（複数回答・n=668）

(8) 授業等で参加した活動の位置付け

「授業等で参加」したことがある回答者（n=314）を対象に、「授業等で参加」した活動の位置付けについてみると、「ボランティアや社会貢献をテーマとした、実習中心の授業の一環として」（38.9%）と回答した割合が4割弱で最も高く、ついで「ゼミ・研究室の活動等の一環として」（21.7%）と回答した割合が2割強となっている [図 2-8]。

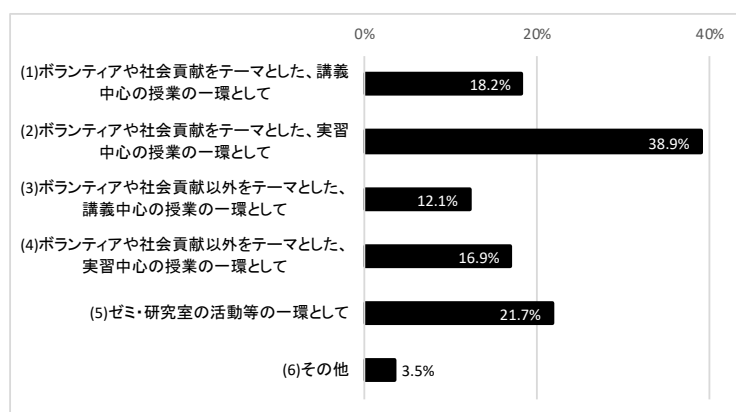


図 2-8 活動の位置づけ（複数回答・n=314）

(9) 活動に参加しなかった理由

入学後に活動に参加したことがない回答者（n=1359）のうち、今後、活動を「可能ならしてみたい」と回答した割合は約6割となっている [図 2-9-1]。

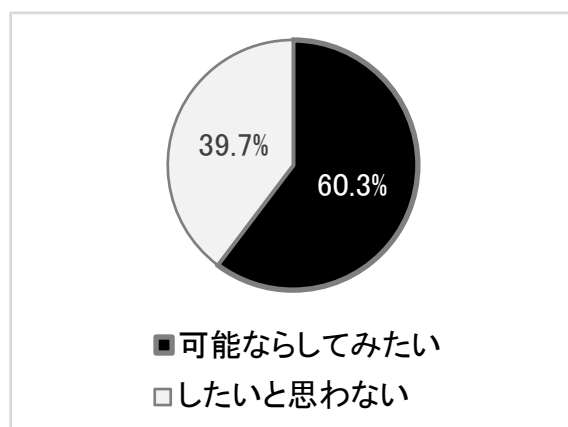


図 2-9-1 今後、可能なら活動してみたいと思うか（n=1359）

次に、[図 2-9-1] で活動を「可能ならしてみたい」と回答した場合 (n=819) の、これまで活動をしなかった理由 (複数回答) についてみると、「大学の授業が忙しい」(58.0%) の割合が最も高く、ついで「アルバイトが忙しい」(40.5%)、「情報が不足している」(38.9%) の順に割合が高くなっている [図 2-9-2]

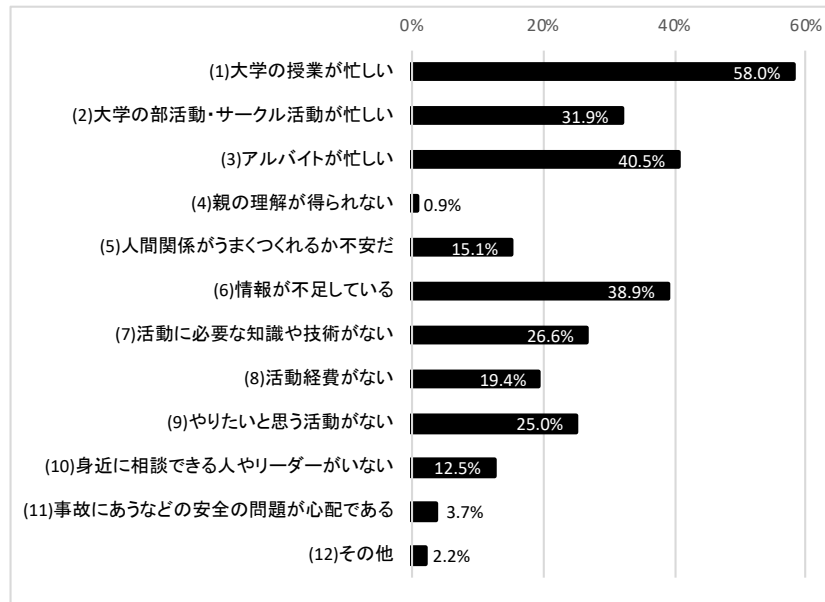


図 2-9-2 これまで活動をしなかった理由 (複数回答・n=819)

(10) 大学入学前の活動の状況

全ての回答者 (n=2176) を対象に、大学入学前のボランティア活動・社会貢献活動への参加状況についてみると、大学入学前になんらかのボランティア活動・社会貢献活動に参加したことがある割合は 43.5%となっている [図 2-10-1]。

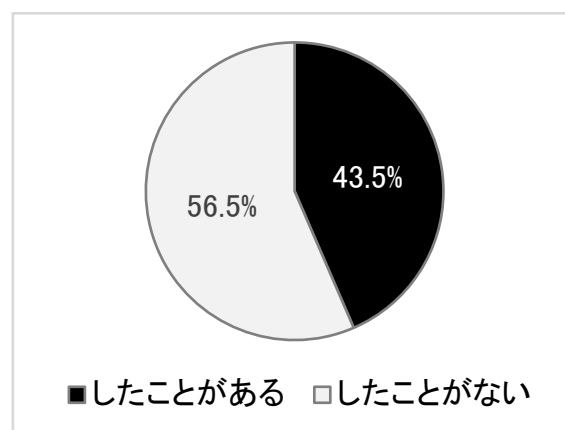


図 2-10-1 大学入学前の活動状況 (n=2176)

大学入学前に活動に「参加したことがある」場合（n=947）の、大学入学前に参加した活動の種類（複数回答）についてみると、「学校の授業や行事等の一環で参加したもの」（68.5%）と回答した割合が最も高く、ついで「地域活動の一環として」（38.1%）の割合が高くなっている [図 2-10-2]。

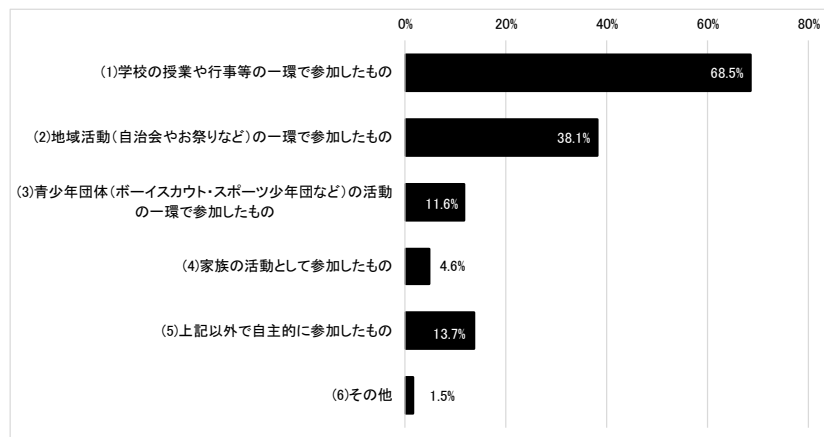


図 2-10-2 大学入学前に行った活動の種類（複数回答・n=947）

(11) ボランティア活動に対する意識

全ての回答者（n=2176）を対象に、ボランティア活動に関する意識（8項目）について、各項目の肯定的な回答（とても思う+少し思う）の割合（とても思う+少し思う）に注目すると、肯定的な意見の割合が高かった項目は「(1)自由時間があれば、ボランティア活動よりもアルバイトを優先する」（86.4%）、「(5)ボランティア活動で、交通費や昼食を受け取ってもよい」（78.0%）、「(7)これからの社会では、ボランティアの果たす役割が大きくなるはずだ」（70.5%）、「(8)今後は（今後も）、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい」（61.8%）、「(6)ボランティア活動で、報酬や謝金を受け取ってもよい」（56.2%）、の5項目となっている。また、肯定的な意見の割合が低かった項目は「(2)大学は、ボランティア活動の経験を入試の評価に加えるべきだ」（32.9%）、「(3)大学は、ボランティア活動の経験を単位に加えるべきだ」（40.3%）、「(4)企業は、ボランティア活動の経験を採用の評価に加えるべきだ」（47.9%）、の3項目となっている [図 2-11]。

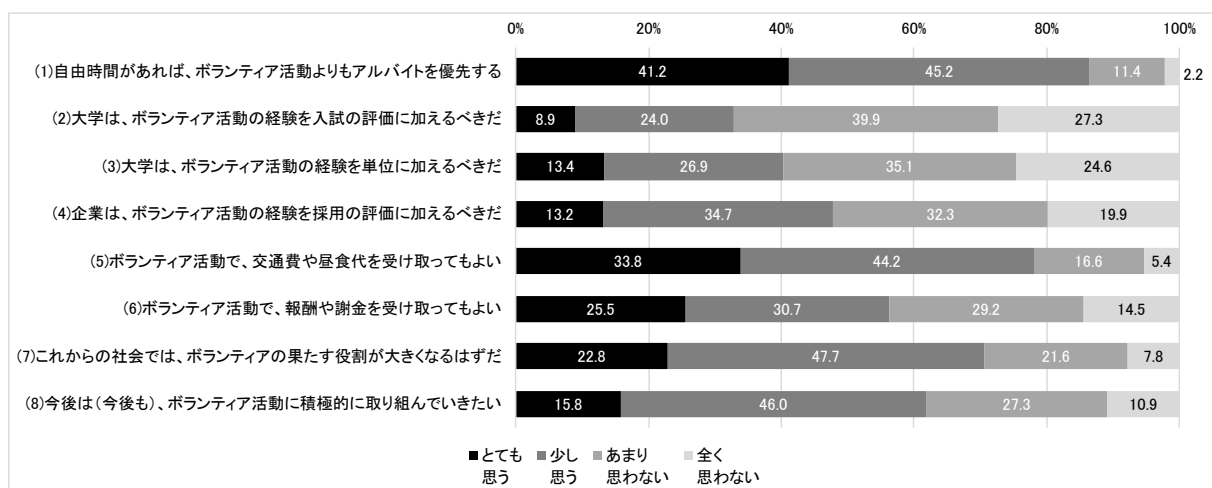


図 2-11 ボランティア活動に関する意識（n=2176）

(12) 大学生のボランティア活動のために求められる支援

全ての回答者（n=2176）を対象に、大学生のボランティア活動のための支援（17項目）について、「とても重要だと思う」と回答した割合に注目すると、「参加しやすい活動プログラムを提供すること」（53.5%）の割合が最も高く、ついで「ボランティア活動に関する情報を提供すること」（45.4%）、「ボランティアが集まれる場所や活動のための資材等を提供すること」（33.4%）の割合が高くなっている〔図 2-12-1〕。

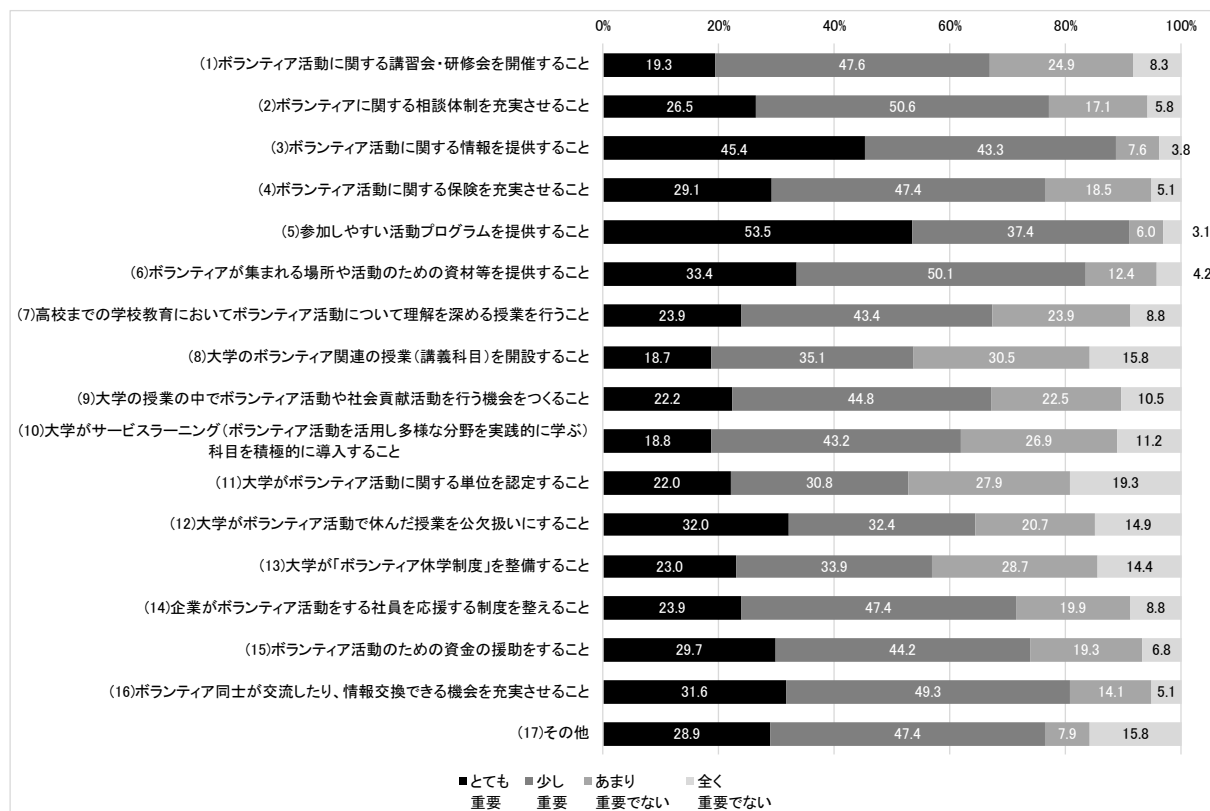


図 2-12-1 ボランティア活動のために求められる支援（n=2176）

今後、ボランティア活動に関する相談体制を充実させていくために、充実させる必要があると思う機関（複数回答）についてみると、「大学」（64.5%）の割合が最も高く、ついで「高校までの学校」（50.8%）となっている〔図 2-12-2〕。

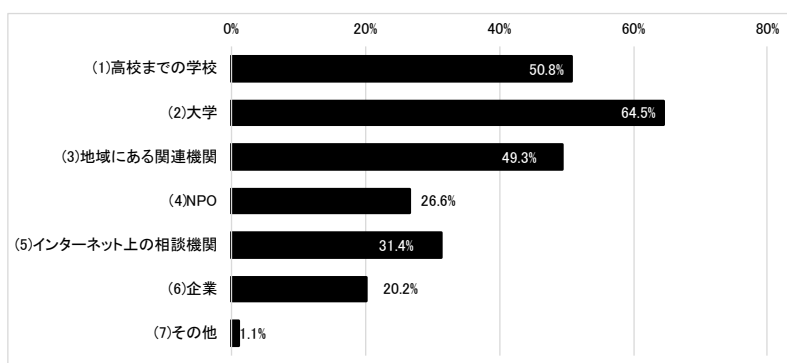


図 2-12-2 今後充実させるべき相談機関（複数回答・n=2176）

また、ボランティア活動に関する情報提供を充実させるために、充実させる必要があると思う機関（複数回答）についてみると、「SNSなどのソーシャルメディア」（75.0%）の割合が最も高く、ついで「大学」（57.6%）と回答した割合が高くなっている[図 2-12-3]。

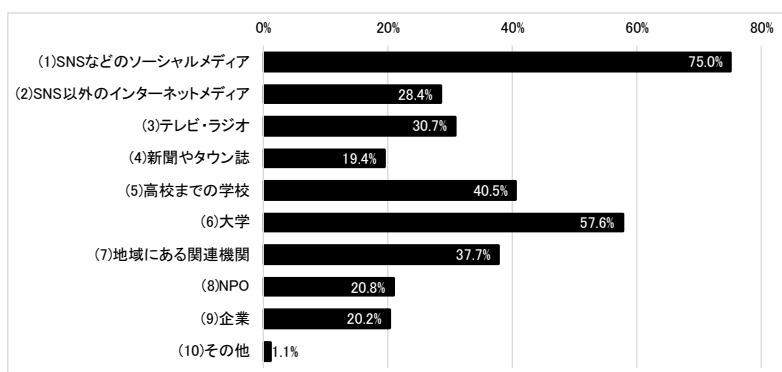


図 2-12-3 今後充実させるべき情報提供機関（複数回答・n=2176）

(13) ボランティア活動をしてみたい教育施設等

ボランティア活動をしてみたい教育関係の施設等についてみると、「図書館」（34.1%）の割合が最も高く、ついで「美術館・博物館」（25.8%）、「小学校（放課後）」（23.4%）、「中学校・高校（部活動）」（20.1%）の割合が高くなっている[図 2-13]。

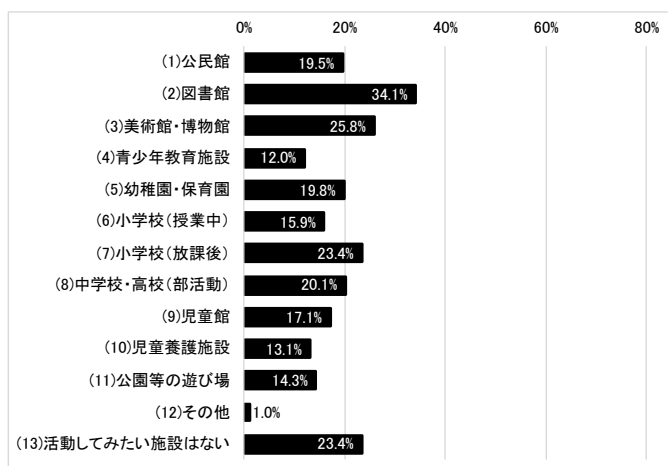


図 2-13 ボランティア活動をしてみたい社会教育施設等（複数回答・n=2176）

(14) 東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動に関する意識

2020年の東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動への興味について、「とても興味がある」と「少し興味がある」を合わせると、興味がある割合は4割強となっている[図 2-14-1]。

もし、ボランティア活動をするとしたら、してみたい活動内容としては「競技の運営支援」(37.6%)の割合が最も高く、ついで「会場(周辺)での観客案内」(35.2%)の割合が高くなっている[図 2-14-2]。

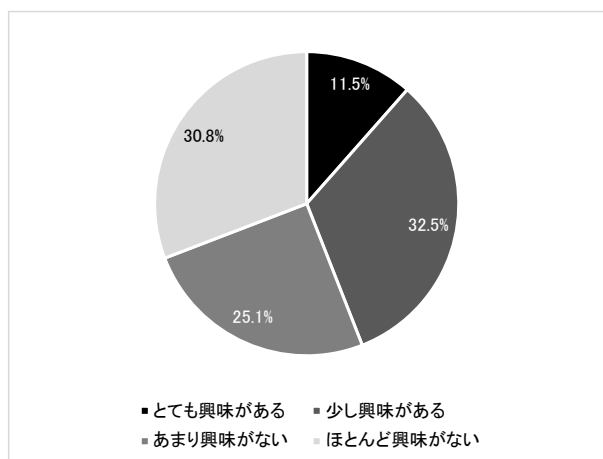


図 2-14-1 オリパラボランティアへの興味(n=2176)

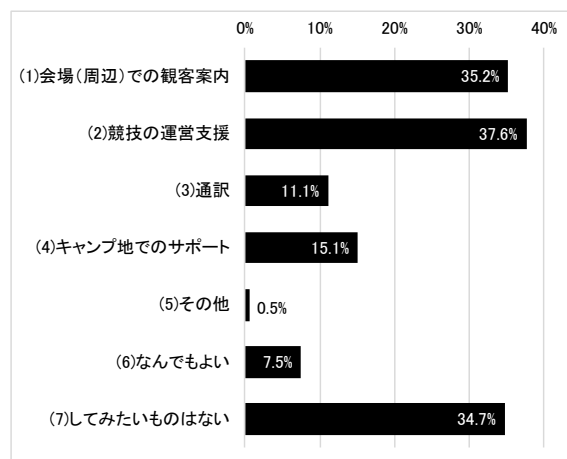


図 2-14-2 興味がある活動内容(複数回答・n=2176)

また、回答者のうち、2018年9月～12月に募集がされた東京オリンピック・パラリンピックのボランティアに応募した割合は2.3%であった[図 2-14-3]。

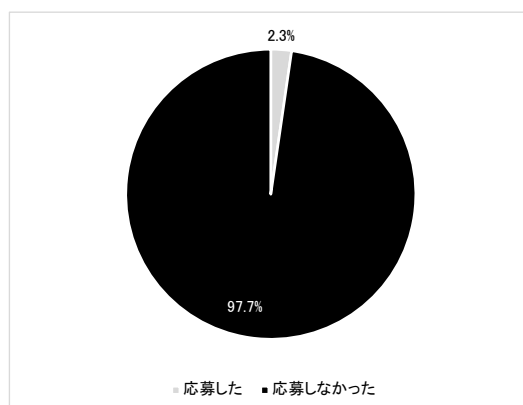


図 2-14-3 オリパラボランティアへの応募 (n=2176)

(15) 大学によるボランティア活動への支援とのかかわり

大学が行うボランティア活動に対する支援とのかかわりについてみると、「大学でボランティアに関連する講義を受講したこと」がある割合は1割強、大学でボランティアに関する相談や問い合わせをしたこと」がある割合は1割弱、大学でボランティアに関する掲示板を見たこと」がある割合は約4割となっている [図 2-15-1]。

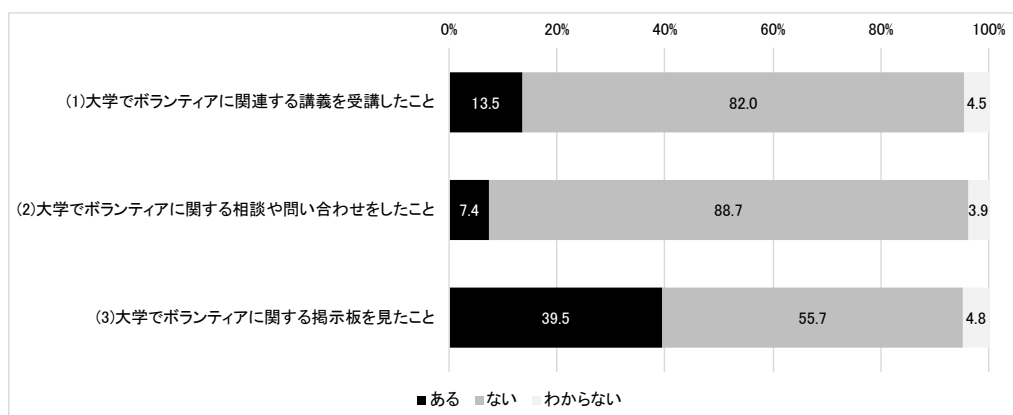


図 2-15-1 大学によるボランティア支援とのかかわり (n=2176)

大学で、ボランティアに関する窓口の場所を「知っている」割合は26.7%となっている [図 2-15-2]。窓口の場所を「知っている」と回答した回答者 (n=582) を対象に、窓口の場所についてみると、「ボランティアに関することを専門的に扱う窓口」である場合が26.3%となっている [図 2-15-3]。また、窓口の場所を「知っている」と回答した回答者 (n=582) のうち実際に窓口を利用したことがある割合は5割弱（「利用したことはない」割合が52.6%）となっている [図 2-15-4]。

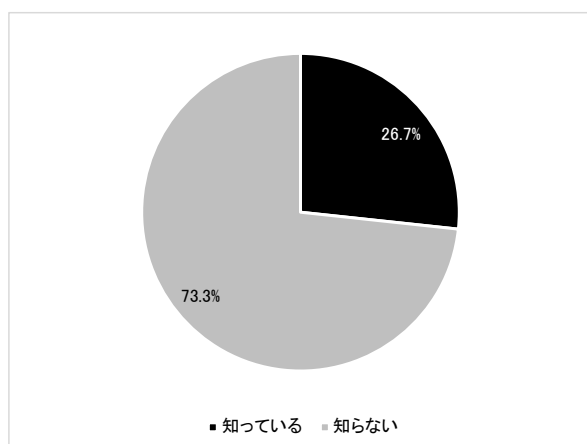


図 2-15-2 大学の窓口の認知度 (n=2176)

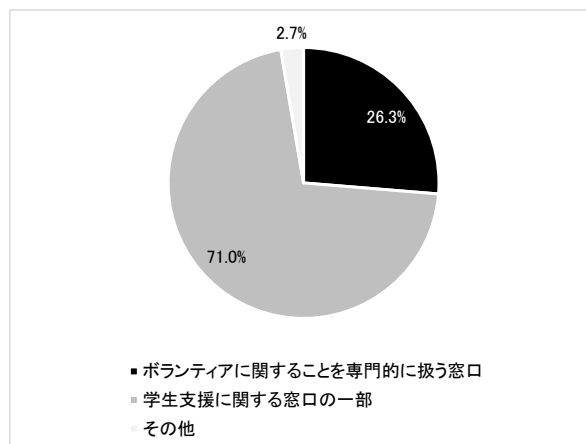


図 2-15-3 大学の窓口のある場所 (n=582)

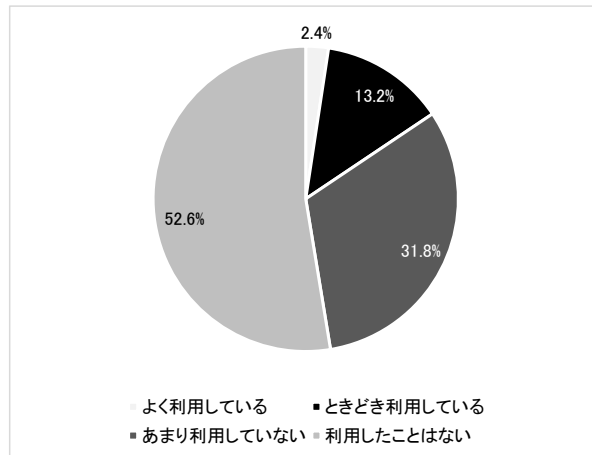


図 2-15-4 大学の窓口の利用状況 (n=582)

大学のボランティア活動への支援とのかかわりと、ボランティア活動・社会貢献活動の実施状況との関係についてみると、大学のボランティア活動に対する支援と関わりがあるほど、「自主的に参加」したことがある割合と、「授業等で参加」したことがある割合が高い傾向が見られる〔図 2-15-5～図 2-15-16〕

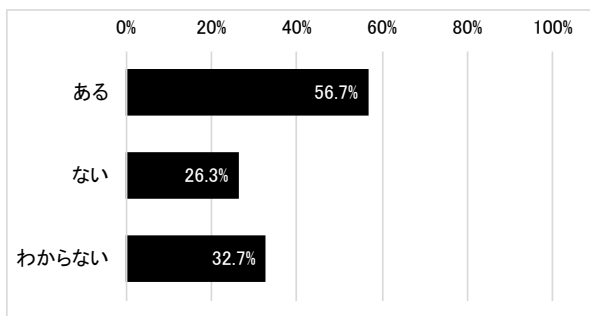


図 2-15-5 ボランティアに関する講義の受講経験 × 「自主的に参加」

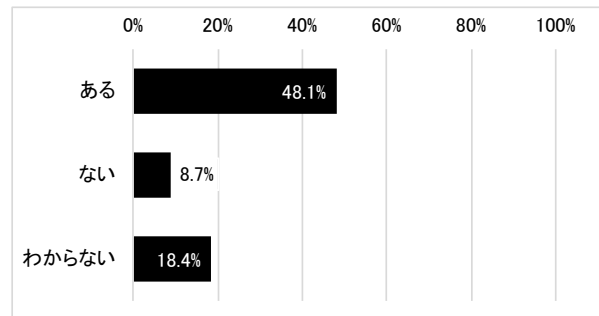


図 2-15-6 ボランティアに関する講義の受講経験 × 「授業等で参加」

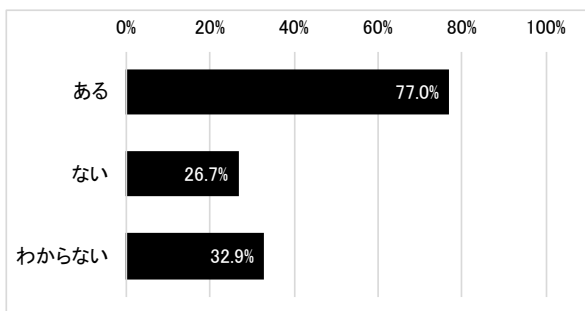


図 2-15-7 ボランティアに関する相談・問い合わせ経験 × 「自主的に参加」

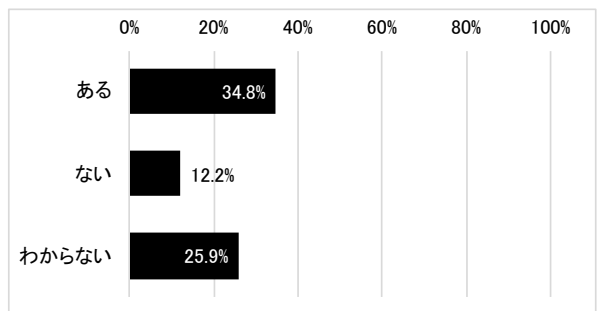


図 2-15-8 ボランティアに関する相談・問い合わせ経験 × 「授業等で参加」

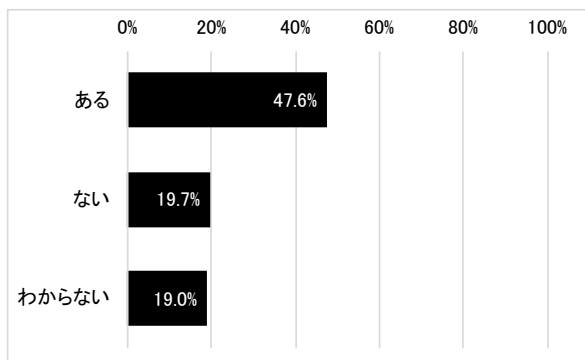


図 2-15-9 ボランティアに関する掲示板を見たこと × 「自主的に参加」

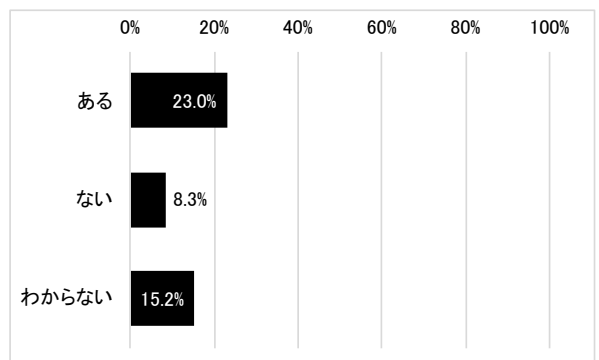


図 2-15-10 ボランティアに関する掲示板を見たこと × 「授業等で参加」

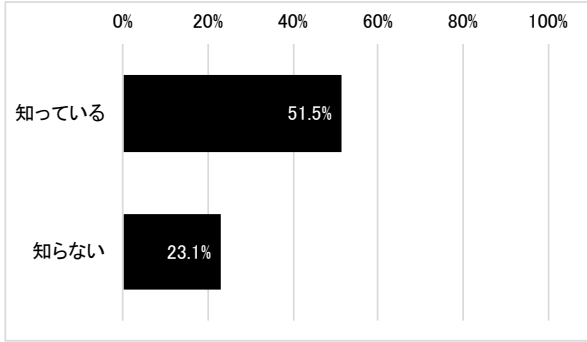


図 2-15-11 学内のボランティア窓口を知っている×「自主的に参加」

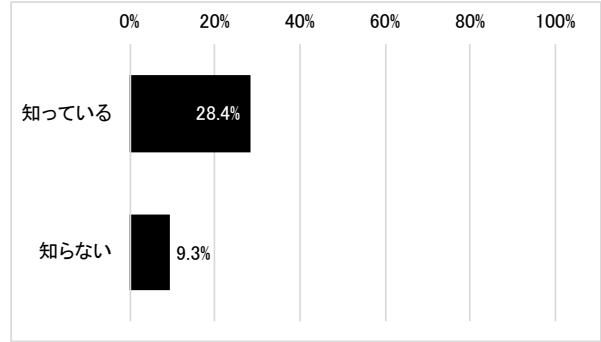


図 2-15-12 学内のボランティア窓口を知っている×「授業等で参加」

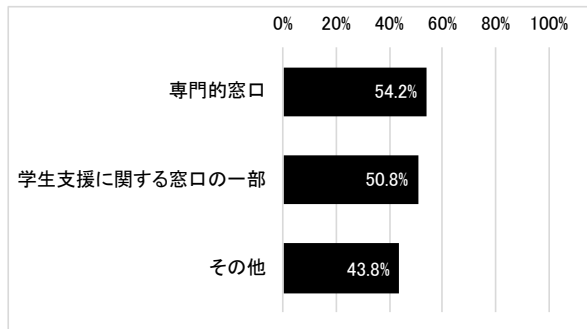


図 2-15-13 学内のボランティア窓口の設置場所×「自主的に参加」

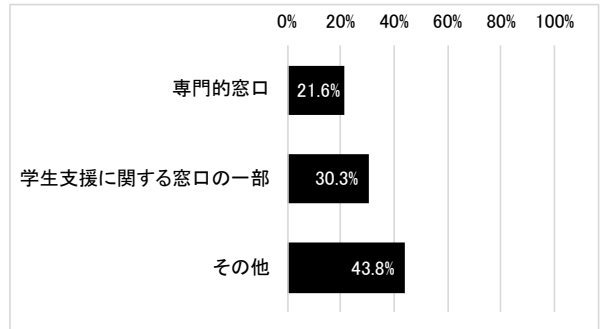


図 2-15-14 学内のボランティア窓口の設置場所×「授業等で参加」

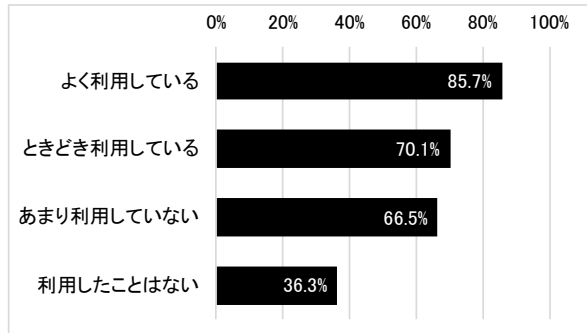


図 2-15-15 ボランティアに関する窓口の利用状況×「自主的に参加」

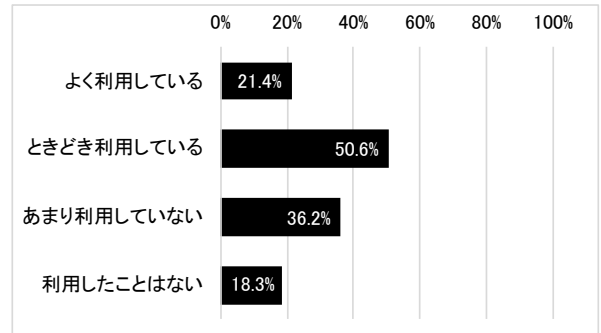


図 2-15-16 ボランティアに関する窓口の利用状況×「授業等で参加」

大学に入学する前のボランティア活動・社会貢献活動の経験と、大学のボランティア活動への支援とのかかわりとの関係についてみると、入学前にボランティア活動・社会貢献活動の経験があるほど、入学後に大学のボランティア活動への支援とかかわる割合が高くなる傾向が見られる〔図 2-15-17～図 2-15-21〕。

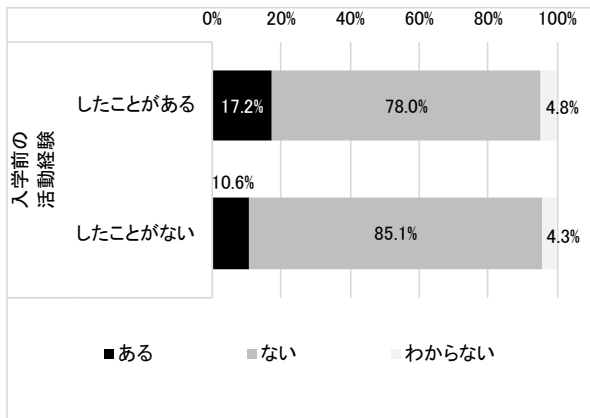


図 2-15-17 入学前の活動経験×ボランティア関連講義の受講状況

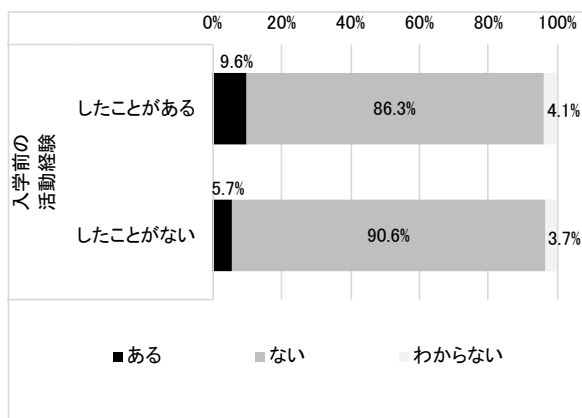


図 2-15-18 入学前の活動経験×ボランティアに関する窓口の利用状況

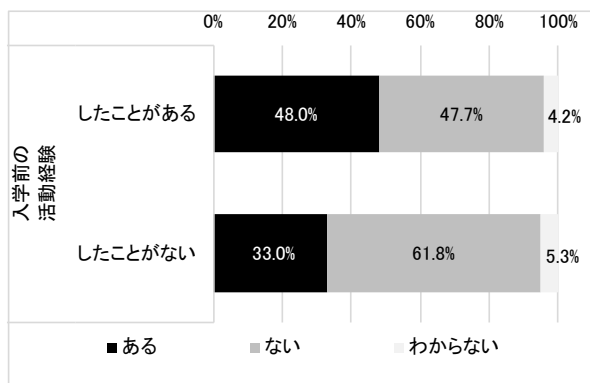


図 2-15-19 入学前の活動経験×ボランティアに関する掲示板を見たこと

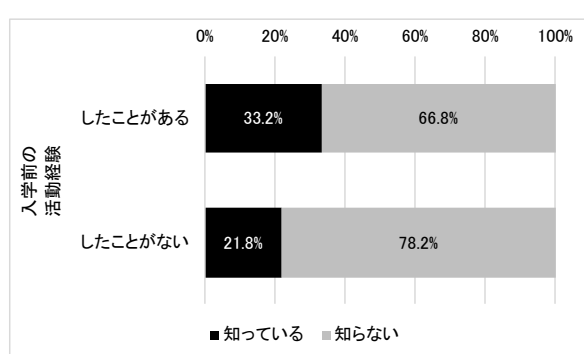


図 2-15-20 入学前の活動経験×学内のボランティア窓口を知っている

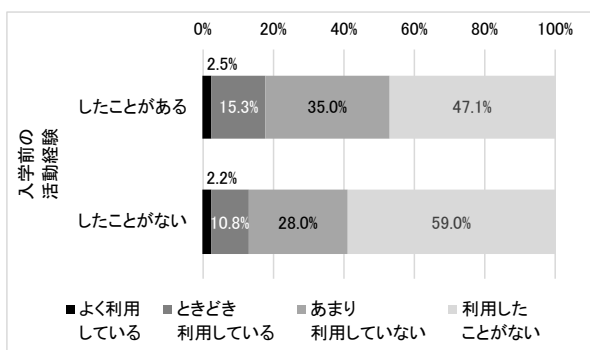


図 2-15-21 入学前の活動経験×学内のボランティア窓口の利用状況

(16) 子供の頃の体験とボランティア活動・社会貢献活動の実施状況の関係

本調査では、「小学校高学年」と「中学校」の2つの時期の〈基本的生活習慣〉〈お手伝い〉〈家族行事〉に関する項目として、以下の項目をどのくらいしたことがあるかを3件法（「何度もある」「少しある」「ほとんどない」）で質問している。「何度もある」を2点、「少しある」を1点、「ほとんどない」を0点として、各項目の得点の和をそれぞれ〈基本的生活習慣〉スコア、〈お手伝い〉スコア、〈家族行事〉スコアとし、得点分布をもとにそれぞれ高群・中群・低群の3群に分けて集計した。

〈基本的生活習慣〉

- ・家で「おはようございます」「いただきます」「いってきます」「ただいま」「おやすみなさい」といったあいさつをすること
- ・自分のふとんの上げ下ろしやベッドを整頓したこと
- ・朝、人に起こされないで自分で起きたこと
- ・夜更かしをして、遅くまで起きていたこと

〈お手伝い〉

- ・買い物の手伝いをしたこと
- ・料理（準備や後片づけを含む）の手伝いをしたこと
- ・家の中の掃除やごみ出しの手伝いをしたこと
- ・洗濯（とりこむ・たたむを含む）の手伝いをしたこと

〈家族行事〉

- ・家族の誕生日を祝ったこと
- ・家族で季節の行事（クリスマス、節分等）をしたこと
- ・家族で旅行に行ったこと
- ・家族でスポーツをしたり自然の中で遊んだりしたこと

① 子供の頃の生活習慣とボランティア活動・社会貢献活動の実施状況の関係

子供の頃の〈基本的生活習慣〉〈お手伝い〉〈家族行事〉の実施状況と、ボランティア活動・社会貢献活動の実施状況の関係についてみると、小学校高学年および中学校での〈基本的生活習慣〉スコア、〈お手伝い〉スコア、〈家族行事〉スコアが高いほど、大学入学後にボランティア活動・社会貢献活動に「自主的に参加」した割合、「授業等で参加」した割合、および入学前に活動に参加した割合がいずれも高い傾向が見られる〔図2-16-1～図2-16-18〕。

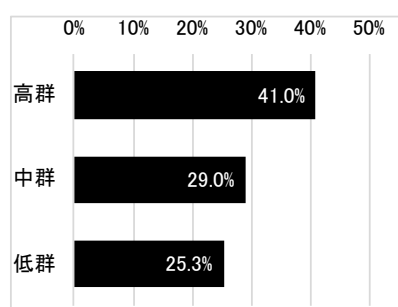


図 2-16-1 〈基本的生活習慣（小学校高学年）スコア × 「自主的に参加」した割合

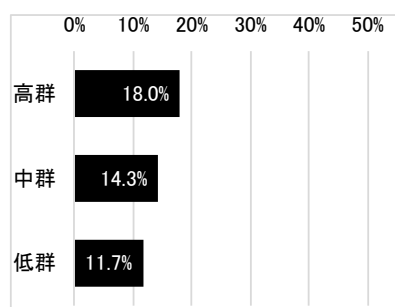


図 2-16-2 〈基本的生活習慣（小学校高学年）スコア × 「授業等で参加」した割合

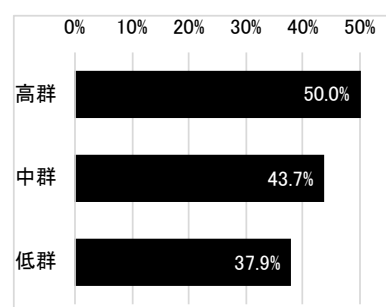


図 2-16-3 〈基本的生活習慣（小学校高学年）スコア × 入学前に活動した割合

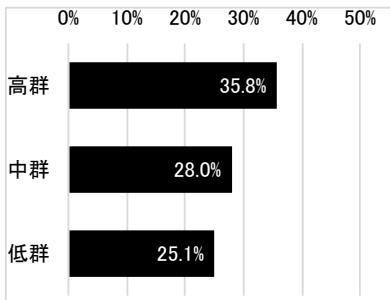


図 2-16-4 <基本的な生活習慣（中学校）スコア
×「自主的に参加」した割合



図 2-16-5 <基本的な生活習慣（中学校）スコア
×「授業等で参加」した割合

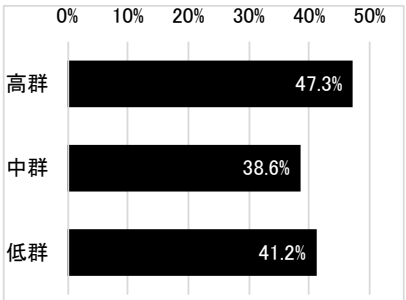


図 2-16-6 <基本的な生活習慣（中学校）スコア
×入学前に活動した割合

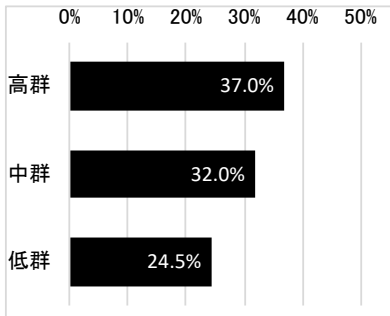


図 2-16-7 <お手伝い（小学校高学年）スコア
×「自主的に参加」した割合



図 2-16-8 <お手伝い（小学校高学年）スコア
×「授業等で参加」した割合

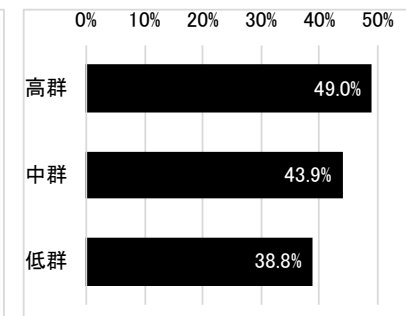


図 2-16-9 <お手伝い（小学校高学年）スコア
×入学前に活動した割合

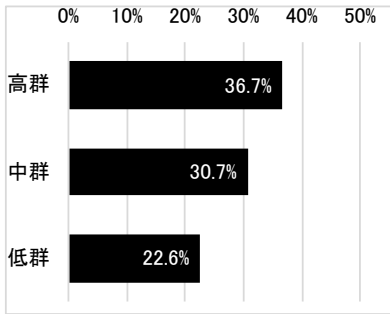


図 2-16-10 <お手伝い（中学校）スコア
×「自主的に参加」した割合

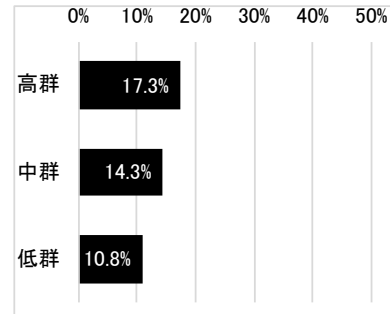


図 2-16-11 <お手伝い（中学校）スコア
×「授業等で参加」した割合

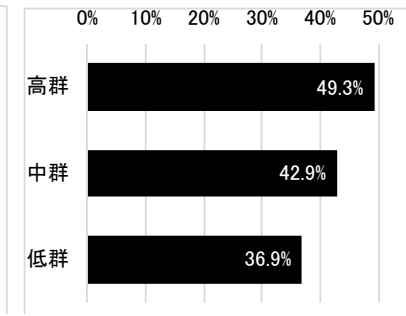


図 2-16-12 <お手伝い（中学校）スコア
×入学前に活動した割合

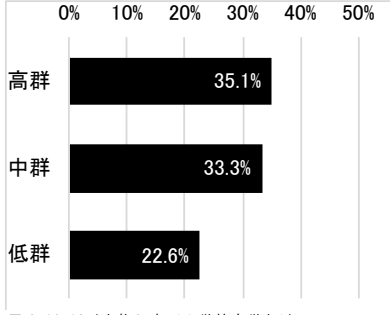


図 2-16-13 <家族行事（小学校高学年）スコア
×「自主的に参加」した割合

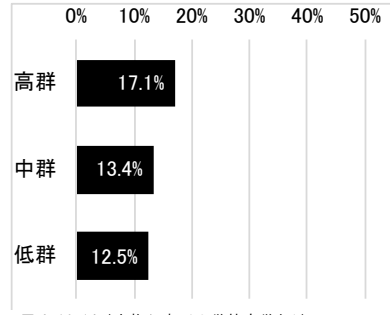


図 2-16-14 <家族行事（小学校高学年）スコア
×「授業等で参加」した割合

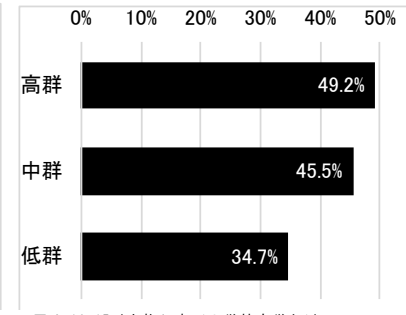


図 2-16-15 <家族行事（小学校高学年）スコア
×入学前に活動した割合

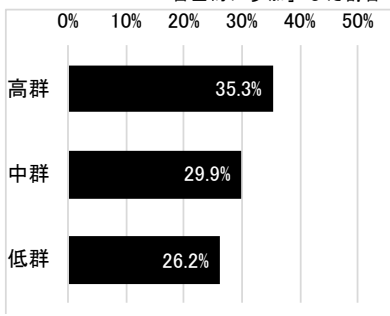


図 2-16-16 <家族行事（中学校）スコア
×「自主的に参加」した割合

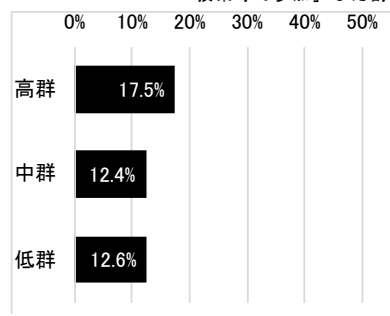


図 2-16-17 <家族行事（中学校）スコア
×「授業等で参加」した割合

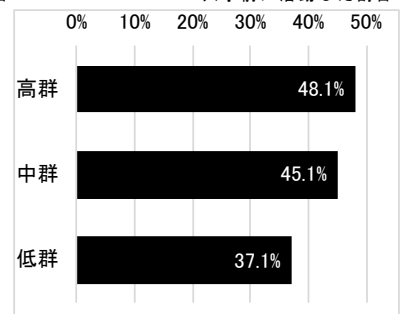


図 2-16-18 <家族行事（中学校）スコア
×入学前に活動した割合

② 子供の頃の体験とボランティア活動・社会貢献活動の実施状況の関係

小学生の頃の体験や生活の状況と、ボランティア活動・社会貢献活動の実施状況の関係についてみると、小学生の頃に友達との遊びや、自然体験、地域活動をしている割合が高いほど、大学入学後に「自主的に参加」した割合、「授業等で参加」した割合、および入学前に活動に参加した割合がいずれも高い傾向が見られるが、テレビゲーム、読書、勉強等ではこうした傾向は見られない〔図 2-16-19～図 2-16-57〕。

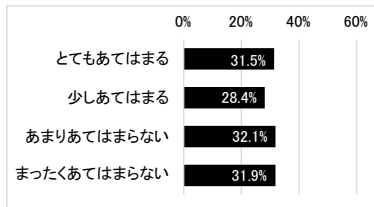


図 2-16-19 学校の友だちとよく遊んだ×
「自主的に参加」した割合

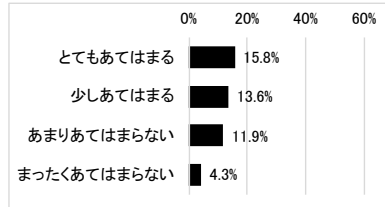


図 2-16-20 学校の友だちとよく遊んだ×
「授業等で参加」した割合

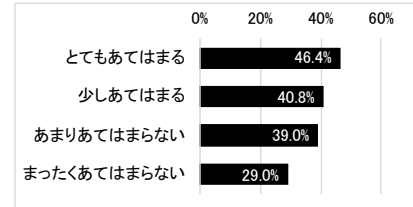


図 2-16-21 学校の友だちとよく遊んだ×
入学前に活動した割合

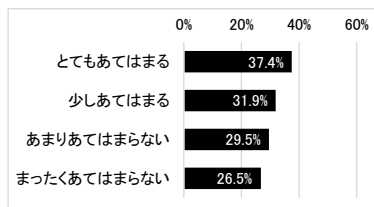


図 2-16-22 近所の友だちとよく遊んだ×
「自主的に参加」した割合

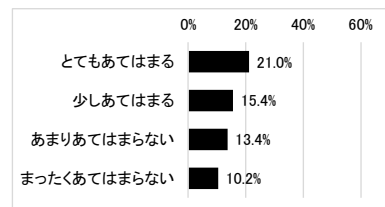


図 2-16-23 近所の友だちとよく遊んだ×
「授業等で参加」した割合

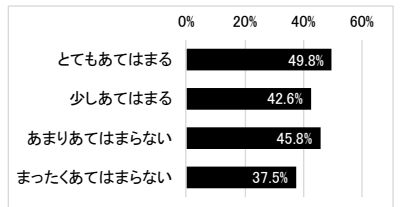


図 2-16-24 近所の友だちとよく遊んだ×
入学前に活動した割合

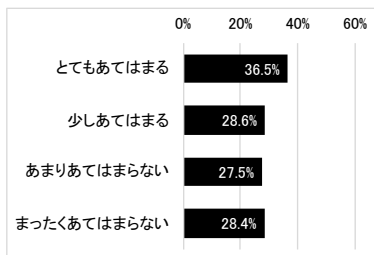


図 2-16-25 きょうだいや親戚の子供とよく遊んだ×
「自主的に参加」した割合

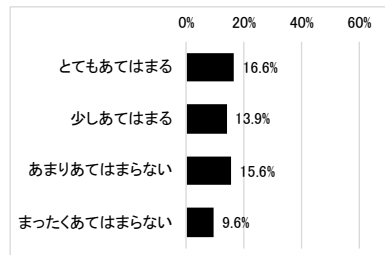


図 2-16-26 きょうだいや親戚の子供とよく遊んだ×
「授業等で参加」した割合

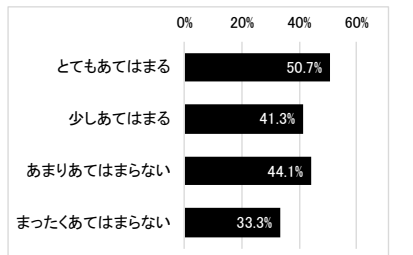


図 2-16-27 きょうだいや親戚の子供とよく遊んだ×
入学前に活動した割合

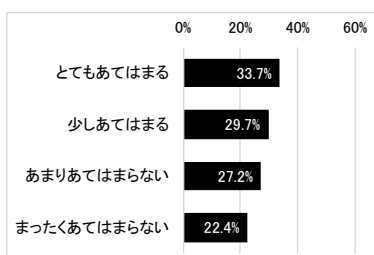


図 2-16-28 公園や広場など屋外でよく遊んだ×
「自主的に参加」した割合

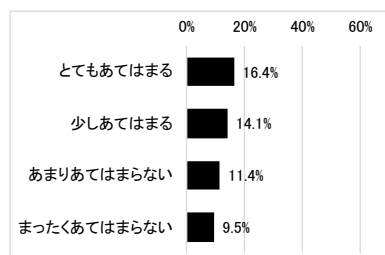


図 2-16-29 公園や広場など屋外でよく遊んだ×
「授業等で参加」した割合

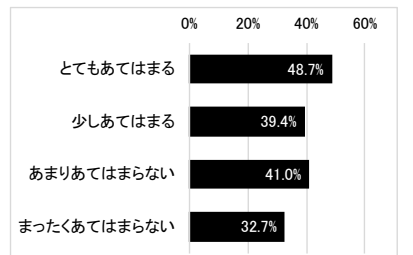


図 2-16-30 公園や広場など屋外でよく遊んだ×
入学前に活動した割合

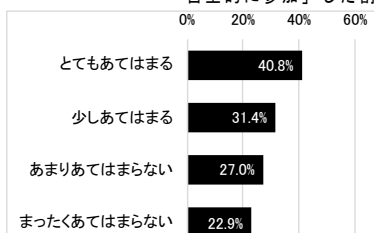


図 2-16-31 自然の中でよく活動した×
「自主的に参加」した割合

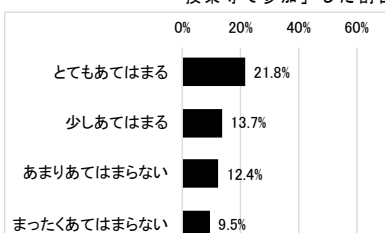


図 2-16-32 自然の中でよく活動した×
「授業等で参加」した割合

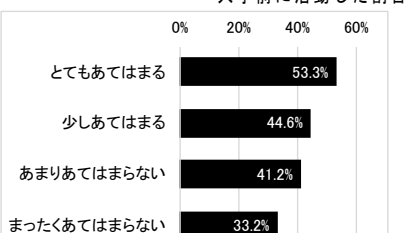


図 2-16-33 自然の中でよく活動した××
入学前に活動した割合

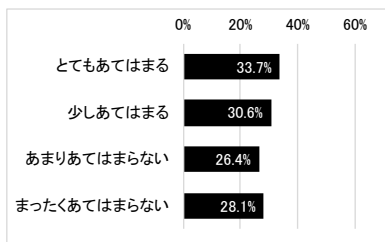


図 2-16-34 スポーツなどでよく身体を動かした×
「自主的に参加」した割合

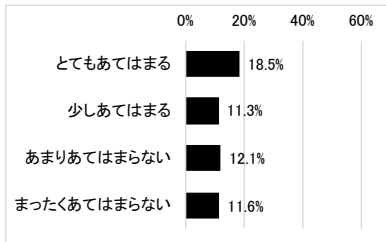


図 2-16-35 スポーツなどでよく身体を動かした×
「授業等で参加」した割合

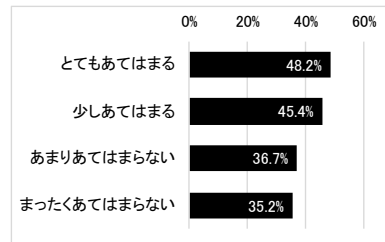


図 2-16-36 スポーツなどでよく身体を動かした×
入学前に活動した割合

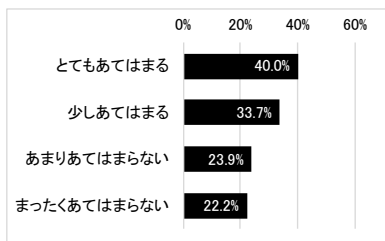


図 2-16-37 地域の行事によく参加した×
「自主的に参加」した割合

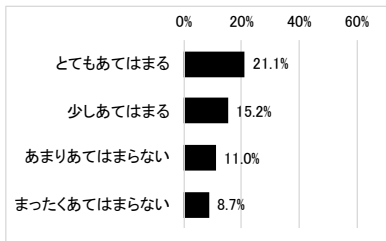


図 2-16-38 地域の行事によく参加した×
「授業等で参加」した割合

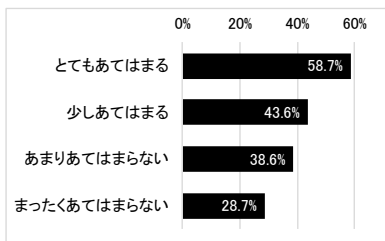


図 2-16-39 地域の行事によく参加した×
入学前に活動した割合

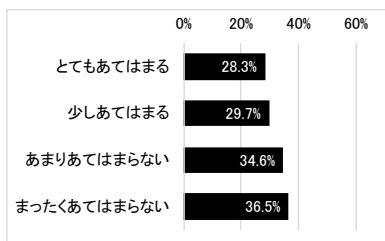


図 2-16-40 テレビゲームやコンピューターゲームをよくした×
「自主的に参加」した割合

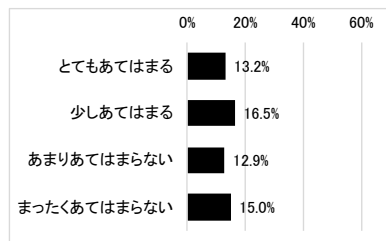


図 2-16-41 テレビゲームやコンピューターゲームをよくした×
「授業等で参加」した割合

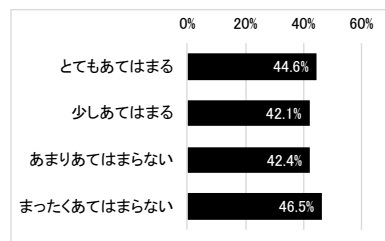


図 2-16-42 テレビゲームやコンピューターゲームをよくした×
入学前に活動した割合

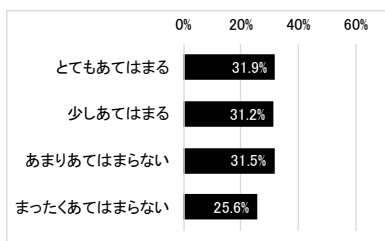


図 2-16-43 本をよく読んだ×
「自主的に参加」した割合

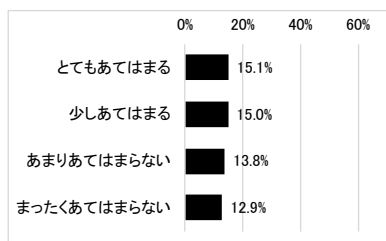


図 2-16-44 本をよく読んだ×
「授業等で参加」した割合

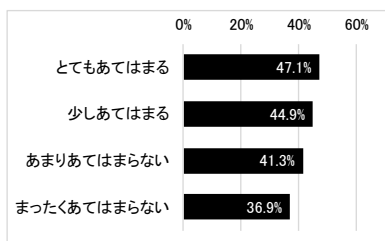


図 2-16-45 本をよく読んだ×
入学前に活動した割合

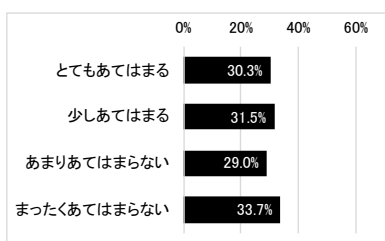


図 2-16-46 勉強が得意だった×
「自主的に参加」した割合

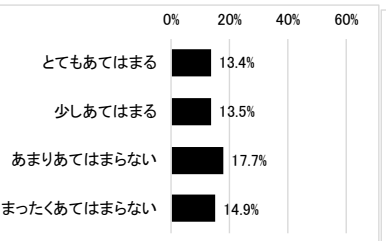


図 2-16-47 勉強が得意だった×
「授業等で参加」した割合

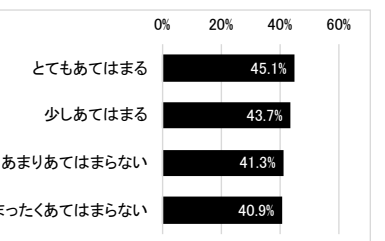


図 2-16-48 勉強が得意だった×
入学前に活動した割合

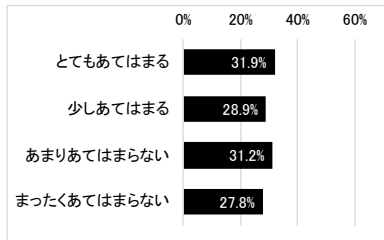


図 2-16-49 宿題を忘れずにやっていた × 「自主的に参加」した割合

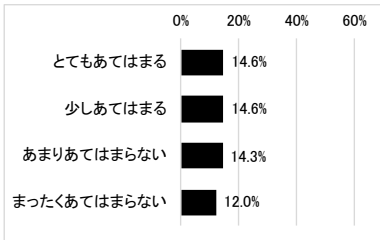


図 2-16-50 宿題を忘れずにやっていた × 「授業等で参加」した割合

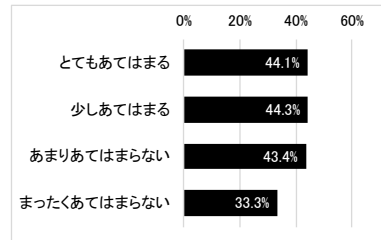


図 2-16-51 宿題を忘れずにやっていた × 入学前に活動した割合

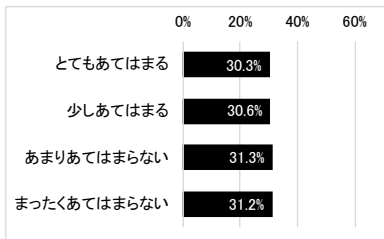


図 2-16-52 塾や習い事に通うことが多かった × 「自主的に参加」した割合

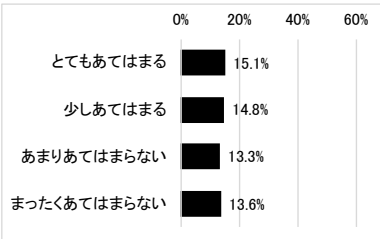


図 2-16-53 塾や習い事に通うことが多かった × 「授業等で参加」した割合

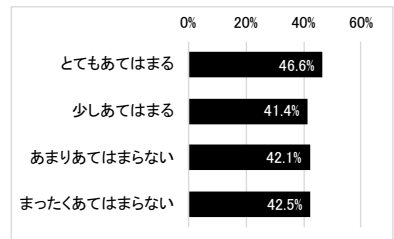


図 2-16-54 塾や習い事に通うことが多かった × 入学前に活動した割合

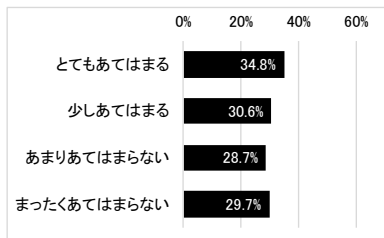


図 2-16-55 家は経済的に裕福だった × 「自主的に参加」した割合

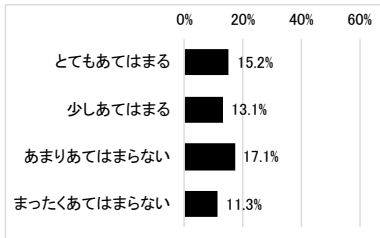


図 2-16-56 家は経済的に裕福だった × 「授業等で参加」した割合

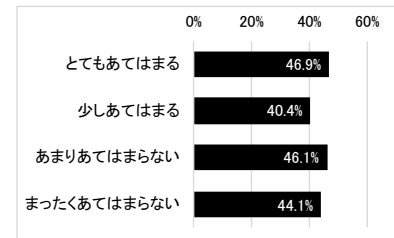


図 2-16-57 家は経済的に裕福だった × 入学前に活動した割合

③ 学校での役割等とボランティア活動等の実施状況の関係

大学入学までの学校での役割等と、その後のボランティア活動・社会貢献活動の実施状況との関係についてみると、大学入学までに学校での各種の役員・委員や、職場体験、青少年団体での活動をしているほど、大学入学後に「自主的に参加」した割合、「授業等で参加」した割合、および入学前に活動に参加した割合がいずれも高い傾向が見られる〔図 2-16-58～図 2-16-75〕。

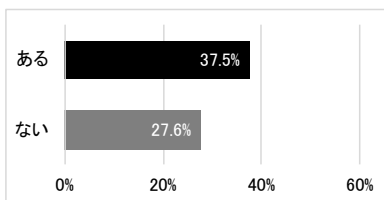


図 2-16-58 児童会・生徒会の役員経験 × 「自主的に参加」した割合

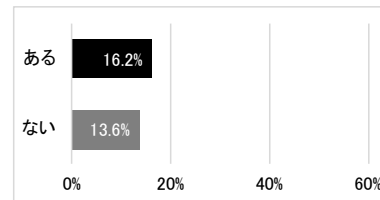


図 2-16-59 児童会・生徒会の役員経験 × 「授業等で参加」した割合

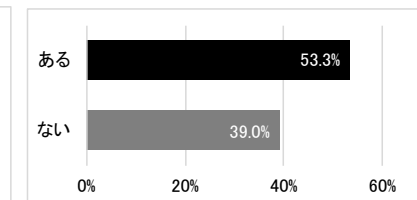


図 2-16-60 児童会・生徒会の役員経験 × 入学前に活動した割合

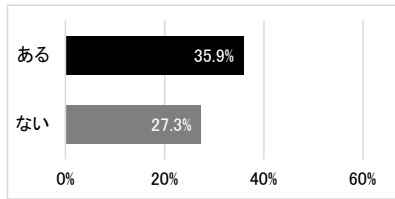


図 2-16-61 体育祭や文化祭の実行委員経験 × 「自主的に参加」した割合

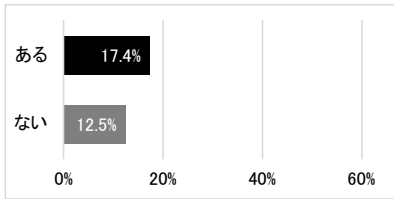


図 2-16-62 体育祭や文化祭の実行委員経験 × 「授業等で参加」した割合

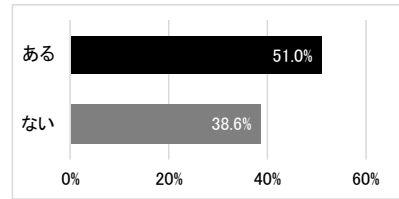


図 2-16-63 体育祭や文化祭の実行委員経験 × 入学前に活動した割合

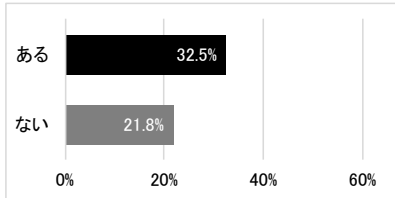


図 2-16-64 委員会(保健, 美化, 図書等)の委員経験 × 「自主的に参加」した割合

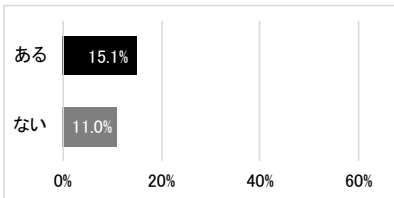


図 2-16-65 委員会(保健, 美化, 図書等)の委員経験 × 「授業等で参加」した割合

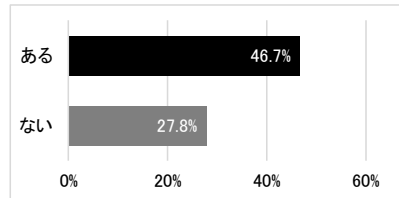


図 2-16-66 委員会(保健, 美化, 図書等)の委員経験 × 入学前に活動した割合

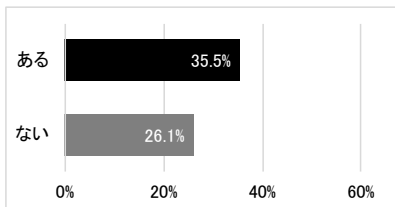


図 2-16-67 部活動の部長や役員経験 × 「自主的に参加」した割合

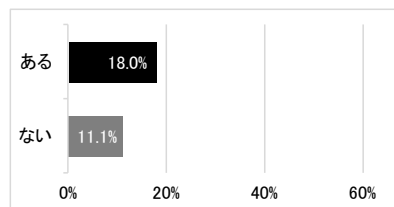


図 2-16-68 部活動の部長や役員経験 × 「授業等で参加」した割合

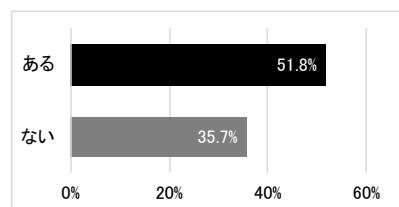


図 2-16-69 部活動の部長や役員経験 × 入学前に活動した割合

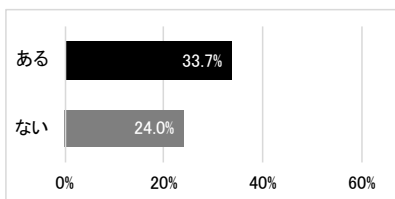


図 2-16-70 企業や商店等での職場体験 × 「自主的に参加」した割合

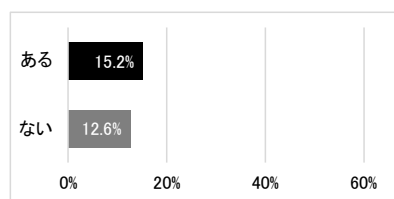


図 2-16-71 企業や商店等での職場体験 × 「授業等で参加」した割合

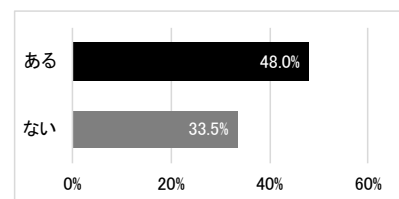


図 2-16-72 企業や商店等での職場体験 × 入学前に活動した割合

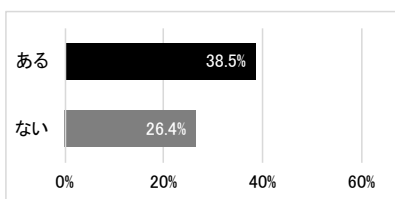


図 2-16-73 青少年団体での活動経験 × 「自主的に参加」した割合

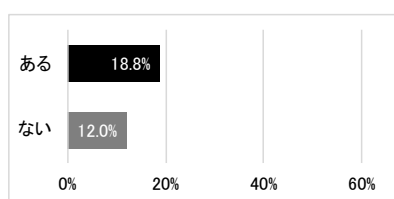


図 2-16-74 青少年団体での活動経験 × 「授業等で参加」した割合

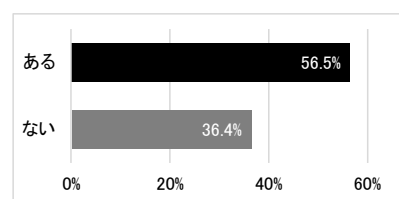


図 2-16-75 青少年団体での活動経験 × 入学前に活動した割合

(17) ボランティア活動・社会貢献活動の実施状況と社会を生き抜く資質・能力の関係

本調査では、国立青少年教育振興機構が平成 28（2016）年度に実施した「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究」において「社会を生き抜く資質・能力」として設定した〈へこたれない力〉〈意欲〉〈コミュニケーション力〉〈自己肯定感〉の 4 つの指標について質問している（詳細については、国立青少年教育振興機構「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究報告書」2018, p. 5.）。

ボランティア活動・社会貢献活動の実施状況と、社会を生き抜く資質・能力との関係についてみると、ボランティア活動等に「自主的に参加」「授業等で参加」、および入学前に活動に参加しているほど、現在の〈へこたれない力〉〈意欲〉〈コミュニケーション力〉〈自己肯定感〉のスコアがいずれも高い傾向が見られる〔図 2-17-1～図 2-17-12〕。

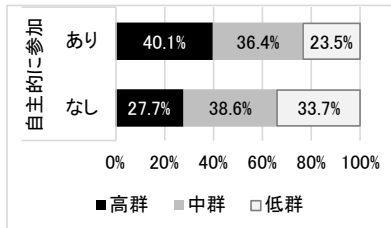


図 2-17-1 「自主的に参加」経験 × 〈へこたれない力〉スコア

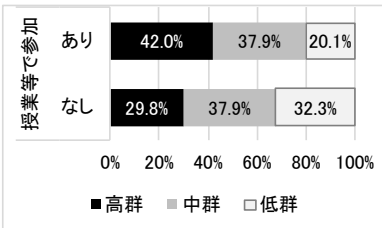


図 2-17-2 「授業等で参加」経験 × 〈へこたれない力〉スコア

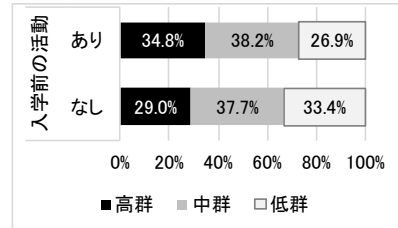


図 2-17-3 入学前の活動経験 × 〈へこたれない力〉スコア

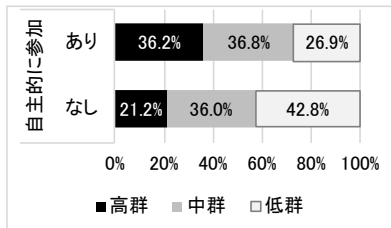


図 2-17-4 「自主的に参加」経験 × 〈意欲〉スコア

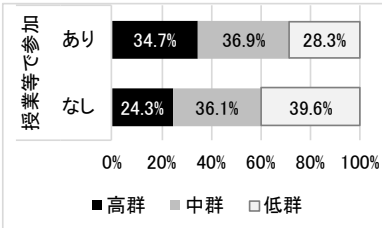


図 2-17-5 「授業等で参加」経験 × 〈意欲〉スコア

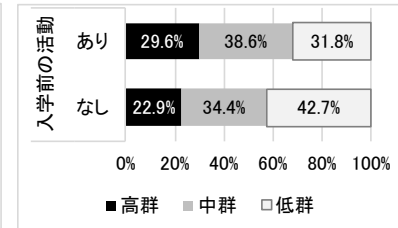


図 2-17-6 入学前の活動経験 × 〈意欲〉スコア

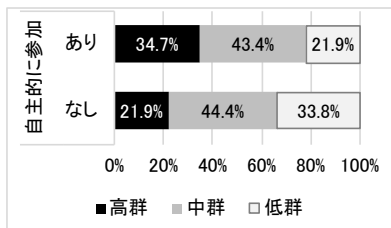


図 2-17-7 「自主的に参加」経験 × 〈コミュニケーション力〉スコア

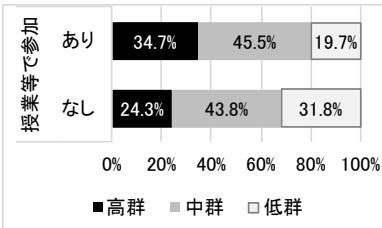


図 2-17-8 「授業等で参加」経験 × 〈コミュニケーション力〉スコア

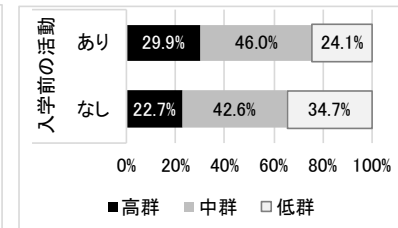


図 2-17-9 入学前の活動経験 × 〈コミュニケーション力〉スコア

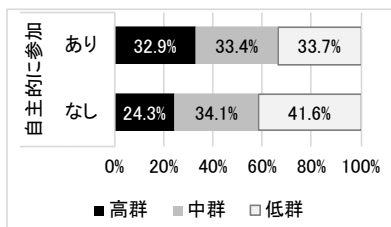


図 2-17-10 「自主的に参加」経験 × 〈自己肯定感〉スコア

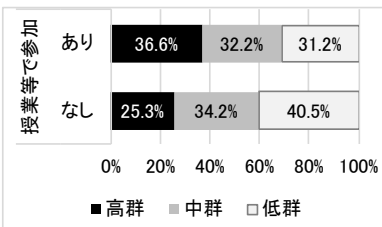


図 2-17-11 「授業等で参加」経験 × 〈自己肯定感〉スコア

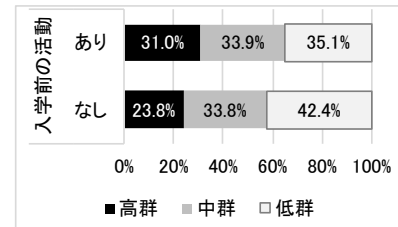


図 2-17-12 入学前の活動経験 × 〈自己肯定感〉スコア

(18) ボランティア活動・社会貢献活動の経験と投票経験・オリパラボランティアへの興味

ボランティア活動・社会貢献活動の実施状況と、選挙での投票経験との関係についてみると、ボランティア活動等に「自主的に参加」「授業等で参加」、および入学前に活動に参加しているほど、投票した経験がある割合が高い傾向が見られる [図 2-18-1～図 2-18-3]。

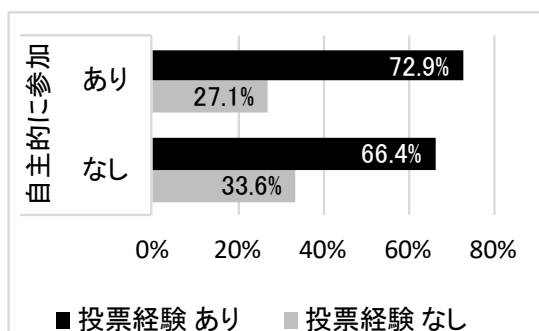


図 2-18-1 「自主的に参加」経験×投票経験

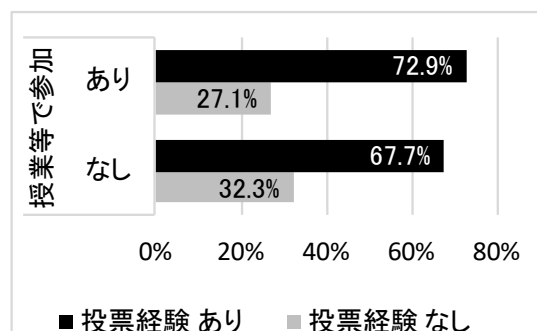


図 2-18-2 「授業等で参加」経験×投票経験

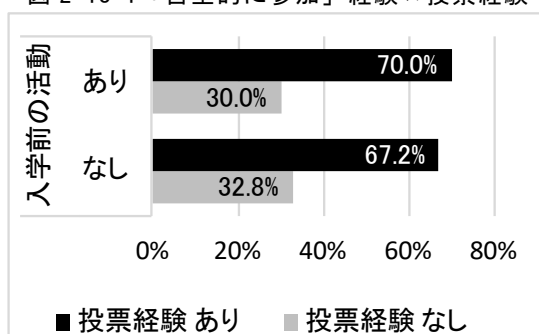


図 2-18-3 入学前の活動経験×投票経験

ボランティア活動・社会貢献活動の実施状況と、オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動への興味との関係についてみると、ボランティア活動等に「自主的に参加」「授業等で参加」、および入学前に活動に参加しているほど、オリンピック・パラリンピックでのボランティアに興味がある割合が高い傾向が見られる [図 2-18-4～図 2-18-6]。

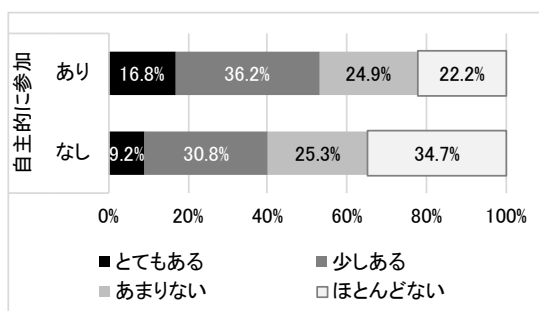


図 2-18-4 「自主的に参加」経験×オリパラボランティアへの興味

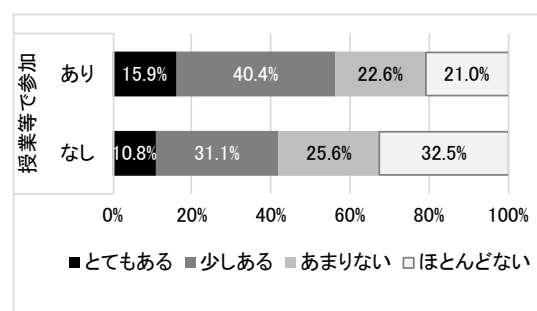


図 2-18-5 「授業等で参加」経験×オリパラボランティアへの興味

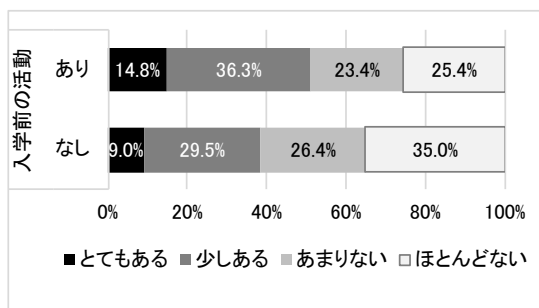


図 2-18-6 入学前の活動経験×オリパラボランティアへの興味

第3章

ボランティア活動に意欲的な大学生の実態

～「学生ボランティアフォーラム」参加者へのアンケート調査結果～

第3章 ボランティア活動に意欲的な大学生の実態

～「学生ボランティアフォーラム」参加者へのアンケート調査結果～

(1) 回答者の属性

本章では、ボランティア活動に意欲的な大学生の実態を把握するため、2018年3月に開催された「第6回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会」(学生ボランティアフォーラム)の参加者を対象に行った質問紙調査の結果を見ていく。調査は同事業内で実施し、回収数は462名であった。本調査の対象者は、「学生ボランティアフォーラム」に参加した学生であることから、ほとんどがボランティア活動等にすでに参加しているか、参加していない場合も関心を持った学生であると考えられる。

回答者の基本的な属性についてみると、性別は、男性(44.1%)よりも女性(55.6%)の方が若干多く、学年は、45.6%が1年生、32.4%が2年生となっている〔図3-1-1〕。また、学年ごとの性別の状況については、「1年生」と「3年生」では女性の割合が高く、「4年生以上」では男性の割合が高くなっている〔図3-1-1〕。

在籍する大学の種別は、約8割が私立大生となっている〔図3-1-2〕。

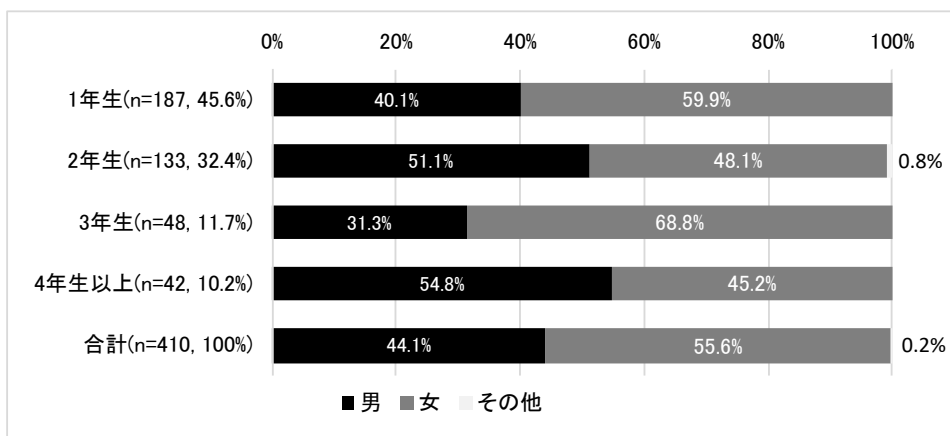


図3-1-1 回答者の学年×性別 (n=410)

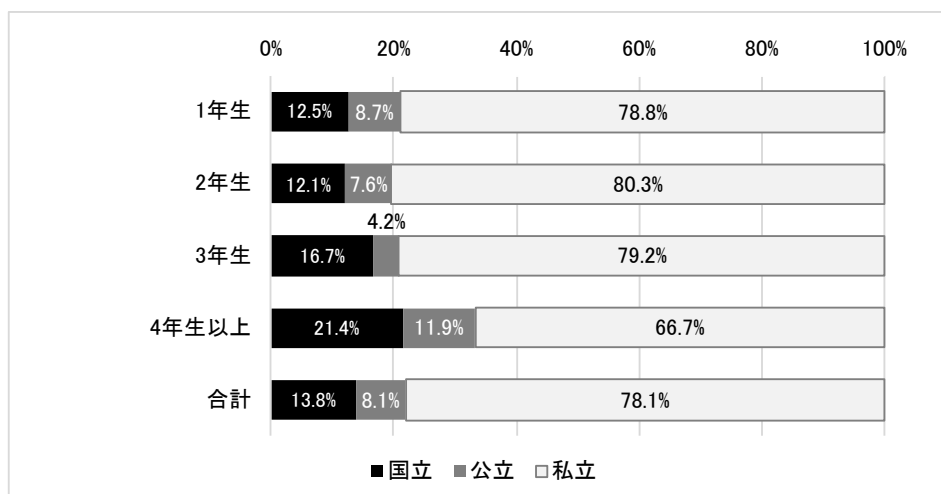


図3-1-2 回答者の学年×大学の種別 (n=406)

大学での専攻分野についてみると、「社会科学系」(21.5%)の割合が最も高く、次いで「教育学・保育系」(19.3%)、「社会福祉学系」(12.9%)の順に高い割合となっている [図 3-1-3]

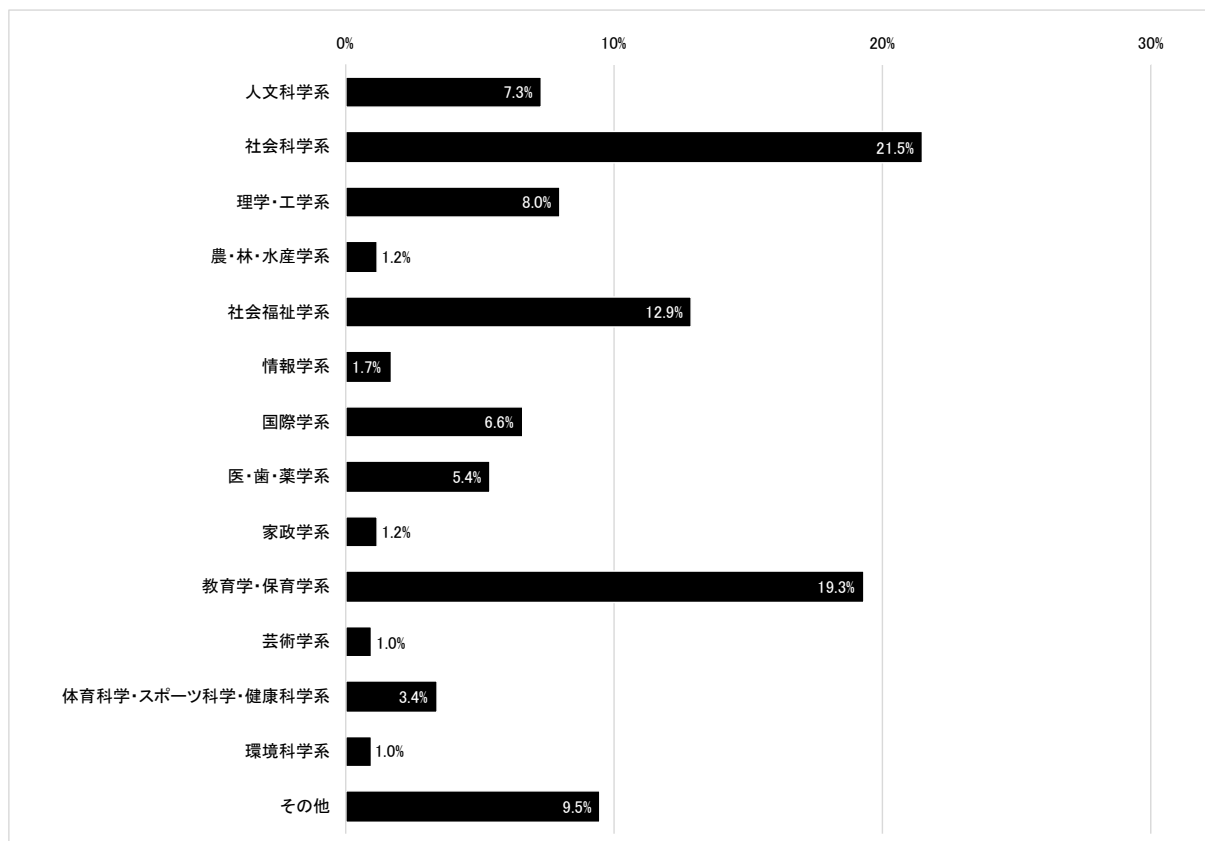


図 3-1-3 回答者の専攻分野 (n=410)

(2) ボランティア活動・社会貢献活動への参加状況

本調査では、「ボランティア活動・社会貢献活動」を、①「自主的に参加したもの」（サークル等での活動も含む）だけでなく、②「大学の授業やゼミの一環で参加したもの」（単位にかかわるもの）の双方を含むもの（ただし、「アルバイト」「インターン」「資格のための実習」は含まない）として捉えている（以下では、それぞれ必要に応じて、「自主的に参加」および「授業等で参加」と表記する）。

大学入学後に、①・②のいずれかのボランティア活動・社会貢献活動に参加したことがある学生は全体の94.2%であり、内訳は「自主的に参加」のみの割合が64.7%、「授業等で参加」のみの割合が3.5%、両方に参加した学生が26.0%となっている〔図 3-2-1〕。これらを合わせると、全体では、①「自主的に参加したことがある」割合は合計で90.7%（「自主的に参加」のみ+両方）、②「授業等で参加したことがある」割合は合計で29.4%（「授業等で参加」のみ+両方）となる。

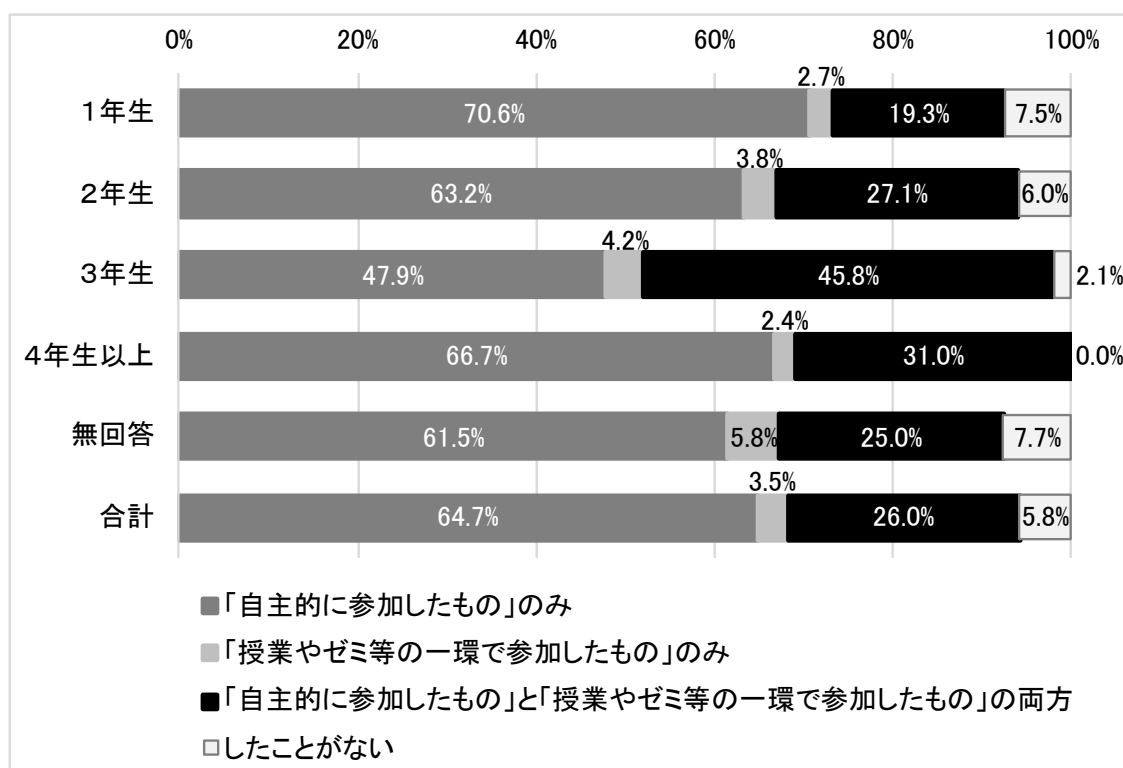


図 3-2-1 ボランティア活動等の活動状況 (n=410)

回答者の属性別に「自主的に参加」（自主的のみ+両方）したことがある割合に注目すると、ア）卒業後の進路が決まっているほど、活動している割合が高い〔図 3-2-10〕、イ）サークル・部活動の日数が多いほど、活動している割合が高い〔図 3-2-14〕、ウ）入学前にボランティア活動をしているほど、活動している割合が高い〔図 3-2-18〕、といった特徴が見られる。

回答者の属性別に「授業等で参加（授業のみ+両方）したことがある割合に注目すると、エ）学年では3年生、大学の種類では国立大、専攻では「社会福祉学系」「環境科学系」「農林水産学系」で活動している割合が高い〔図 3-2-3, 7, 9〕、オ）サークル・部活動の日数が少ないほど、活動している割合が高い〔図 3-2-15〕、カ）入学前にボランティア活動をしているほど、活動している割合が高い〔図 3-2-19〕、といった特徴が見られる。

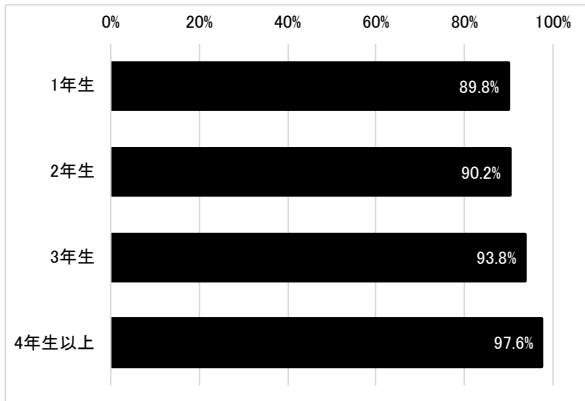


図 3-2-2 学年 × 「自主的に参加」の割合

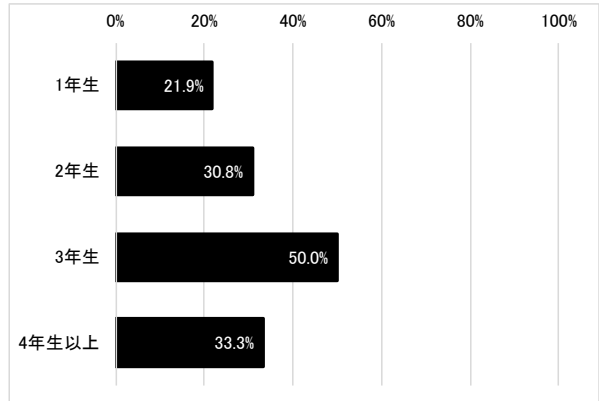


図 3-2-3 学年 × 「授業等で参加」の割合

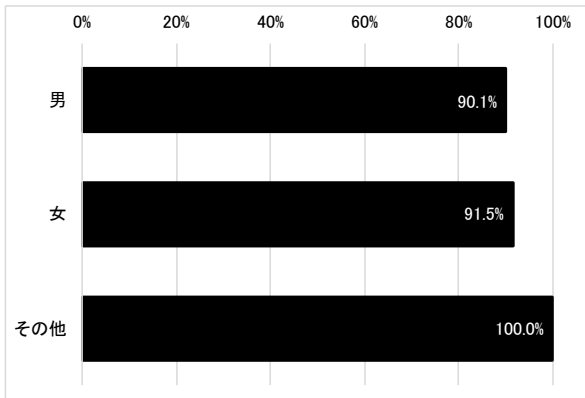


図 3-2-4 性別 × 「自主的に参加」の割合

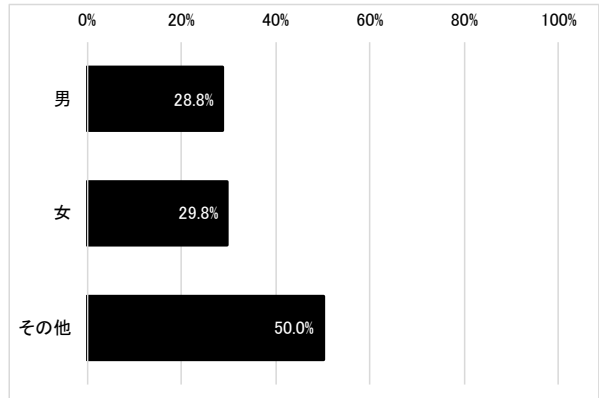


図 3-2-5 性別 × 「授業等で参加」の割合

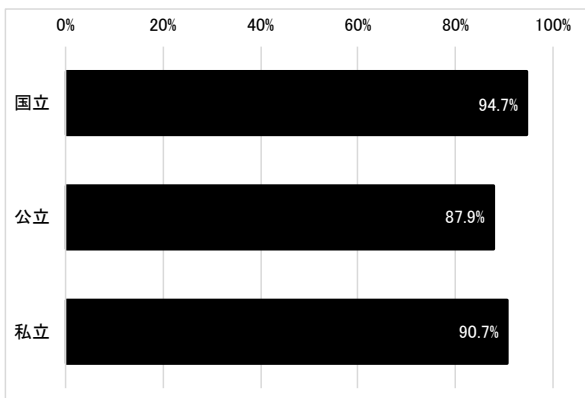


図 3-2-6 大学の設置主体 × 「自主的に参加」の割合

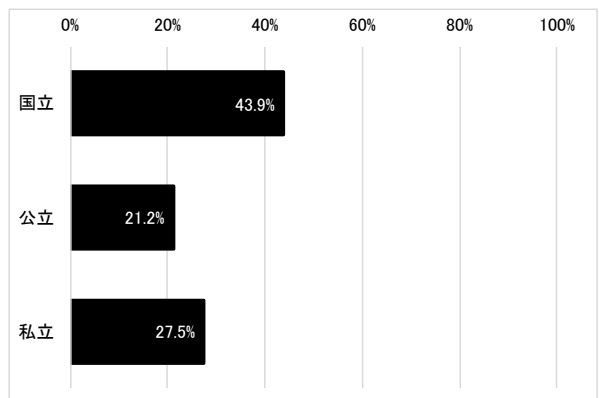


図 3-2-7 大学の設置主体 × 「授業等で参加」の割合

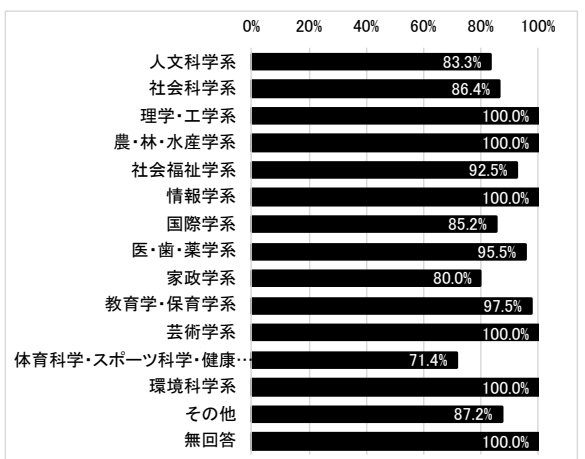


図 3-2-8 専攻分野 × 「自主的に参加」の割合

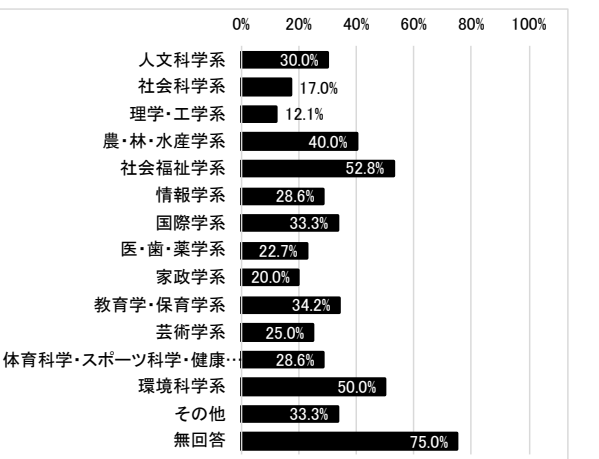


図 3-2-9 専攻分野 × 「授業等で参加」の割合

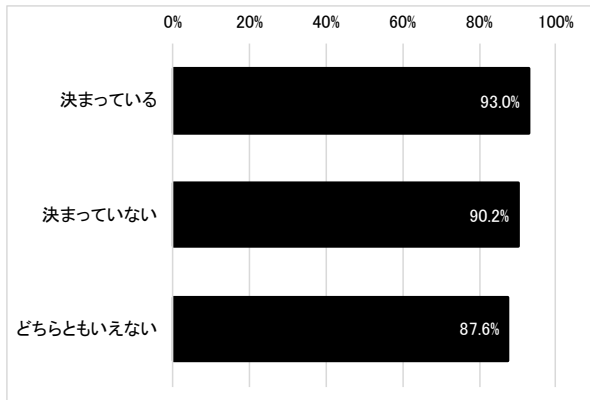


図 3-2-10 卒業後の進路 × 「自主的に参加」の割合

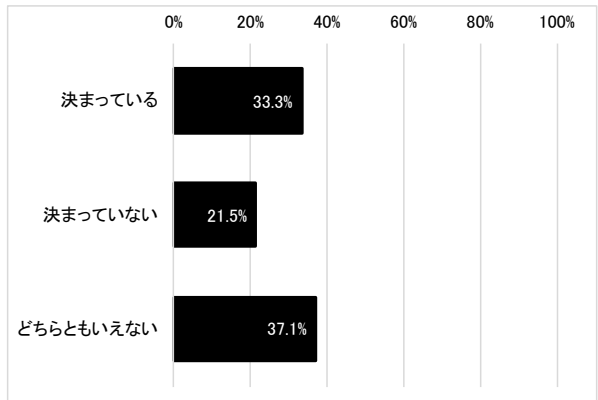


図 3-2-11 卒業後の進路 × 「授業等で参加」の割合

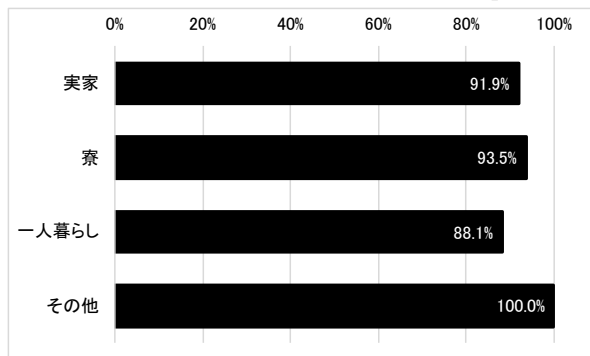


図 3-2-12 住居形態 × 「自主的に参加」の割合

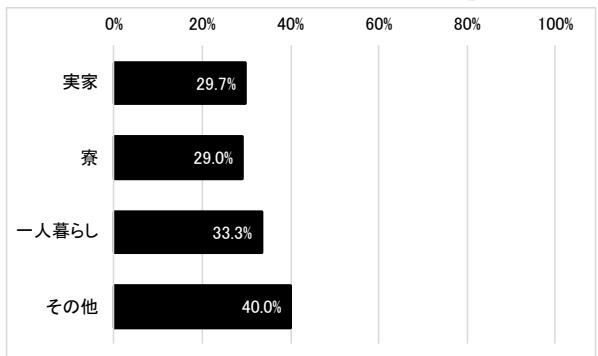


図 3-2-13 住居形態 × 「授業等で参加」の割合

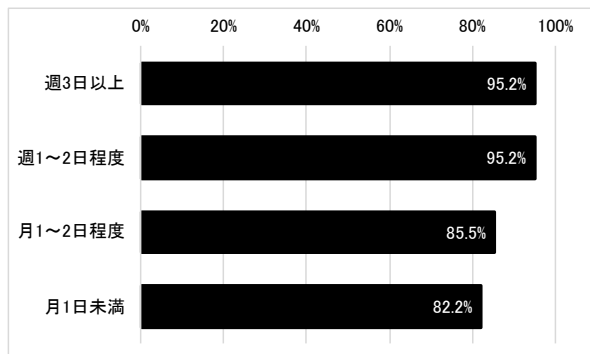


図 3-2-14 サークル・部活の状況 × 「自主的に参加」の割合

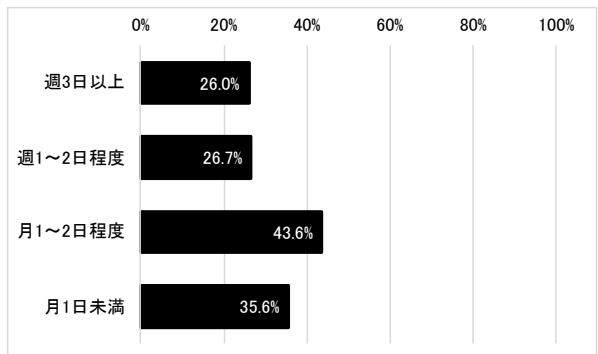


図 3-2-15 サークル・部活の状況 × 「授業等で参加」の割合

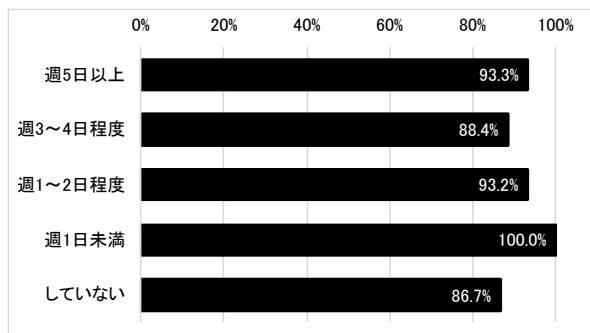


図 3-2-16 アルバイトの状況 × 「自主的に参加」の割合

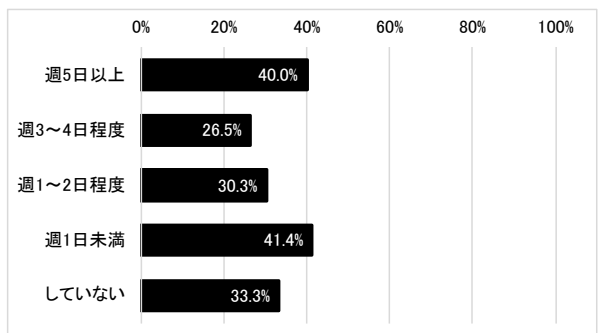


図 3-2-17 アルバイトの状況 × 「授業等で参加」の割合

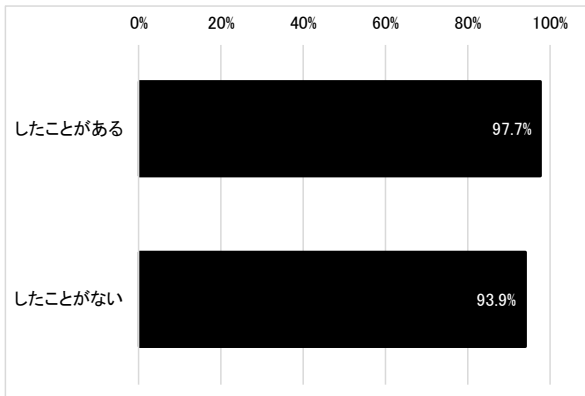


図 3-2-18 大学入学前のボランティア活動×「自主的に参加」の割合

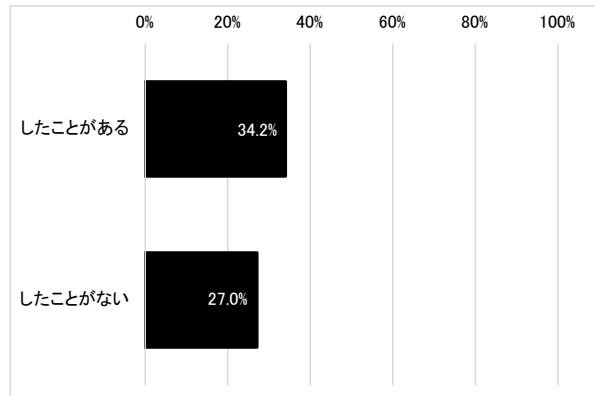


図 3-2-19 大学入学前のボランティア活動×「授業等で参加」の割合

(3) 活動の内容・今後やってみたい活動

「自主的に参加」したことがある回答者を対象に、活動の内容についてみると、活動したことがある内容全てを複数回答で求めた場合には「小学生を対象とした活動」(76.5%)、「まちづくりのための活動」(49.2%)、「就学前の子どもを対象とした活動」(44.4%)などの割合が高く、最も重点的に取り組んだ内容を単数回答で求めた場合には、「小学生を対象とした活動」(32.4%)の割合が最も高くなっている〔図 3-3-1, 図 3-3-2〕。

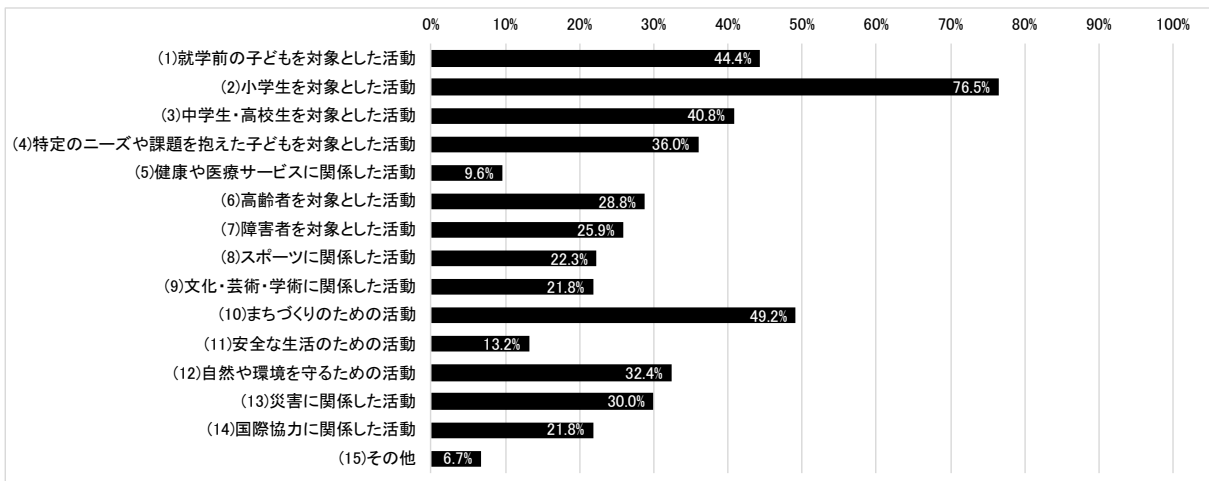


図 3-3-1 「自主的に参加」した活動の内容（複数回答・n=417）

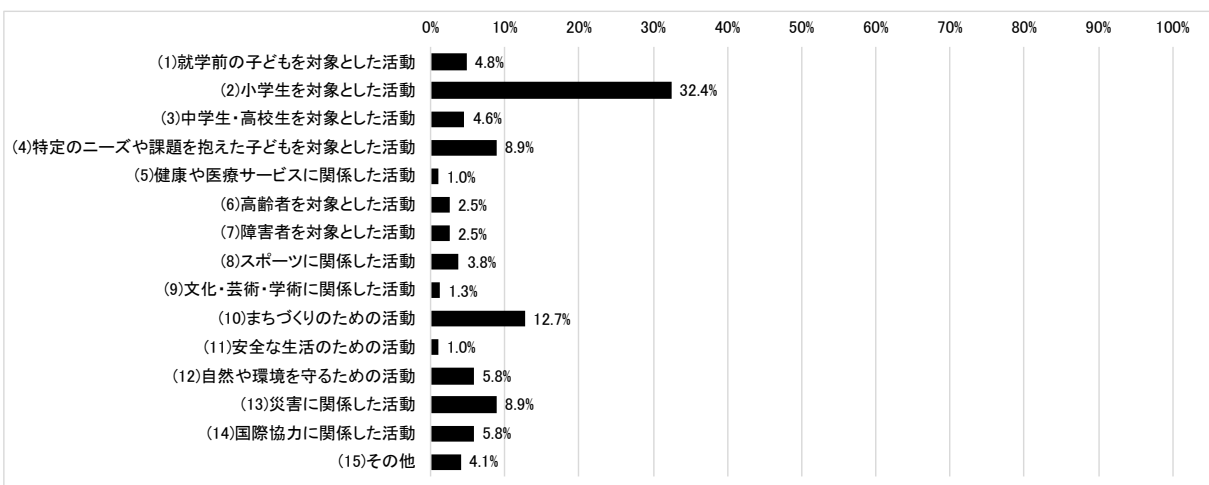


図 3-3-2 最も重点的に取り組んだ「自主的に参加」した活動の内容（単数回答・n=395）

「授業等で参加」したことがある回答者のみを対象に、活動の内容についてみると、活動したことがある内容全てを複数回答で求めた場合には「小学生を対象とした活動」(47.1%)、「障害者を対象とした活動」「高齢者を対象とした活動」「就学前の子どもを対象とした活動」などの割合が高く(27.7%)、「高齢者を対象とした活動」(26.9%)、「まちづくりのための活動」(21.0%)などの割合が高く、最も重点的に取り組んだ内容を単数回答で求めば場合には、「小学生を対象とした活動」(24.3%)の割合が最も高くなっている [図 3-3-3, 図 3-3-4]。

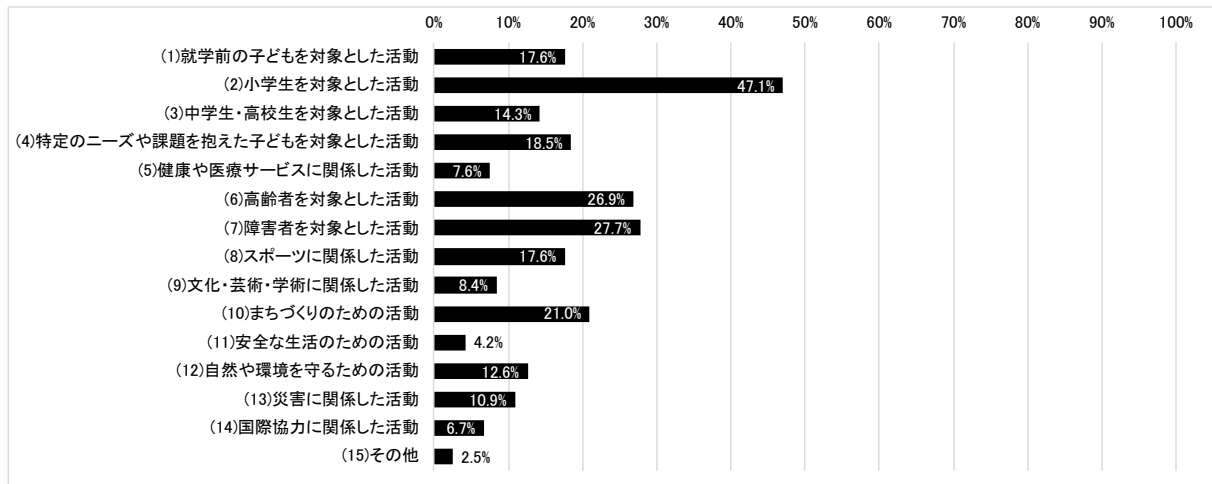


図 3-3-3 「授業等で参加」した活動の内容（複数回答・n=119）

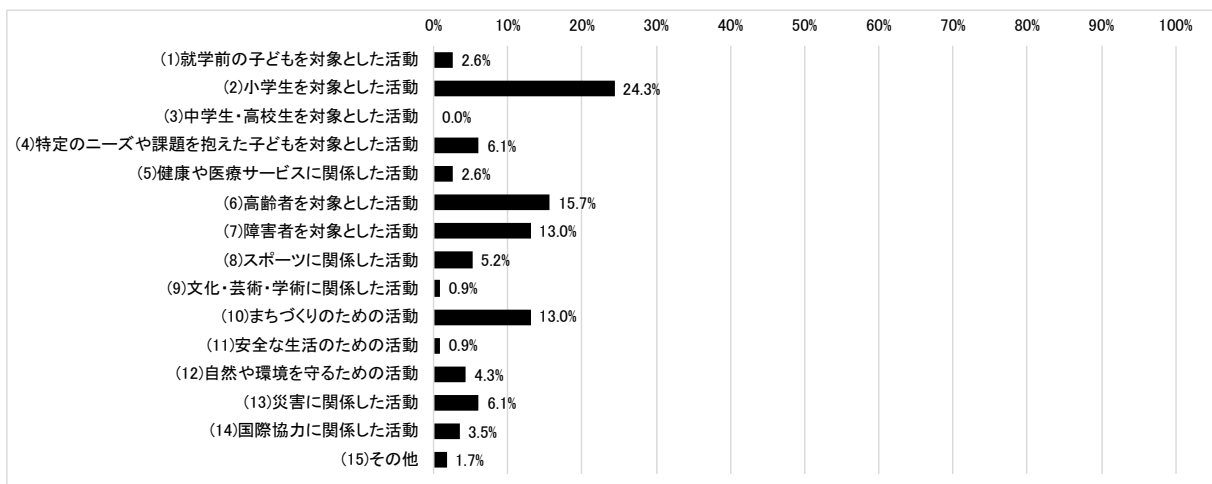


図 3-3-4 最も重点的に取り組んだ「授業等で参加」した活動の内容（単数回答・n=115）

活動経験の有無を問わず、今後やってみたい活動（複数回答）についてみると、「小学生を対象とした活動」（50.6%）が最も割合が高く、ついで「まちづくりのための活動」（48.3%）、「特定のニーズや課題を抱えた子どもを対象とした活動」（39.2%）、「中高生・高校生を対象とした活動」（38.5%）等の割合が高くなっている [図 3-3-5]。

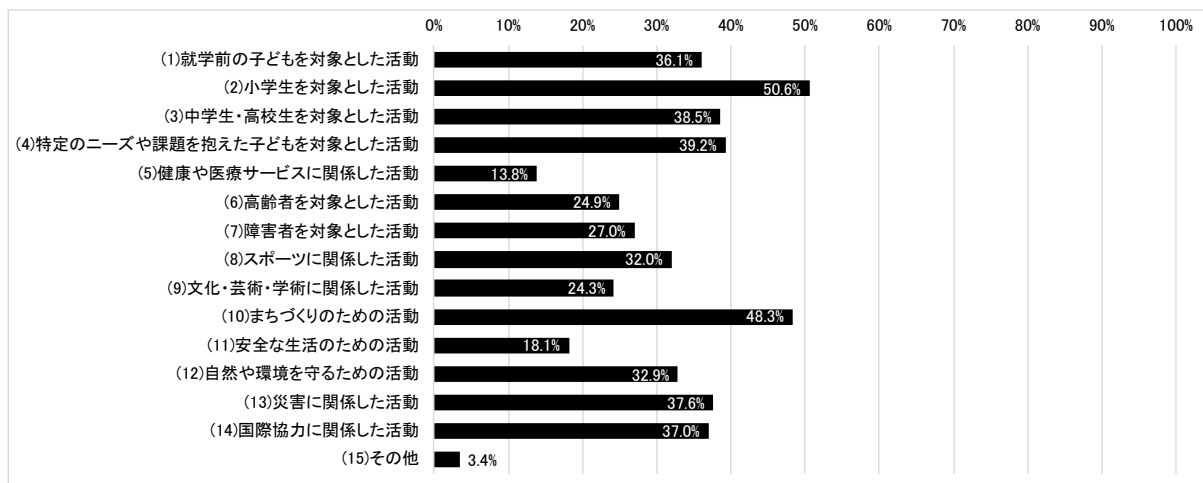


図 3-3-5 今後やってみたい活動の内容（複数回答・n=441）

(4) 活動した日数

活動の日数（準備等も含む全日数）についてみると「自主的に参加」の場合には「10～30日程度」（34.5%）、「授業等で参加」の場合には「3～10日程度」（40.0%）の割合が最も高くなっている。[図 3-4]。

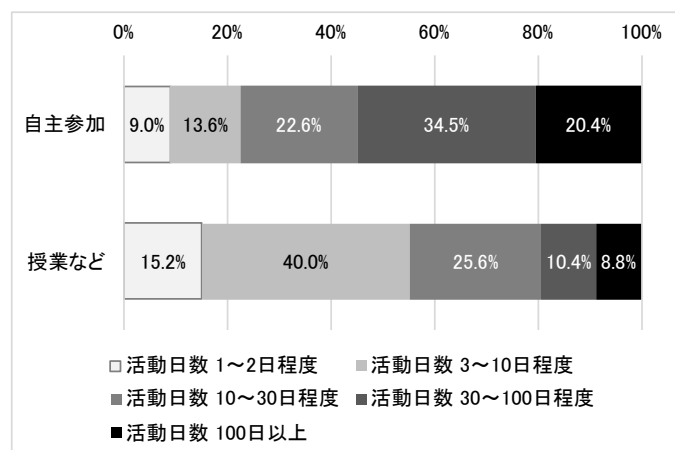


図 3-4 活動日数

(5) 活動に参加した動機

「自主的に参加」か「授業等で参加」かを問わず、活動に参加したことがある全ての回答者を対象に、参加した動機（複数回答）についてみると、「自分の成長につながったから」（73.3%）の割合が最も高く、ついで「さまざまな人と関わりたかったから」（63.1%）、「楽しそうだったから」（58.2%）などの割合が高くなっている [図 3-5-1]。

次に、「自主的に参加」および「授業等で参加」ごとに最も中心的な動機（単数回答）についてみると、「自主的に参加」の場合は「自分の成長につながったから」（21.9%）

の割合が最も高く、「授業等で参加」の場合には「自分の成長につながると思ったから」(15.3%)の割合が最も高くなっている[図 3-5-2, 図 3-5-3]。

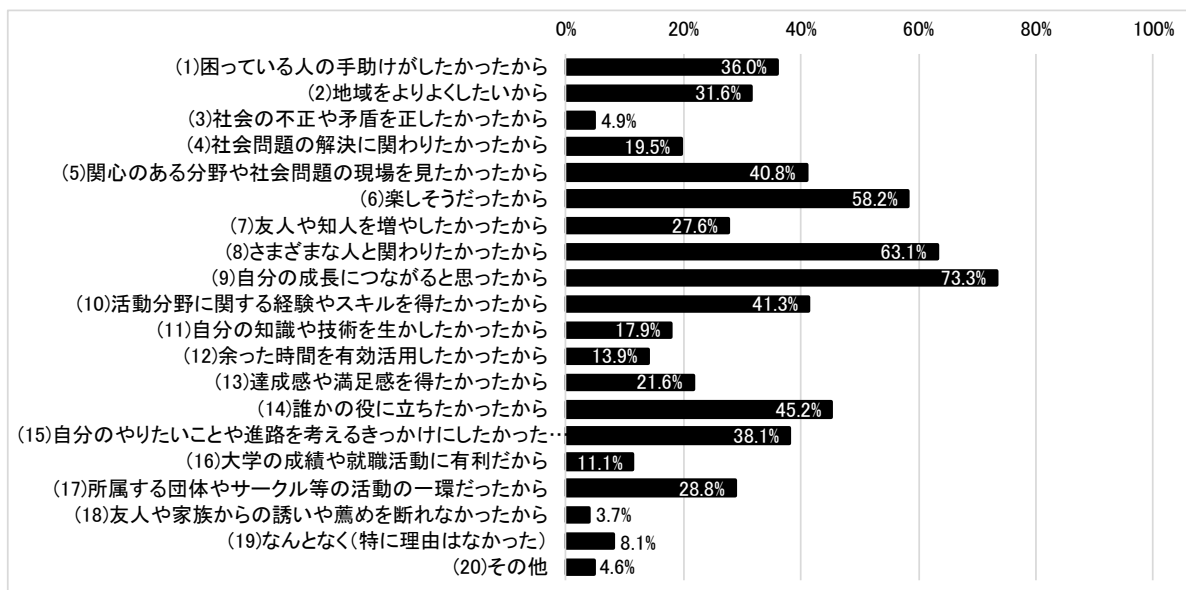


図 3-5-1 活動に参加した動機 (複数回答・n=431)

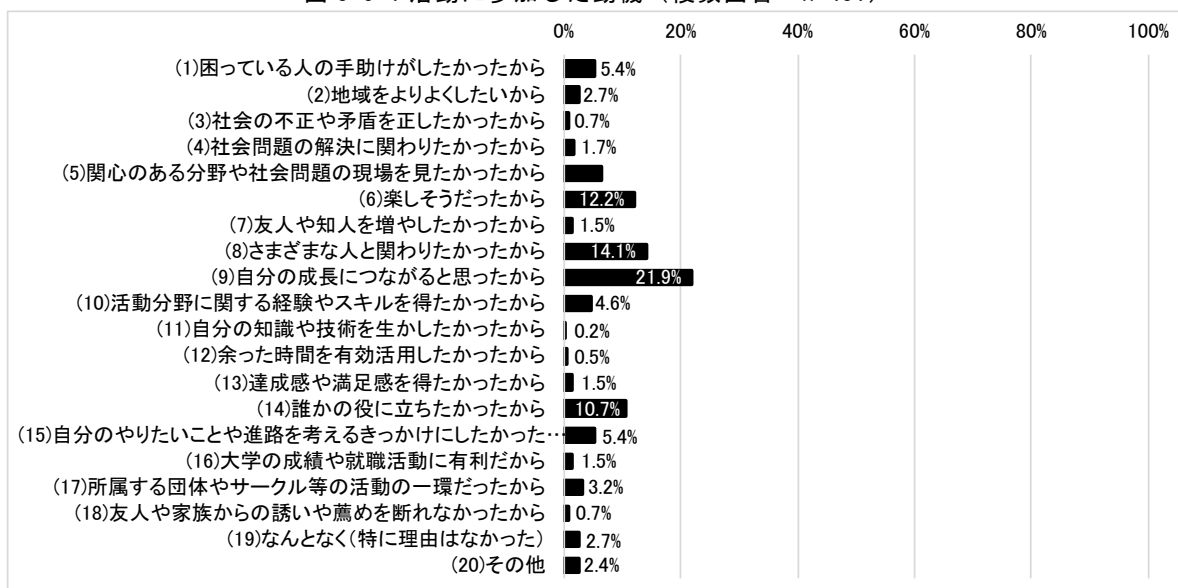


図 3-5-2 「自主的に参加」した中心的な動機 (単数回答・n=411)

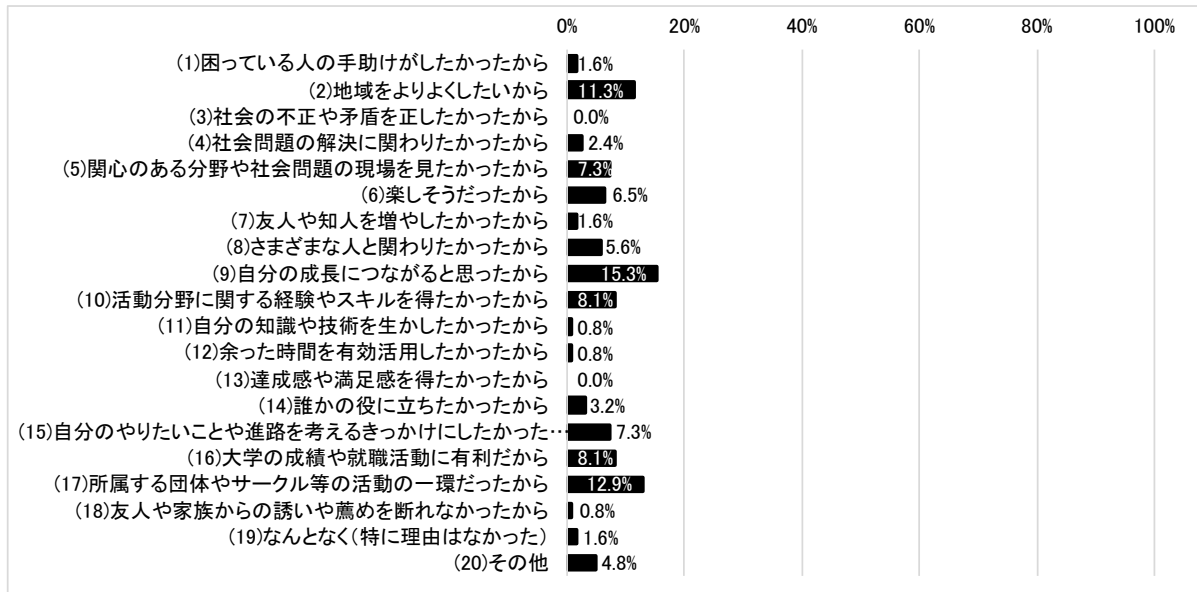


図 3-5-3 「授業等で参加」した動機（単数回答・n=124）

(6) 活動に参加してよかったこと/よくなかったこと

「自主的に参加」か「授業等で参加」かを問わず、活動に参加したことがある回答者を対象に、参加してよかったこと（複数回答）についてみると、「ものの見方、考え方が広がった」（76.2%）、「楽しかった」（72.0%）、「相手から感謝された」（59.5%）、「友人や知人が増えた」（59.0%）の割合が高くなっている。[図 3-6-1]。

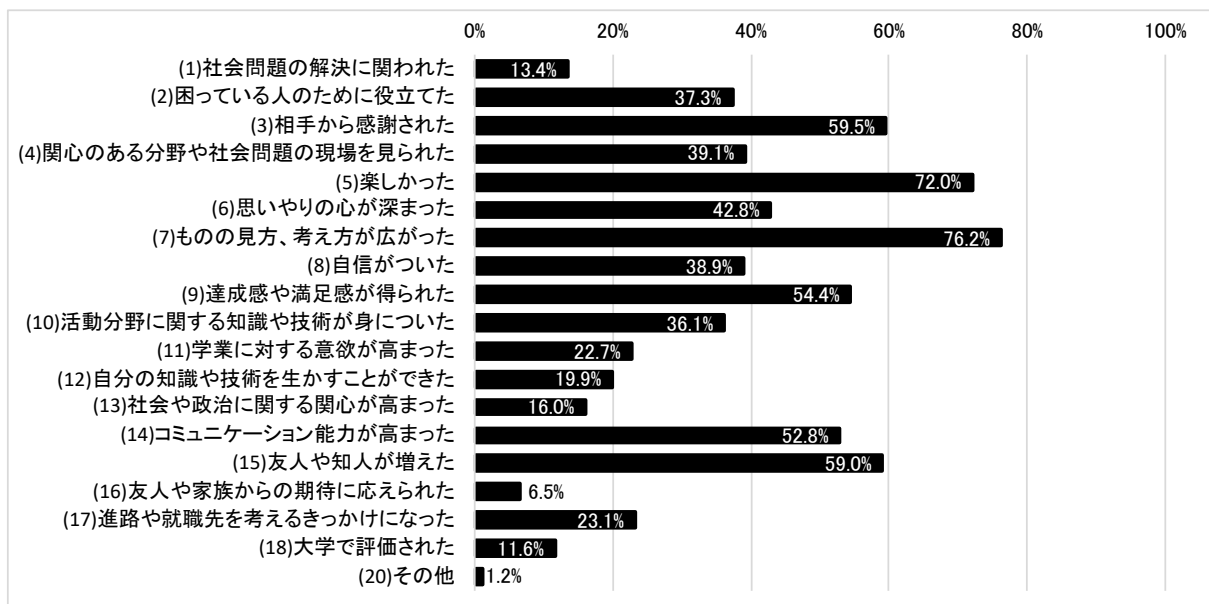


図 3-6-1 活動に参加してよかったこと（複数回答・n=432）

次に、「自主的に参加」および「授業等で参加」ごとに最もよかったこと（単数回答）についてみると、「自主的に参加」の場合は「ものの見方、考え方が広がった」（30.5%）の割合が最も高く、ついで「友人や知人が増えた」（12.7%）、「楽しかった」（11.8%）の割合が高くなっている。「授業等で参加」の場合は「思いやりの心が深まった」（15.9%）の割合が最も高く、ついで「関心のある分野や社会問題の現場を見られた」（11.9%）「社会問題の解決に関わられた」（10.3%）の割合が高くなっている[図 3-6-2, 図 3-6-3]。

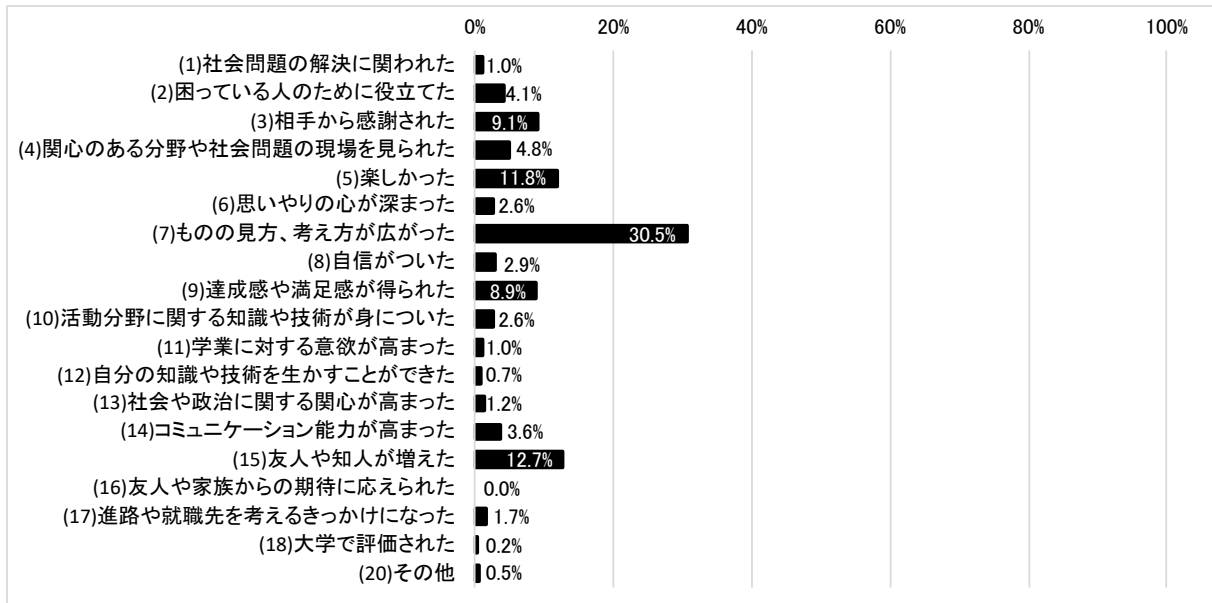


図 3-6-2 「自主的に参加」してよかったこと（単数回答・n=416）

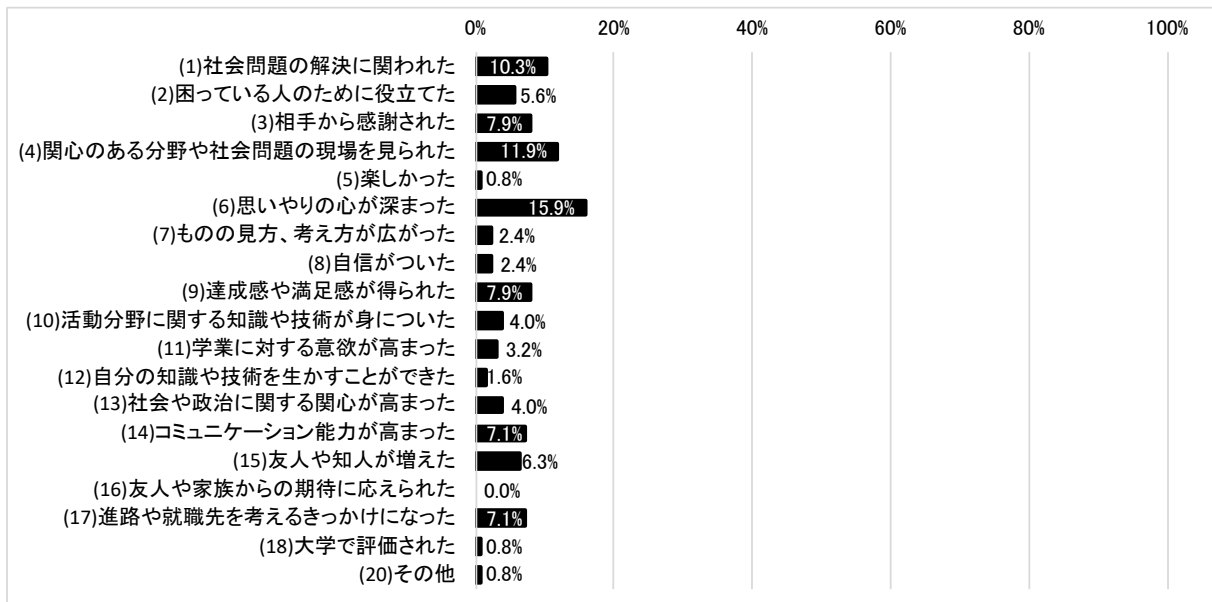


図 3-6-3 「授業等で参加」してよかったこと（単数回答・n=126）

「自主的に参加」か「授業等で参加」かを問わず、活動に参加したことがある回答者を対象に、参加してよくなかったこと（複数回答）についてみると、「よくなかったと思うことはない」を除くと「経費（お金）がかかり過ぎた」（26.1%）の割合が最も高く、ついで「活動に時間が取られすぎた」（23.4%）、「継続的に活動ができなかった」（18.2%）の割合が高くなっている〔図 3-6-4〕。

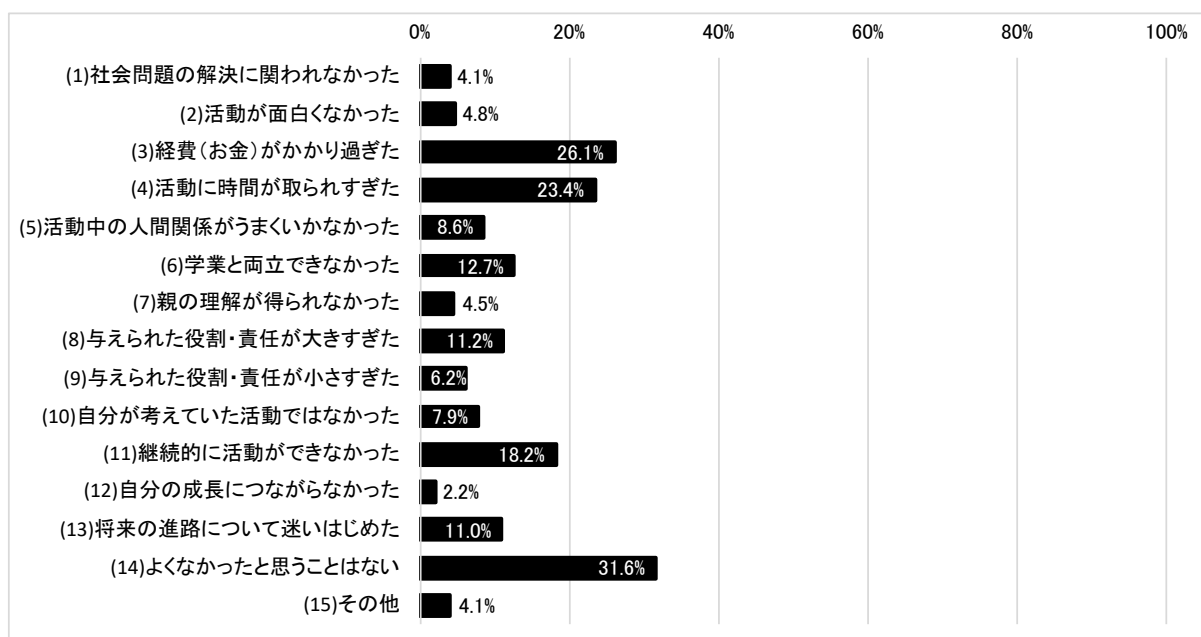


図 3-6-4 活動に参加してよくなかったこと (複数回答・n=418)

次に、「自主的に参加」および「授業等で参加」ごとに最もよくなかったこと (単数回答) についてみると、「よくなかったと思うことはない」を除くと、「自主的に参加」の場合は「経費(お金)がかかり過ぎた」(15.6%)の割合が最も高く、ついで「活動に時間が取られすぎた」(12.5%)、「継続的に活動ができなかった」(12.5%)の割合が高くなっている。「授業等で参加」の場合は「継続的に活動ができなかった」(16.4%)の割合が最も高く、ついで「活動に時間が取られすぎた」(9.5%)、「自分の将来について迷いはじめた」(9.5%)の割合が高くなっている [図 3-6-5, 図 3-6-6]。

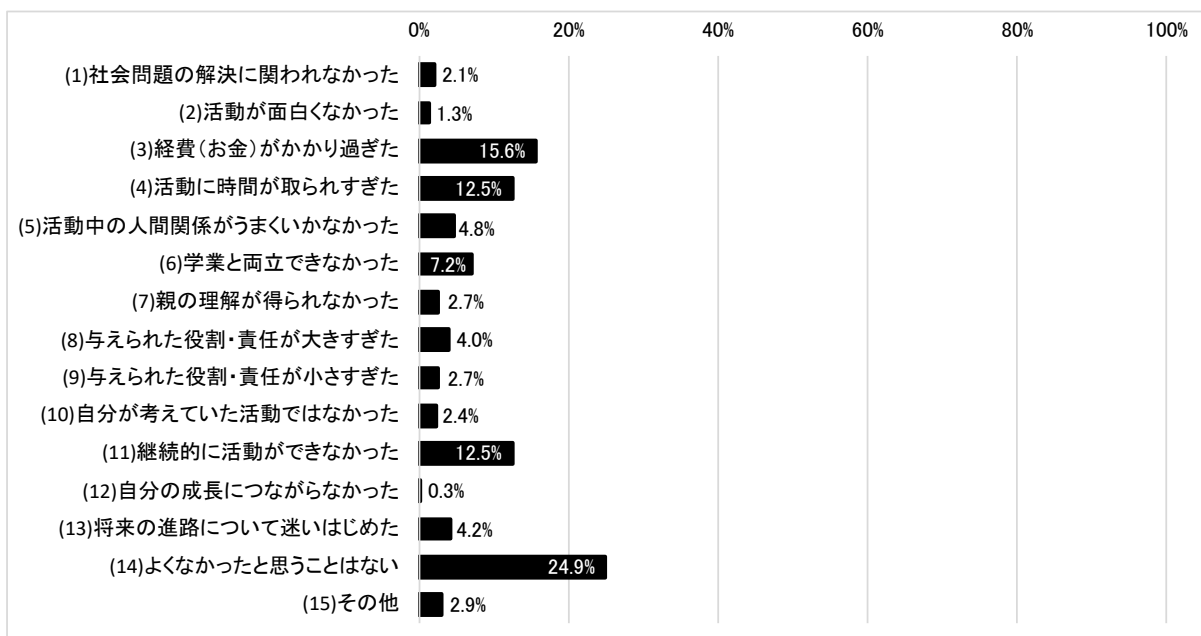


図 3-6-5 「自主的に参加」してよくなかったこと (単数回答・n=377)

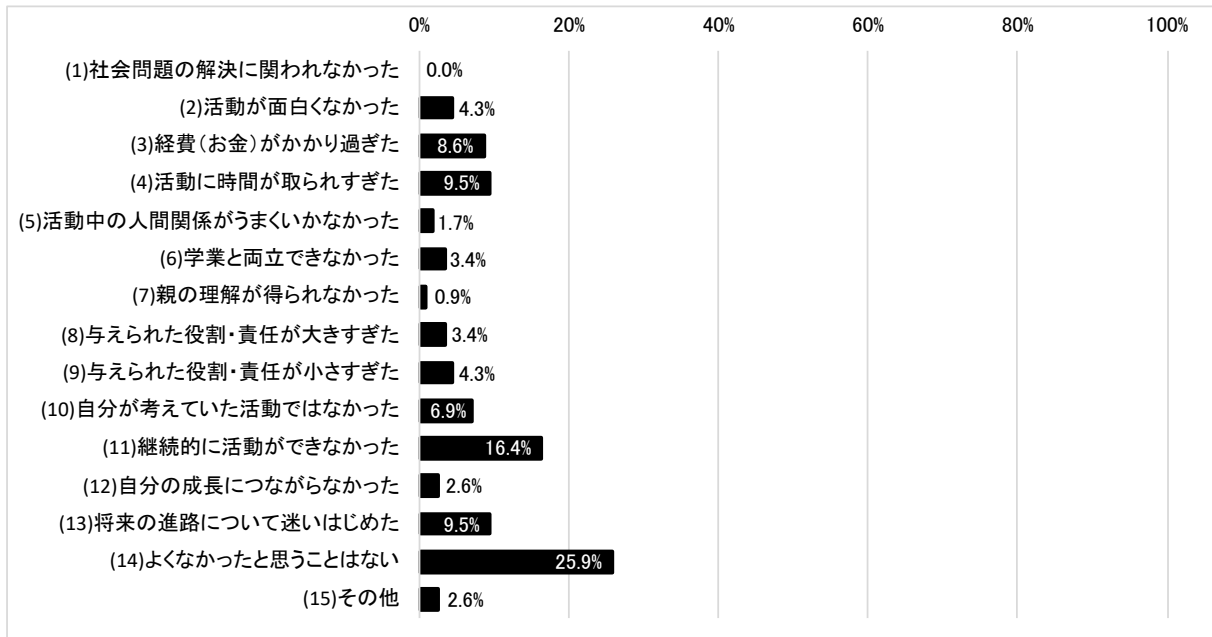


図 3-6-6 「授業等で参加」してよくなかったこと（単数回答・n=116）

(7) 自主的に参加した活動の概要

「自主的に参加」したことがある回答者を対象に、活動した時間（複数回答）についてみると、「土日・祝日」（82.5%）の割合が最も高く、ついで「長期休暇中」（68.4%）の割合が高くなっている[図 3-7-1]。

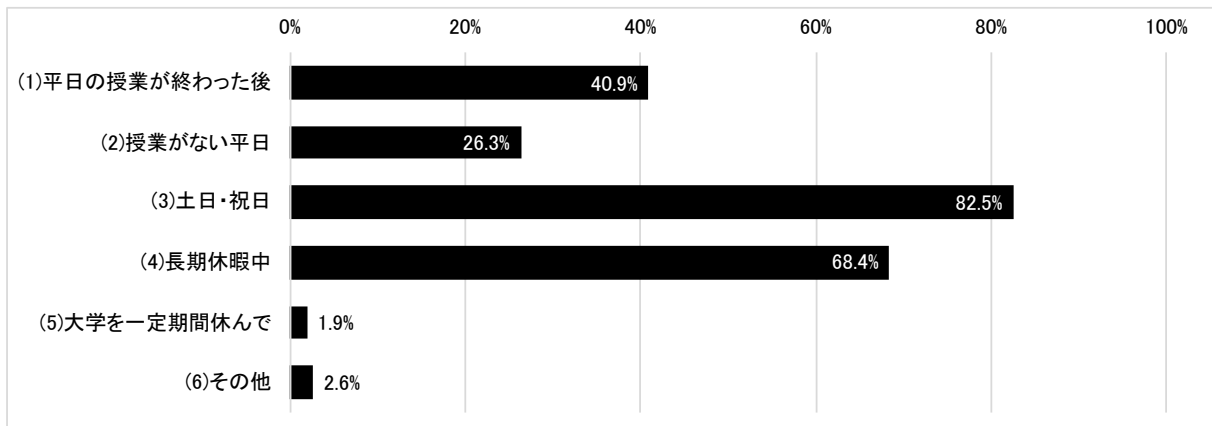


図 3-7-1 活動した時間（複数回答・n=418）

「自主的に参加」した場合の活動の形態（複数回答）についてみると、「大学内の部活動・サークル活動として行ったもの」（60.9%）の割合が最も高く、ついで「大学外の団体の活動として行ったもの」（45.8%）の割合が高くなっている [図 3-7-2]。

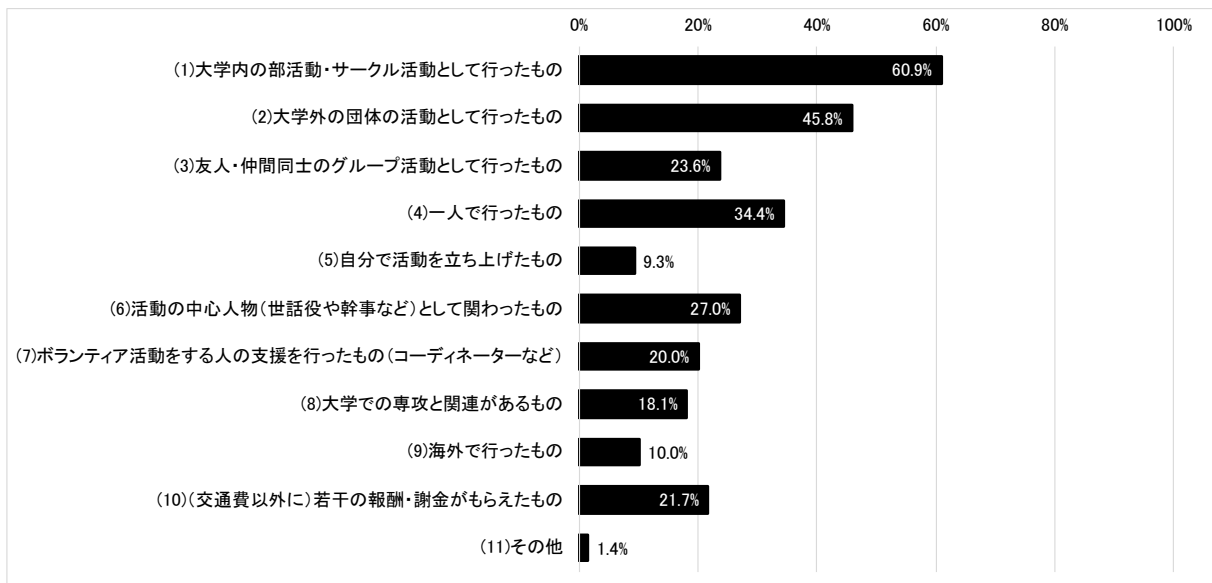


図 3-7-2 活動の形態（複数回答・n=419）

「自主的に参加」した場合の活動の情報源（複数回答）についてみると、「友人や知人、先輩ボランティアから紹介されて」（59.4%）の割合が最も高く、ついで「大学のサークル等の所属する団体から紹介されて」（46.9%）、「大学のボランティアセンター等を通じて」（40.4%）の割合が高くなっている [図 3-7-3]。

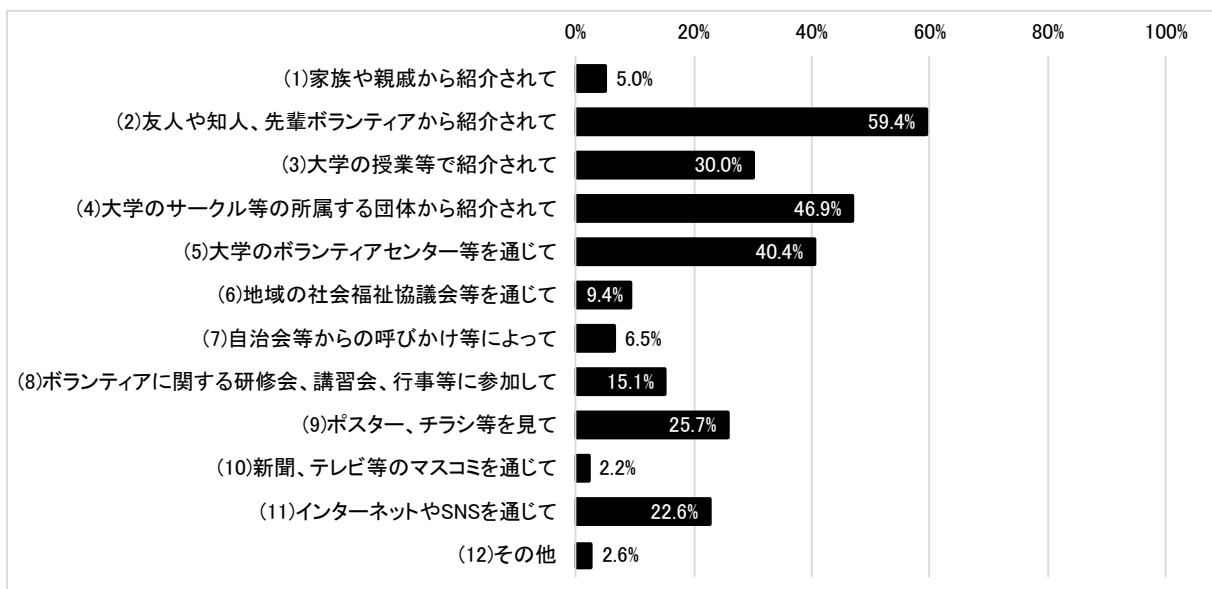


図 3-7-3 活動の情報源（複数回答・n=416）

(8) 授業等で参加した活動の位置付け

「授業等で参加」したことがある回答者を対象に、授業等で参加した活動の位置付けについてみると、「ボランティアや社会貢献をテーマとした、実習中心の授業の一環として」(55.4%)と回答した割合が5割強で最も高く、ついで「ボランティアや社会貢献をテーマとした、講義中心の授業の一環として」(30.8%)と回答した割合が約3割となっている[図3-8]。

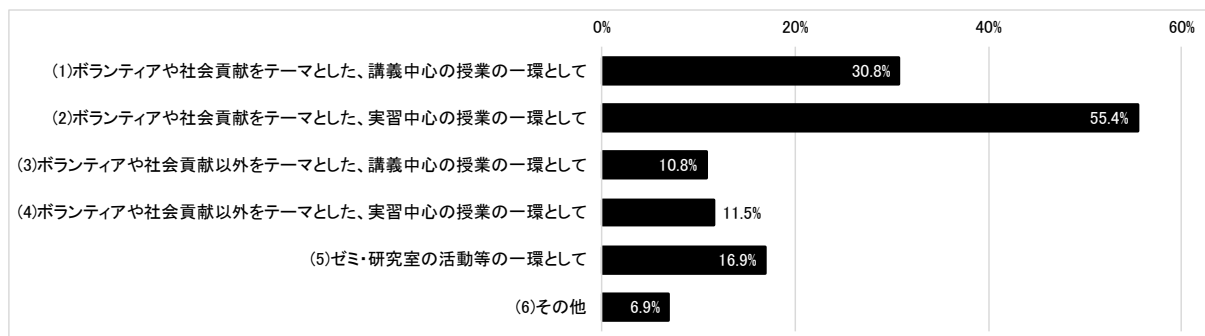


図3-8 授業等の位置付け (複数回答・n=172)

(9) 活動に参加しなかった理由

入学後に活動に参加したことがない回答者のうち、今後、活動を「可能ならしてみたい」と回答した割合は約9割強となっている[図3-9-1]。

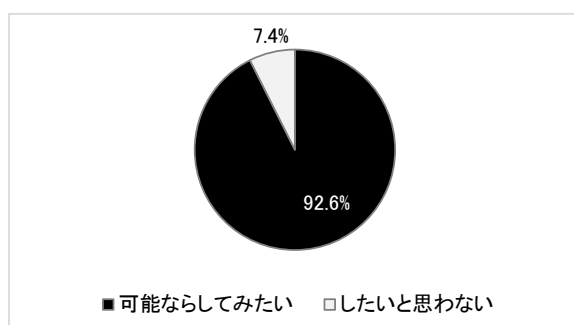


図3-9-1 今後、可能なら活動してみたいと思うか (n=27)

次に、[図3-9-1]で活動を「可能ならしてみたい」と回答した場合の、これまで活動をしなかった理由(複数回答)についてみると、「大学の授業が忙しい」(50.0%)と「アルバイトが忙しい」(50.0%)の割合が最も高く、ついで「情報が不足している」(45.8%)の順に割合が高くなっている[図2-9-2]

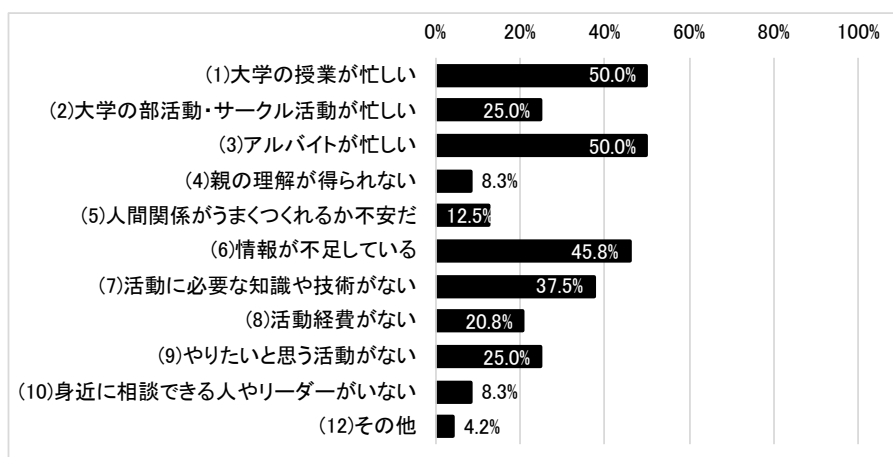


図3-9-2 これまで活動をしなかった理由 (複数回答・n=24)

(10) 大学入学前の活動の状況

全ての回答者を対象に、大学入学前のボランティア活動・社会貢献活動への参加状況についてみると、なんらかのボランティア活動・社会貢献活動に参加「したことがある」割合は6割強となっている [図 3-10-1]。

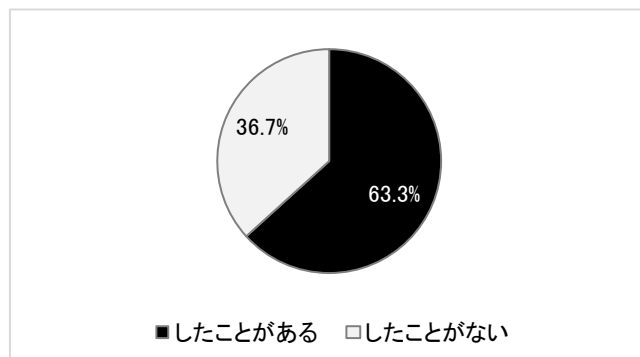


図 3-10-1 大学入学前の活動状況 (n=433)

大学入学前に活動に「参加したことがある」場合の、大学入学前に参加した活動の種類（複数回答）についてみると、「学校の授業や行事等の一環で参加したもの」(53.3%)と回答した割合が最も高く、ついで「自主的に参加したもの」(47.4%)の割合が高くなっている [図 3-10-2]。

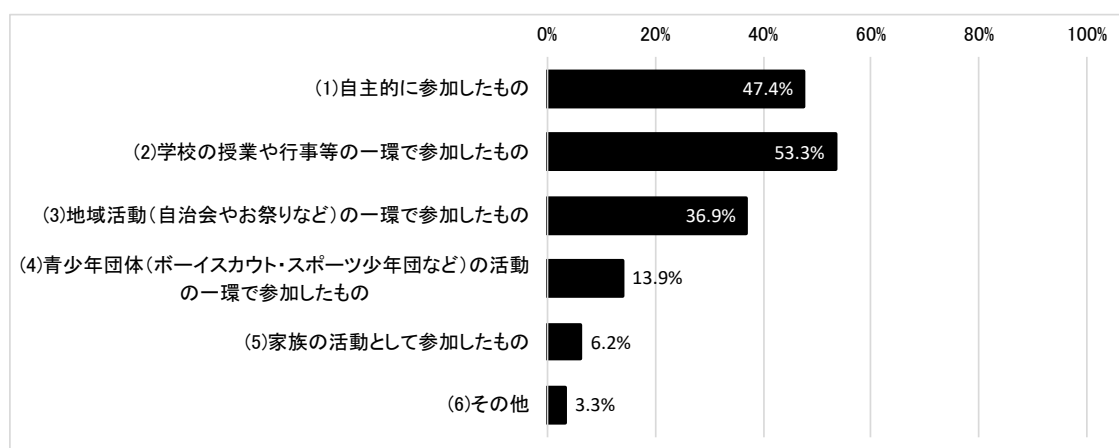


図 3-10-2 大学入学前に行った活動の種類 (複数回答・n=274)

(11) ボランティア活動に対する意識

全ての回答者を対象に、ボランティア活動に関する意識（8項目）について、各項目の肯定的な回答の割合（とても思う+少し思う）に注目すると、肯定的な意見の割合が高かった項目は、「(8) 今後は(今後も)、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい」(96.8%)、「(7) これからの社会では、ボランティアの果たす役割が大きくなるはずだ」(91.1%)、「(5) ボランティア活動で、交通費や昼食を受け取ってもよい」(73.9%)、「(4) 企業は、ボランティア活動の経験を採用の評価に加えるべきだ」(64.0%)の4項目となっている。また、肯定的な意見の割合が低かった項目は「(3) 大学は、ボランティア活動の経験を単位に加えるべきだ」(35.1%)、「(6) ボランティア活動で、報酬や謝金を受け取ってもよい」(35.3%)、「(2) 大学は、ボランティア活動の経験を入試の評価に加えるべきだ」(36.8%)、「(1) 自由

時間があれば、ボランティア活動よりもアルバイトを優先する」(48.2%)の4項目となっている[図3-11]。

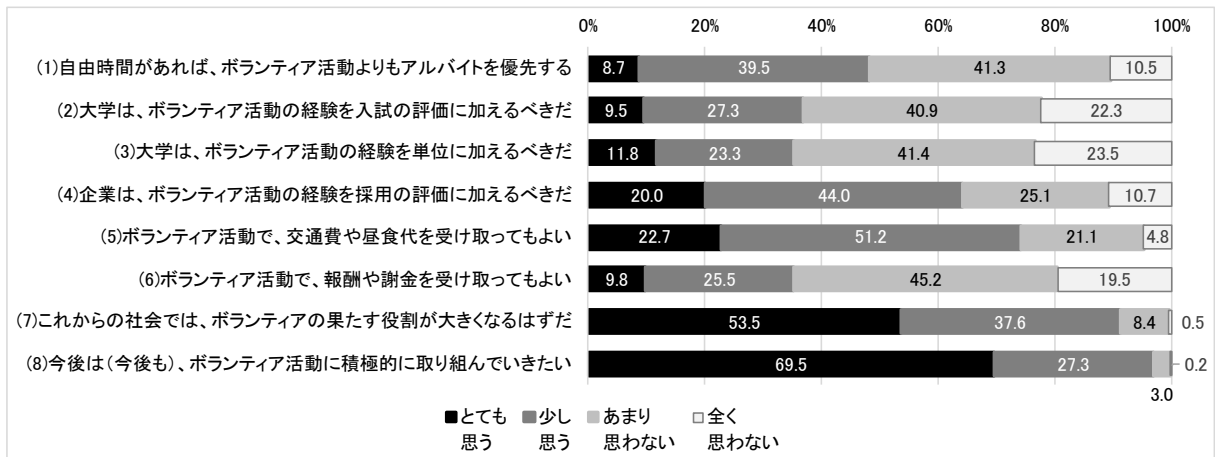


図3-11 ボランティア活動に関する意識

(12) 大学生のボランティア活動のために求められる支援

全ての回答者を対象に、大学生のボランティア活動のための支援（15項目）について、「とても重要だと思う」と回答した割合に注目すると、「ボランティア活動に関する情報を提供すること」(70.5%)の割合が最も高く、ついで「ボランティア同士が交流したり、情報交換できる機会を充実させること」(64.4%)、「ボランティア活動に関する相談体制を充実させること」(47.5%)の割合が高くなっている[図3-12-1]。

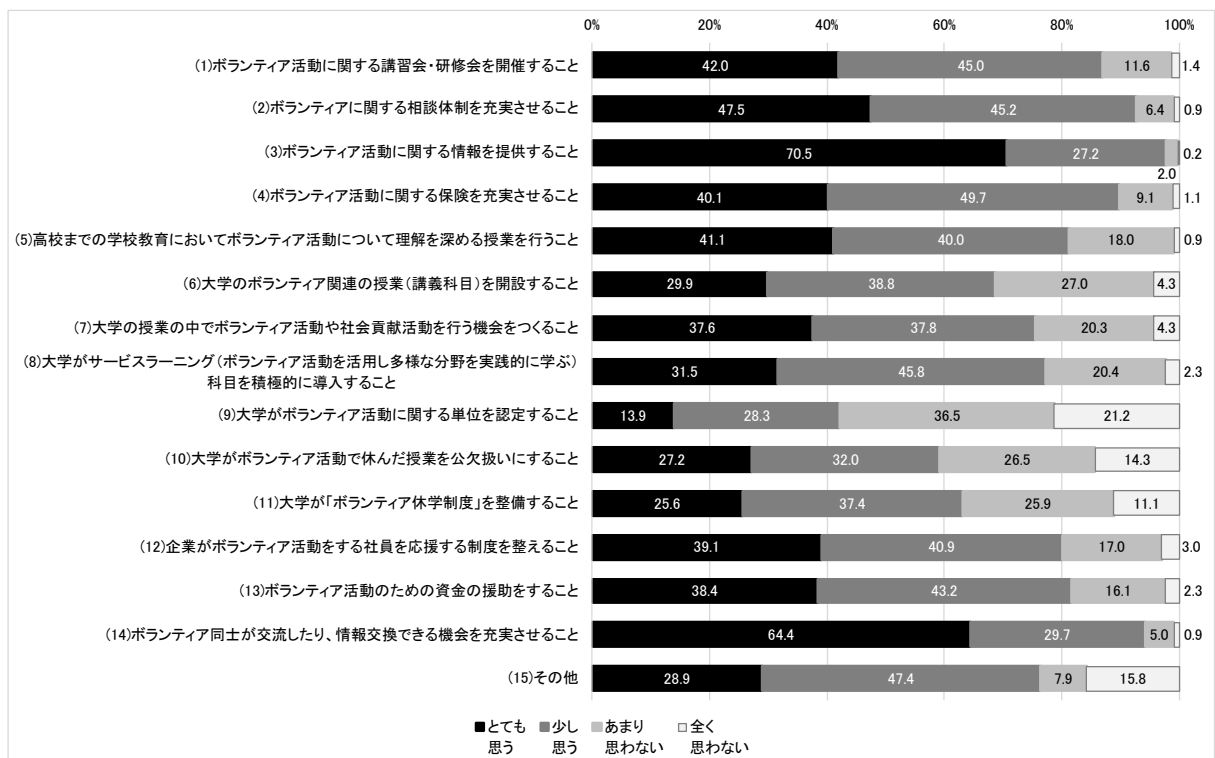


図3-12-1 ボランティア活動のために求められる支援

[図 3-12-1]の(10)および(11)に関連して、大学でボランティア活動のため休暇制度を設ける場合、公欠扱いとする適当な日数については「1週間程度」と回答した割合が最も高く(44.4%)、適当な「ボランティア休学」の期間としては「3ヶ月」(34.6%)および「期限は設けない」(33.3%)と回答した割合が高かった。[図 3-12-2, 図 3-12-3]

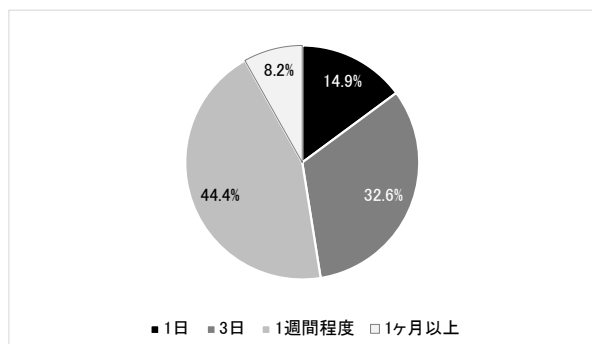


図 3-12-2 適当な公欠日数 (n=417)

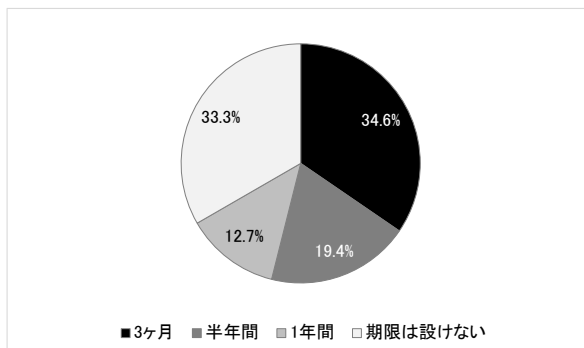


図 3-12-3 適当な休学期間 (n=408)

[図 3-12-1]の(2)および(3)に関連して、ボランティア活動のための相談体制として重要な機関としては「大学」(47.9%)と回答した割合が最も高く、情報提供機関としては「SNSやソーシャルメディア」と回答した割合が最も高かった(44.4%)。[図 3-12-4, 図 3-12-5]

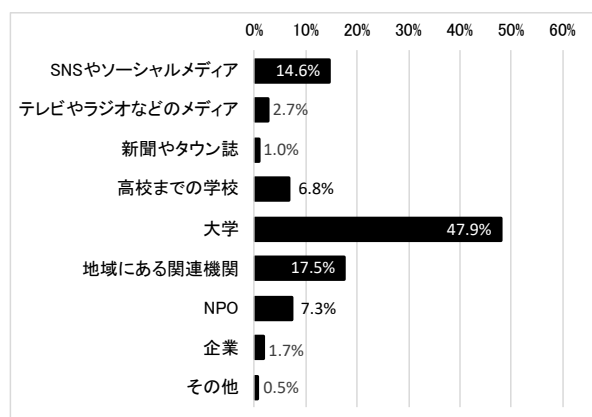


図 3-12-4 重要な相談体制 (単数回答・n=411)

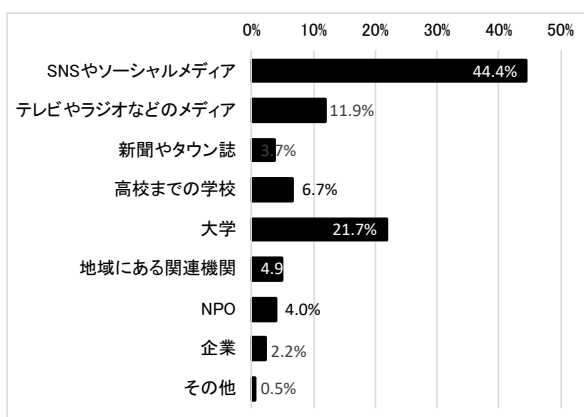


図 3-12-5 重要な情報提供機関 (単数回答・n=405)

(13) ボランティア活動をしてみたい社会教育施設等

全ての回答者を対象に、社会教育施設等においてボランティアが活動していることの認知度についてみると、ボランティアが活動していることを「知っている」と回答した割合としては「学校支援・放課後子ども教室」(74.4%)が最も高く、ついで「青少年教育施設」(64.9%)が高くなっている。[図 3-13-1]

ボランティア活動をしてみたい社会教育施設等についてみると、「学校支援・放課後子ども教室」(64.1%)の割合が最も高く、ついで「青少年教育施設」(47.5%)、「児童館等」(37.2%)の割合が高くなっている[図 3-13-2]。

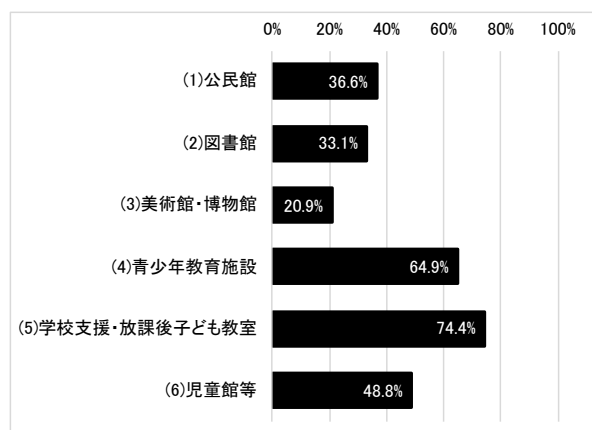


図 3-13-1 社会教育施設におけるボランティア活動の認知度 (複数回答・n=402)

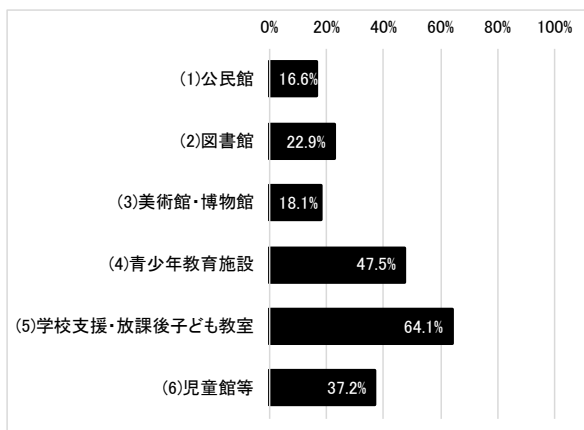


図 3-13-2 活動してみたい社会教育施設 (複数回答・n=398)

社会教育施設等でのボランティア活動を充実させるために必要だと思う支援についてみると、「参加しやすいプログラムの提供」(71.0%)の割合が最も高く、ついで「広報活動や情報提供」(65.5%)の割合が高くなっている。[図 3-13-3]

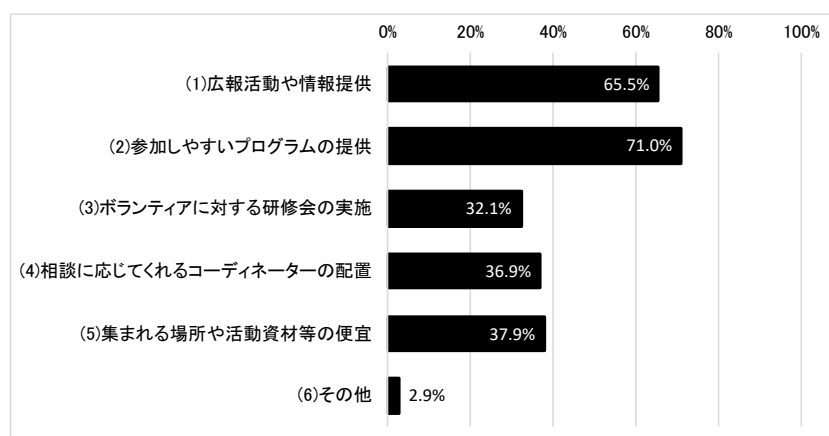


図 3-13-3 社会教育施設等での活動に必要な支援 (複数回答・n=420)

(14) 東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動に関する意識

全ての回答者を対象に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動への興味について、「とても興味がある」と「少し興味がある」を合わせると、興味がある割合は約8割となっている[図3-14-1]。

もし、ボランティア活動をするとしたら、してみたい活動内容としては「競技の運営支援」(49.8%)の割合が最も高く、ついで「会場(周辺)での観客案内」(43.0%)の割合が高くなっている[図3-14-2]。

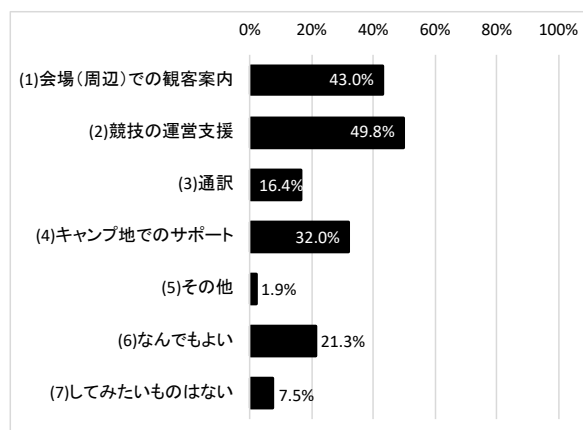
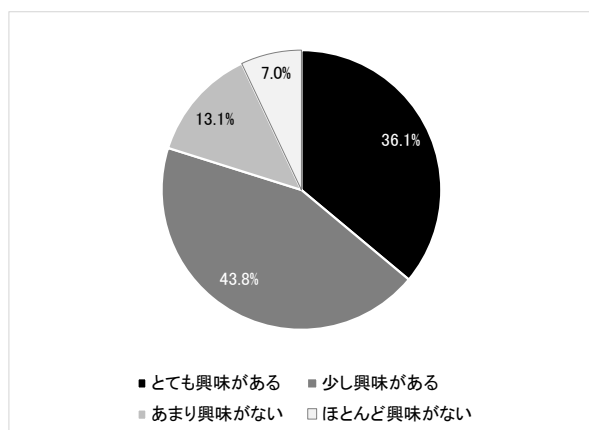


図3-14-1 オリパラボランティアへの興味(n=427)

図3-14-2 興味がある活動内容(複数回答・n=428)

東京オリンピック・パラリンピックでのボランティアに向けてしている準備についてみると、「特に何もしていない」が約8割だが、準備をしている割合では、「大学で関連する授業を受けた」(8.0%)が最も高い割合となっている。[図3-14-3]

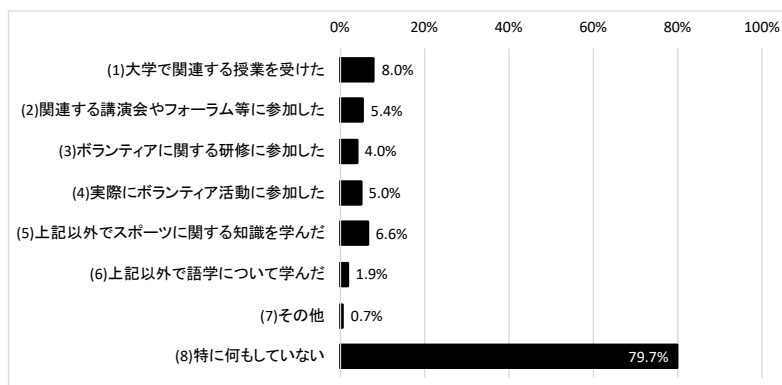


図3-14-3 オリパラボランティアに向けた準備(n=424)

(15) 大学によるボランティア活動への支援とのかかわり

全ての回答者を対象に、大学によるボランティア活動への支援とのかかわりについてみると、「大学でボランティアに関連する講義を受講したこと」がある割合は5割弱、大学でボランティアに関する相談や問い合わせをしたこと」がある割合は約5割、大学でボランティアに関する掲示板を見たこと」がある割合は9割弱となっている [図 3-15-1]。

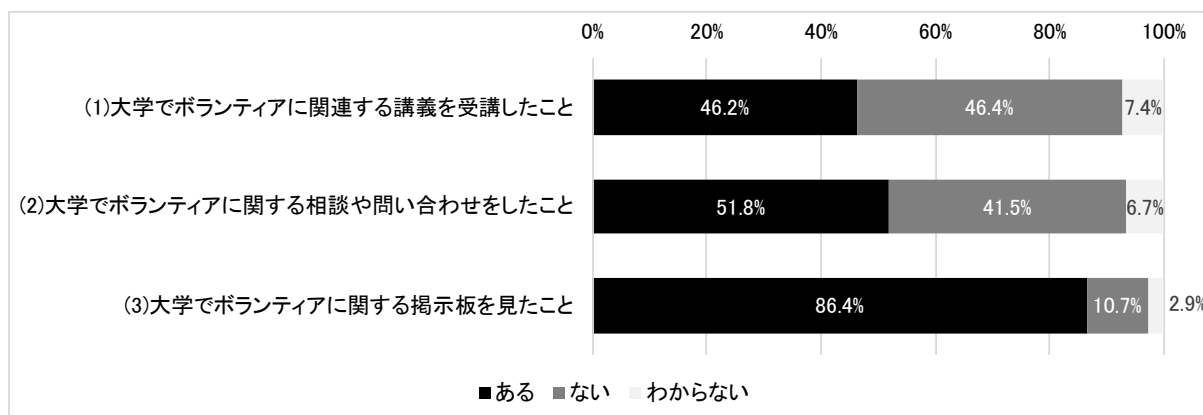


図 3-15-1 大学によるボランティア支援とのかかわり

大学で、ボランティアに関する窓口の場所を「知っている」割合は76.7%となっている [図 3-15-2]。窓口の場所を「知っている」と回答した回答者を対象に、窓口の場所についてみると、「ボランティアに関することを専門的に扱う窓口」である場合が67.9%となっている [図 3-15-3]。

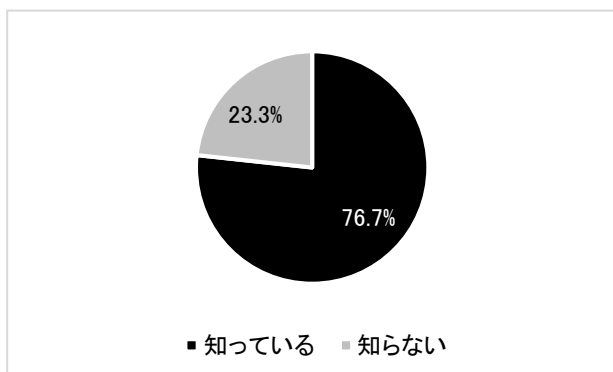


図 3-15-2 大学のボランティア活動の窓口の認知度 (n=417)

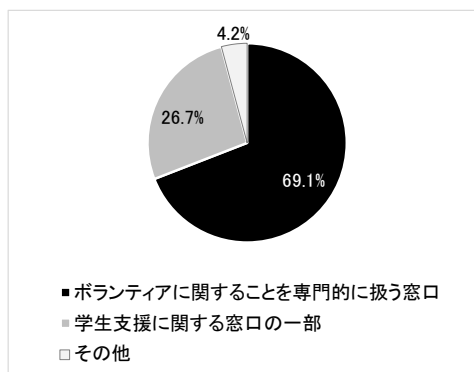


図 3-15-3 窓口のある場所 (n=288)

大学のボランティア活動に対する支援との関わりとボランティア活動・社会貢献活動の実施状況との関係についてみると、大学のボランティア活動に対する支援と関わりがあるほど、「自主的に参加」したことがある割合と、「授業等で参加」したことがある割合が高い傾向が見られる〔図 3-15-4～図 3-15-13〕

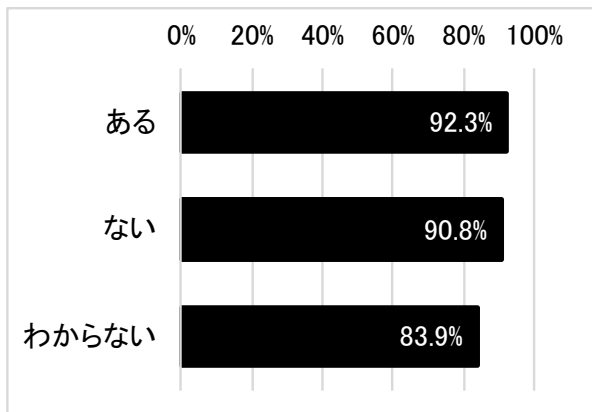


図 3-15-4 ボランティアに関する講義の受講経験×「自主的に参加」

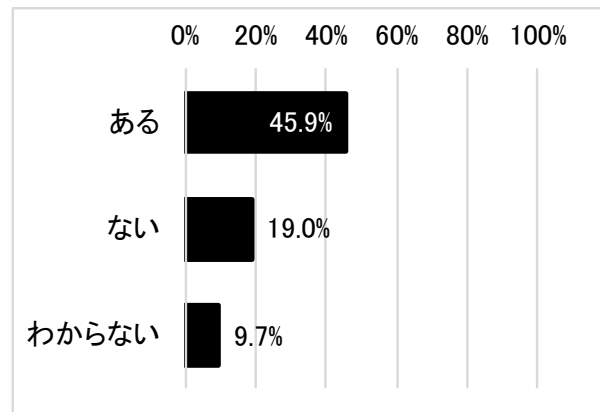


図 3-15-5 ボランティアに関する講義の受講経験×「授業等で参加」

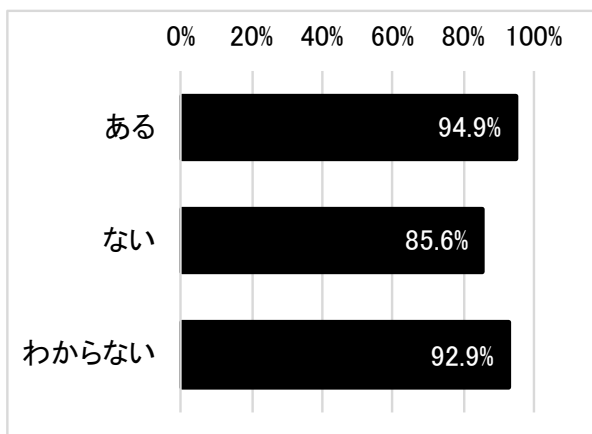


図 3-15-6 ボランティアに関する相談・問い合わせ経験×「自主的に参加」

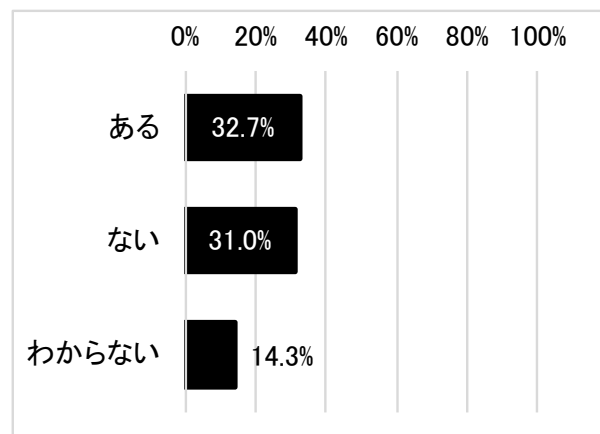


図 3-15-7 ボランティアに関する相談・問い合わせ経験×「授業等で参加」

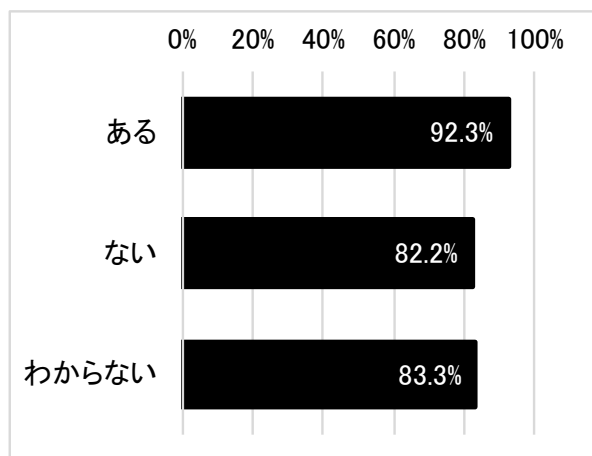


図 3-15-8 ボランティアに関する掲示板を見たこと×「自主的に参加」

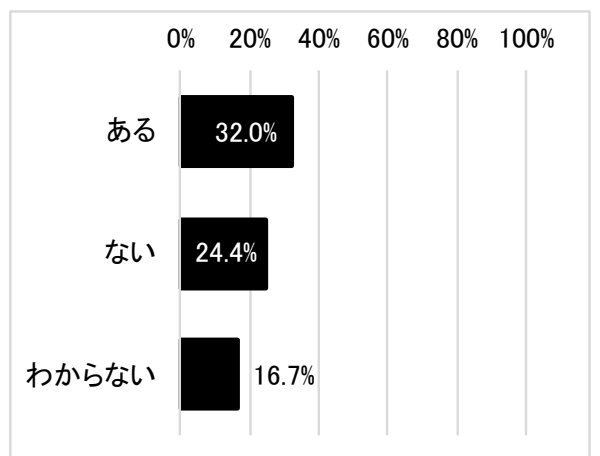


図 3-15-9 ボランティアに関する掲示板を見たこと×「授業等で参加」

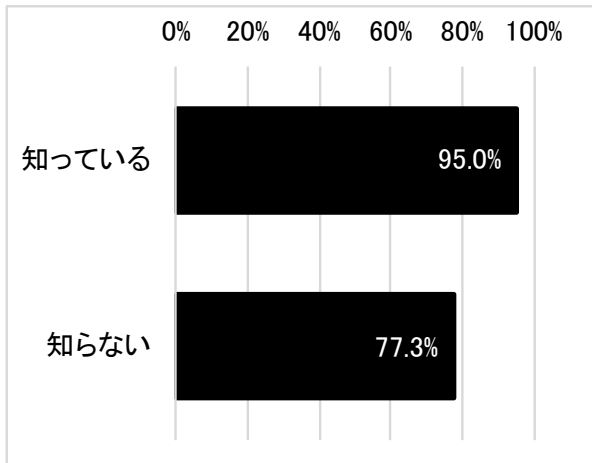


図 3-15-10 学内のボランティア窓口を知っている×「自主的に参加」

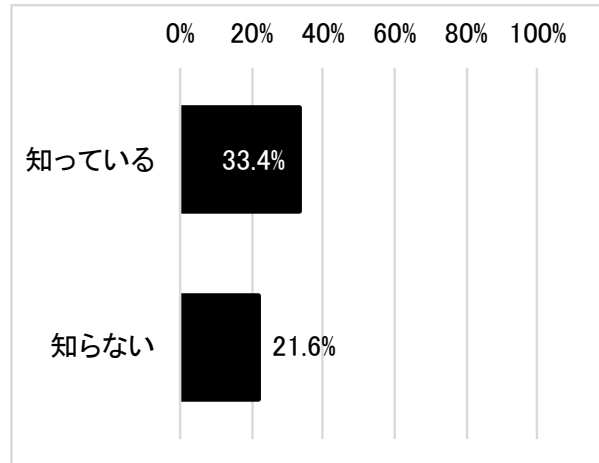


図 3-15-11 学内のボランティア窓口を知っている×「授業等で参加」

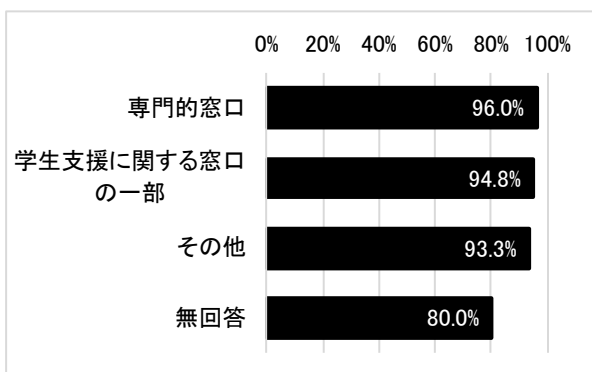


図 3-15-12 学内のボランティア窓口の設置場所×「自主的に参加」

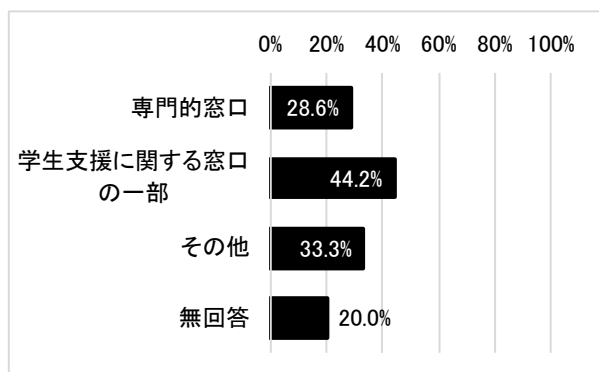


図 3-15-13 学内のボランティア窓口の設置場所×「授業等で参加」

第4章

調査のまとめ

第4章 調査のまとめ

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター
副センター長 青山 鉄兵

1. 本調査の位置付け

青少年教育の文脈において、大学生のボランティア活動は2つの意味で重要な意味を持っているといえる。1つは、大学生にとっての体験活動としての側面であり、大学生にとってのさまざまな学習や成長の機会として、ボランティア活動の体験が重要な意味を持っているということである。もう1つは、青少年教育施設・団体において、伝統的に大学生のボランティアが子供の指導者として活躍してきており、こうしたボランティアの大学生をどのように支援するかが課題となってきた。青少年教育においては、子供たちの成長と大学生自身の成長がいわば循環しながら相互に関連しているのであり、大学生のボランティア活動は、こうした循環の中心に位置づいてきたといえる。

一方で、大学生のボランティア活動の実態を把握するのは容易ではない。そもそも、大学や教員を窓口にした調査では、もともとボランティアに関わっていたり、関心が高い学生が調査対象になりやすく、専門分野等の偏りも生じやすい。また、近年ではいわゆるサービス・ラーニングなど大学の教育活動の一環として社会貢献活動の機会が提供されることも増えてきており、多様な実態の把握がますます困難になっている状況がある。

本調査は、こうした状況を踏まえ、主として以下の3つの方法で調査を実施した。

第1に、web アンケートを用いて調査を行ったことである。これは、従来の従来の大学や教員を窓口にした調査とは異なり、ボランティア活動への関心や、専門分野による偏りを抑えることができるというメリットがある一方で、web アンケートの実施機関に登録している回答者が対象になるという意味では、別のバイアスが生じうるデメリットもある。

第2に、大学の教育活動の一環として提供される社会貢献活動も含めた形で、大学生のボランティア活動・社会貢献活動の実態の把握を試みたことである。大学等の教育活動の一環として実施されるサービス・ラーニング等の取り組みは、自発性を基盤としたボランティア活動と同様に捉えることはできないが、近年のアクティブ・ラーニング等への注目の中で、サービス・ラーニング等の社会貢献活動を教育活動の一環として提供する取り組みが広がりを見せており、大学生にとっても体験活動の重要な機会となっている現状がある。また、サービス・ラーニングをきっかけとして、活動後にボランティア活動を始めるケースなど、ボランティア活動とサービス・ラーニングには、相互にさまざまな関連が見られ、両者を明確に区別するのが難しいケースも生じている。本調査では、こうした状況を踏まえ、「ボランティア活動・社会貢献活動」を、「自主的に参加したもの」（サークル等での活動も含む）だけでなく、「大学の授業やゼミの一環で参加したもの」（単位にかかわるもの）の双方を含むもの（ただし、「アルバイト」「インターン」「資格のための実習」は含まない）として捉え、調査を実施した。

さらに第3に、ボランティアに意欲的な学生の意識等について把握するため、「学生ボランティアフォーラム」の参加者を対象に同様の調査を実施した。

2. 大学生のボランティア活動・社会貢献活動の実態～2つの形態の現状～

今回の大学生のボランティア活動の実態に関する web アンケート調査（以下、「実態調査」という）では、大学入学後に、ボランティア活動・社会貢献活動に参加したことがある学生は全体の 37.5%であり、内訳は「自主的に参加」のみの割合が 23.1%、「授業等で参加」のみの割合が 6.8%、両方に参加した学生が 7.6%であった。これらを合わせると、全体では、「自主的に参加」したことがある割合は合計で 30.7%（「自主的に参加」のみ＋両方）、「授業等で参加」したことがある割合は合計で 14.4%（「授業等で参加」のみ＋両方）となっている [p.4 参照]。

以下では、「自主的に参加」する活動と「授業等で参加」する活動の違いに注目しながら、大学生のボランティア活動・社会貢献活動の実態および特徴を見ていくこととする。

第1に、大学生のボランティア活動・社会貢献活動は、特定の専攻分野との関連が見られる。「自主的に参加」か「授業等で参加」を問わず、「教育学・保育学系」や「社会福祉学系」を専攻する学生は、ボランティア活動・社会貢献活動を実施している割合が高い。

「環境科学系」「国際学系」「家政学系」は「自主的に参加」している割合は高い一方で、「授業等で参加」している割合はそれほど高くなく、「体育科学・スポーツ科学・健康科学」は、「自主的に参加」している割合はそれほど高くないが、「授業等で参加」している割合が高い点に特徴が見られる。[表 4-1]

第2に、活動内容については、「自主的に参加」か「授業等で参加」を問わず、子供や地域と関わる活動が上位を占めている。これは、上記の専攻分野と重なる部分も大きいですが、ボランティアを受け入れる側にとっても、大学生に活躍の場を提供しやすい活動であると考えられる。また、「高齢者」や「障害者」を対象とした活動などは、「授業等で参加」している割合が高い点に特徴があり、社会福祉学系などの専攻分野との関連を反映したものと考えられる。[表 4-2]

表 4-1 専攻分野（上位 5 項目）

「自主的に参加」した割合		「授業等で参加」した割合	
1	教育学・保育学系 (57.9%)	1	教育学・保育学系 (37.6%)
2	社会福祉学系 (48.6%)	2	社会福祉学系 (29.7%)
3	環境科学系 (45.5%)	3	体育科学・スポーツ科学・健康科学 (26.2%)
4	国際学系 (42.6%)	4	その他 (25.9%)
5	家政学系 (40.6%)	5	農・林・水産学系 (19.0%)

表 4-2 活動した内容（複数回答・上位 5 項目）

「自主的に参加」した場合		「授業等で参加」した場合	
1	小学生を対象とした活動 (31.1%)	1	小学生を対象とした活動 (28.0%)
2	まちづくりのための活動 (20.8%)	2	高齢者を対象とした活動 (21.0%)
3	中学生・高校生を対象とした活動 (19.9%)	3	まちづくりのための活動 (20.7%)
4	就学前の子どもを対象とした活動 (19.6%)	4	就学前の子どもを対象とした活動 (17.8%)
5	スポーツに関係した活動 (14.5%) 自然や環境を守るための活動 (14.5%)	5	障害者を対象とした活動 (15.3%)

第3に、中心的な動機については、「自主的に参加」か「授業等で参加」を問わず、「自分の成長につながると思ったから」「所属する団体やサークル等の活動の一環だったから」の割合が高くなっている。「自主的に参加」した場合には、「困っている人の手助けがしたかったから」や「楽しそうだったから」などの割合が高く、「授業等で参加」した場合には「大学の成績や就職活動に有利だから」「なんとなく（特に理由はなかった）」の割合が高い点に特徴がある。両者を比較すると、「授業等で参加」した場合の方が、外発的な動機に関する項目の割合が高い傾向が見られる。[表 4-3]

第4に、参加してよかったことについては、「相手から感謝された」「ものの見方、考え方が広がった」「楽しかった」といった項目が「自主的に参加」と「授業等で参加」に共通して見られるが、両者を比較すると、「授業等で参加」した場合には、「関心のある分野や社会問題の現場を見られた」など、特定の領域の学習に関する項目の割合が高い傾向が見られる。一方で、「楽しそうだったから/楽しかった」や「困っている人の手助けがしたかったから/困っている人のために役立てた」などの割合は、「授業等で参加」した場合の動機としては高くないが、活動した後の「よかったこと」としては高くなっており、「授業等で参加」した活動が、結果的に「自主的に参加」した場合と類似した意味をもつ経験にもなっていることがうかがえる。[表 4-4]

また、ボランティア活動に意欲的な大学生が多くを占めると考えられる「学生ボランティアフォーラム」の参加者へのアンケートでは、「自主的に参加」した場合の動機で「さまざまな人と関わりたかったから」の割合が高く、「よかったこと」では「友人や知人が増えた」の割合が高い傾向が見られる。活動を積極的・継続的に行っている学生においては、活動を通じてさまざまな人と出会えることが、活動の意義や動機付けにつながっていることがうかがえる [pp. 42-45 参照]。

表 4-3 参加した中心的な動機（上位 5 項目）

「自主的に参加」した場合		「授業等で参加」した場合	
1	自分の成長につながると思ったから (17.4%)	1	所属する団体やサークル等の活動の一環だったから (15.6%)
2	所属する団体やサークル等の活動の一環だったから (12.7%)	2	自分の成長につながると思ったから (15.3%)
3	困っている人の手助けがしたかったから (8.5%)	3	関心のある分野や社会問題の現場を見たかったから (11.8%)
4	楽しそうだったから (8.4%)	4	大学の成績や就職活動に有利だから (10.2%)
5	関心のある分野や社会問題の現場を見たかったから (7.5%)	5	なんとなく（特に理由はなかった） (6.1%)

表 4-4 参加して最もよかったこと（上位 5 項目）

「自主的に参加」した場合		「授業等で参加」した場合	
1	相手から感謝された (15.6%)	1	ものの見方、考え方が広がった (18.8%)
2	ものの見方、考え方が広がった (15.1%)	2	関心のある分野や社会問題の現場を見られた (13.1%)
3	楽しかった (13.6%)	3	楽しかった (11.5%)
4	困っている人のために役立てた (7.8%)	4	相手から感謝された (10.8%)
5	達成感や満足感が得られた (7.3%)	5	困っている人のために役立てた (5.7%)

3. 大学生の体験活動としてのボランティア活動・社会貢献活動の支援に向けて

本調査では、子供の頃の体験と大学入学後のボランティア活動・社会貢献活動の関係について分析を行った。

子供の頃の〈基本的生活習慣〉〈お手伝い〉〈家族行事〉などは様々な体験の基礎となるものと言えるが、これらのスコアが高いほど、その後にボランティア活動・社会貢献活動に参加する割合が高い傾向が見られる。また、子供の頃に、遊びや、自然体験、地域行事、学校での役員・委員や青少年団体での活動などの体験を多くしているほど、その後にボランティア活動・社会貢献活動に参加している割合が高い傾向も見られる [pp. 27-32 参照]。ボランティア活動・社会貢献活動を大学生にとっての体験活動の機会として捉えた場合、子供の頃に体験を多くしているほど、大学になってからも多くの体験をしている傾向があると考えられる。

また、ボランティア活動・社会貢献活動に参加している学生ほど、〈へこたれない力〉〈意欲〉〈コミュニケーション力〉〈自己肯定感〉といった、「社会を生き抜く資質・能力」が高い傾向が見られる [p. 33 参照]。ここでは、さまざまな活動がこうした資質・能力を高める機会になりうるということと、こうした資質・能力の高い学生ほど、ボランティア活動・社会貢献活動に参加しやすいということの2つの関連が示唆される。前者の関連については、すでにみた参加してよかったことなどからも、ボランティア活動・社会貢献活動が、大学生にとって、さまざまな学習・成長の機会になりうることを改めて確認することができる。一方で、後者の関連については、すでにみた子供の頃の体験との関係も含め、ボランティア活動・社会貢献活動に参加しやすい学生とそうではない学生がいることを示していると考えられる。

今回の調査では、今まで活動に参加していない学生の6割が、今後、活動を「可能ならしてみたい」と回答しており [p. 17 参照]、大学生の体験活動の推進という観点からは、参加しやすい学生とそうではない学生の違い等に留意しつつ、大学生にボランティア活動・社会貢献活動の機会をどのように提供し、どのように活動をサポートしていくかが、大学や青少年教育施設の今後の重要な課題であるといえる。

大学によるボランティア活動への支援については、近年の学生のボランティア活動への関心の高さに比べると、学生の認知度や利用状況が高いとは言えない状況といえる [p. 23 参照]。一方で、大学による支援と関わりがある学生ほど、ボランティア活動・社会貢献活動に参加している割合が高く、サービス・ラーニング等の取り組みも含めた大学による支援が、大学生が活動に参加する1つの契機となっている状況もうかがえる。今後は、青少年教育施設・団体など、伝統的に大学生のボランティア活動を支援してきた機関・団体とも連携しながら、大学生のボランティア活動に対する支援の充実が求められよう。

本調査は、これまでの大学生のボランティア活動に関する調査とは異なる調査方法で実施しているため、過去の調査結果との比較など、近年の動向を把握するための分析については十分にできなかった。近年の大学等でのボランティア活動・社会貢献活動に関する取り組みの広がりや踏まえると、調査方法の検討を重ねつつ、今後も大学生の活動の実態についてのデータを継続的に収集していくことが重要であると考えられる。

第5章

考察

大学に求められる役割について

昭和女子大学総合教育センター特任教授
コミュニティサービスラーニングセンター長
興 栢 寛

1. ボランティアに秘められた力

大学の教室で、学生と向かいあい、心の風景を想像するときがある。

学生にとって学びとは何か。教員は何をなすべきか。ボランティアには、一人ひとりに秘められた物語がある。コミュニティは、その物語を編む教室である。身近であれグローバル社会であれ、暮らしの“現実”であるとともに、社会課題を解決するための優しく、そして厳しい学びのプラットホームなのである。

この調査で、学生が明確に指し示してくれたことがある。「学生ボランティアフォーラム」参加者へのアンケート調査では、ボランティアに参加した動機は「自分の成長につながると思ったから」(73.3%)、「さまざまな人間と関わりたかったから」(63.1%)、「楽しそうだったから」(58.2%) [p. 42 参照]。

活動に参加してよかったことは、「ものの見方、考え方が広がった」(76.2%)、「楽しかった」(72.0%)、「相手から感謝された」(59.5%)、「友人や知人が増えた」(59.0% [p. 44 参照])。

ボランティアの相談体制として重要な機関は、「大学」(47.9%)、「地域にある関連機関」(17.5%)、「SNS やソーシャルメディア」(14.6%) [p. 52 参照]。

人が社会的人間として自己成長していくために欠かせない条件とは何か？

ジョン・デューイとともに、アメリカの大学教育におけるサービス・ラーニング理論に大きな影響をあたえた、心理学者ジョージ・ハーバート・ミードは「さまざまな他者との相互行為」(Interaction with others) であるという。

さまざまな場で多様な人と直接に交わり、言葉の行為を交わしつつ、行為の交換をくり返すことで、人は“他者”をわが心のなかに取り込む。そのことから、人は社会的自我を形成し、社会的な人間として成長していく。

では、若者はなぜ、ボランティアに違和感を持ち、自然に行動ができないのか。なぜ、人とつながりや、助けあうことに抵抗を感じるのだろうか。その原因を探ると、“自己効力感”の希薄さや、それにもなう“自己肯定感”の低さに要因があるのではないかと考える。

“自己効力感”とは、“自分はやればできる”という自信のことをいう。自分と他者との相互行為により、人や社会の役に立ち、感謝されるなどの、小さな成功体験の積み重ねが、「自己効力感」を育てていく。他人から批評されることへの恐れから逃げずに、自分の有用感の高さを保ちつづける。そのプロセスを、アメリカの心理学者アルバート・バンドゥーラは「誘導による修得」と意味づけている。

ボランティア活動は、他者や社会から必要とされ、役に立つ存在だと認められるプロセスをとおして喜ばれ、認められるストーリー性を秘めている。そのプロセスを“自己効力感の社会化 “へのプロセスと意味づけたい。

2. 学生ボランティアの歴史は大学が拓いた

「大人は言葉の実践者でなくてはならない」

世界の大学を訪れて「知識の人的活用」を訴えた、コミュニティサービスラーニング (Community Service Learning) の創始者といえる、イギリスのアレック・ディクソン (Alec Dickson) の言葉である。

経済のグローバル化が浸透するなかで、世界に新自由主義が台頭し、ミーイズム (自己中心主義) が人びとの心を揺さぶっている。地域社会であれグローバル社会であれ、人びとの誰もが夢をあきらめず、価値ある人間として敬意をもって受け入れられ、個人の尊厳をいかに確保できるか。世界中の政府が内向きになるなかで、大学はいったいどのような“言葉の実践者”でなくてはならないのか。その姿をしっかりと凝視しているのは、大学キャンパスの住人である学生ではないのか。それが、学生と向かいあってきた教員としての実感である。

日本の大学が地球環境を守り、貧富の格差を克服し、人権侵害をなくし、争いの要因を断つために“人間の安全保障”に向かう倫理性の高い教育や研究に立ち向かうことこそ、“知の実践者”である大学の役割である。

日本の大学において、学生のボランティア活動の支援が共通の問題意識となったのは1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災である。大災害は若者たちの“ボランティア衝動”を覚醒させることは、すでに1923年、関東大震災で青年団とともに被災者の救援活動にあたった東京帝国大学他の学生の行動や、大正デモクラシーを背景に全国に広がった学生セツルメントの歴史が史実として物語っている。

学生が地域社会の諸問題に眼を向け、課題解決のために貢献し実践的に学ぶ社会的環境は、やがて軍部独裁政権の誕生により厳しく制限され戦争突入のなかに埋没していった。1938年に制定された国家総動員法による「学徒勤労働員」や、戦場に赴く「学徒動員」による“強制された「奉仕」”は、けっして繰り返してはならない歴史の教訓である。

第2次世界大戦の終結とともに、学生ボランティアは荒廃した戦後社会の復興と再生に立ち向かっていく。戦争から解放された社会のなかで、多様な社会活動のスキルを蓄積した青少年団体は学生たちに多様なボランティアに活動プログラムを提供した。

その動きは、国内や海外において若者たちがボランティア活動を展開する社会的環境づくりへと実を結んでいく。全国的な青少年団体のネットワークによって1963年に設立された日本青年奉仕団推進協議会は、1965年に政府による開発途上国支援機関として誕生した青年海外協力隊 (JOCV) の設立や、1967年に国内や海外における若者たちのボランティア活動を推進する民間機関である社団法人日本青年奉仕協会 (JYVA) の設立へと実を結んだ。特記すべきは、日本青年奉仕協会設立の中心人物には、第7代早稲田大学総長・大浜信泉 (設立時・会長) や、第17代東京大学総長・茅誠司 (設立時・副会長) が名を連ねていることである。

3. 1960年代は学生ボランティアの萌芽期

日本青年奉仕協会は、1967年に全国の学生が大学の夏休みや春休みを活用して組織的にボランティア活動を行う「社会開発青年奉仕隊」(約1か月間にわたり集団で離島や過疎・過密都市で教育・環境・福祉問題に取り組む) を募集し派遣した。また、1979年には「1

年間ボランティア計画」(VOLUNTEER365)をスタートさせ、2009年の協会解散までに1,300人を超える18歳から30歳までの学生等の若者を国内各地240か所に派遣した。

派遣先は、多様な社会問題を意識した、消滅村落の基層文化の記録、民衆史博物館、アイヌ文化の記録保存、水俣公害被害者支援、ホスピス医療、子どもの冒険遊び場づくり、不登校の生徒への寄り添い、障がい者の自立生活支援、過疎地・離島の振興、地方交響楽団の支援愛隣地区の日雇い労働者支援、外国難民一時滞在施設支援、民間ボランティアセンターなどに取り組む非営利組織を支援するなど、当時の社会開発の“中心課題”ではなく、むしろ“周縁課題”を強く意識したものであった。

この「1年間のボランティア計画」は、アジア地域8か国の大学等との連携や、日本とイギリスとの「ギャップイヤー・ボランティア」(Gap Year Volunteer)交流プログラムへと広がっていった。

学生ボランティア自身が先導的な役割を果たし、1965年設立された民間ボランティア活動推進機関「大阪ボランティア協会」は、日本におけるボランティアセンターの草分け的組織である。また、いち早く「ボランティアコーディネーター」の専門的役割の重要性を提言した先駆的役割にも注目する必要がある。

このような民間の手によるボランティアセンターは、その後に京都府、兵庫県、静岡県、高知県、宮崎県、秋田県、岩手県、北海道、東京都世田谷区や豊島区など、全国各地で誕生していった。そのような地域課題に取り組む民間ボランティア協会を学生ボランティアがささえた役割は大きい。

第2次世界大戦後の1920年に誕生したサービス・シビル・インターナショナル(SCI)は、廃墟と化したヨーロッパの国や地域に国籍・人種や政治信条を超えて学生たちが集い、共同生活をとおしてボランティア活動を行う「ワークキャンプ」を誕生させた先駆的ボランティア組織である。ワークキャンプは、日本では1950年頃にSCIによって紹介(1964年にSCI日本支部を開設)されたが、1960年から70年代において学生の共感の輪を広げ、日本青年奉仕協会をはじめ多様な団体によって全国各地で開催された。また、国連・ユネスコが提唱したこともあり、世界中で学生の国際ワークキャンプ運動が広がった。

第2次世界大戦後の学生ボランティア活動の環境づくりは、民間組織によるプログラムの開拓と、学生自身の主導によってすすめられてきたといえる。

4. 大学に求められるボランティア推進と政策提言

1970年代に入ると、政府の教育政策のなかで、ボランティア活動は生涯学習推進政策とともに注目されるようになっていった。

1971年に文部科学省社会教育審議会は「急激な社会構造の変化に対処する社会教育の在り方」(答申)で青少年から高齢者に至る社会奉仕活動の推進を提言。学校教育においては、2002年に中央教育審議会が「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」(答申)では、児童・生徒や学生がボランティア活動に取り組むことの重要性が強調された。

とくに、大学等の高等教育機関においては、2005年に中央教育審議会が答申した「我が国の高等教育の将来像」や、2008年に中央教育審議会が答申した「学士課程教育の構築に向けて」のなかで、「学習の動機付けを図りつつ、双方向型の学習を展開するため、講義そのものを魅力あるものにする」とともに、体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入

れる」ことの必要性を提唱している。また、学生の学びのための動機づけとともに、社会が要請する人材像に応える人材育成の教育方法として、1980年代からアメリカの大学で急速に広がった教科教授法である「サービス・ラーニング」(Service Learning)の高等教育機関での有効性に注目が集まることになった。

2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要」、「学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できる」ことが強調された。

5. ボランティアの潜在的教育力の新たな開拓

大学教育がカリキュラムにボランティア活動の理論的、実践的学びを導入していく動きに拍車をかけたのは、文部科学省が2003年度から2007年度まで全国の大学を対象に実施した「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GPの採択)である。

また、2004年度から実施した「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)、2008年度から実施した「質の高い大学教育推進プログラム」(教育GP)などの諸施策が“追い風”となって、ボランティア活動等の社会貢献活動を取り入れた教育プログラムや、大学に「ボランティアセンター」「サービス・ラーニング・センター」等、教員の教育活動や学生の学びを支援するセンターを設立するモデルが多数採択されていった。

文部科学省の外郭団体、財団法人内外学生センターは、その動きに先駆けて1998年に「学生のボランティア活動に関する調査」(全国の98大学・10,000人対象)を発表。同時に全国の大学関係者を対象に研修セミナーを開催し、学生や教職員向けのガイドブックを発行するなどの支援を行った。

内外学生センターは、その後の組織統合によって設立された新組織、独立行政法人日本学生支援機構に引き継がれ、2006年には第二次調査報告書「学生ボランティア活動に関する調査報告書」を発表し、ボランティア動機の“自己と社会との双方向性”を指摘した。同機構はさらに2009年に「大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」を発表し、調査した1,212校のなかで320の大学がボランティア関係科目を開講し、869科目に及ぶことを報告している。

また、1995年に発生した阪神淡路大震災で活動した関西の学生たちによって1996年に設立した、特定非営利活動法人ユースビジョン(設立時の名称は「きょうと学生ボランティアセンター」)が全国1,153大学を対象に行った調査によれば、2016年に155大学(キャンパス)がボランティアセンター等を開設していると回答している。

2000年代に入ると、日本においても大学教育への「サービス・ラーニング」(Service Learning)の導入に関心を持つ研究者や大学が広がり始める。アメリカの大学で発達した教科教授法「サービス・ラーニング」は、全米ネットワーク「キャンパス・コンパクト」

(Campus Compact)によれば、現在1,100を超える大学によって取り組まれ、その教育理念は研究者によって多様な視点から概念化されている。

「サービス・ラーニング」とは、①自己との対話を重ねながら他者や社会から必要とされる自分を発見し、生きることの意味や喜びを発見する「自己への探究」(Personal Insight)。②身近な地域社会やグローバル社会の問題について実践をとおして課題解決的に学び、市民としての自覚と責任意識を育む「社会課題」の理解 (Understanding Social Issues)。③知識や技術などの学習成果を社会課題の解決のために役立て、学ぶことの意味や喜びを発見し、それをより創造的な学びに発展させる「学習成果の応用」(Application of Skills) の3つの教育的要素によって概念化することができる。

日本の大学が、人間としての普遍的、全体的、調和的な完成をめざす創造的な教養を培うリベラル・アーツを深化させるためにも、ボランティアのもつ潜在的教育力にさらに注目していくことを期待したい。

6. 私が変わる、社会は変わる

社会学者の暉峻淑子という。

「日本の学校も社会も、職業のためのスキルを高めることには大きな関心を払うようになった。しかし、その反面、社会人としてのシティズンシップを育てることについては、あまり関心がない。シティズンシップとはまさに社会人として必要な教養と行動力なのだ。それなしに民主主義は維持できないのに、若者たちは社会人になるとはどういうことか、漠然とした不安を抱いたまま社会に出る。社会人としてシティズンシップを持つには、個人が自己の価値に目覚め、自尊感情を持つことが前提になるが、『自分が悪い』から職につけないのだと思っているうちは社会人意識も育たない」(『社会人としての生き方』岩波新書, 2012)

日本財団が、インド、インドネシア、韓国、ベトナム、中国、イギリス、アメリカ、ドイツと日本の9か国の若者(2019年に各国1,000人の17歳から18歳を対象)に尋ねた調査では、「自分で国や社会を変えられると思う」と答えた割合は、日本が18.3%で調査国中の最下位だった。また、「自分を大人」「責任ある社会の一員」と答えた若者は、約30%から40%で、他の国と比べて3分の1。「将来に夢をもっている」「国に解決したい社会課題がある」と答えた若者は、他国に比べて30%近く低かった。「自分で国や社会を変えられると思う」と思う若者は5人に1人で、最も低い韓国と比べても半数以下。国の将来像に関して「良くなる」と思う若者は、トップの中国(96.2%)の10分の1で最も低かった。

2019年7月に行われた参議院議員選挙の投票率は全体が48.80%だったが、20代の若者は30.96%だった。18歳、19歳を合わせた投票率も3割台前半で極端に低かった。また、2017年の衆議院議員選挙では、20代(25歳以上)の候補者は、わずか2%で、30代は11%にすぎなかった。

2000年代に入ってイギリスの教育界で注目された、「コミュニケーション、探求心、参加意識、責任ある行動」について学び「見識ある市民」(Informed Citizen)を育てることを目的とした「市民教育」(Citizenship Education)は、ボランティア活動の持つ潜在的教育力を多様な視点から分析している。とくに教育において、①個人の自尊意識と教養をしっかりと高める、②社会の状況を的確に判断する力を養う、③良き社会人として、人間関係を築く力を育む、④生涯をとおして社会参加を有意義におくることができる力を培い、失敗を恐れずに自ら行動し、積極的に他者と交わり、社会を変える主体的な行動力(ボラ

ンタリズム)を獲得するという目標は、日本の大学教育に共通する課題である。

大学キャンパスは、教職員と学生とのコミュニケーションを深めるために世代によって原体験が異なる。世代によって異なる情報ツールやメディアや関心のある情報内容と量も異なり、ますます相互理解と対話が難しくなっている。多様化する社会において、世代間の断絶を超え、ともに共有できる価値観や問題意識とは何かを探り世代を超えた価値意識を共有するために、学生とコミュニティとの橋渡しをしてくれる市民社会の“中間支援機能”としての期待は大きい。

ボランティア活動は、自分たちの社会は自分たちでつくるという、市民としての自立性を意識化するための一歩である。その一方で、市場・競争・管理社会の原理から脱出して、自己肯定観を育み、自分らしさを再発見し、自分と社会とのかかわりを再認識するための有効な自己実現の手段でもある。

大学においては、学生が学びをより深め、修得した学びとスキルを社会課題の解決のために応用しながら創造力を培い、社会の主体としての自覚と責任意識を育む授業カリキュラムの開発が期待される。そのためには、より多彩なカリキュラムの開発研究や、熟練したコーディネーターを配置し、キャンパスライフにおける自己を探求するための活動メニューの選択肢が多様であればあるほど、学生の主体性を育てていく。

ボランティア活動の“相互行為”が社会集団の対立と分断を超え、世代間の相互理解と対話をすすめ、成熟した民主主義を育み、学生の新たな可能性を再発見する希望への扉となることを願っている。

考察 2

大学生の地域におけるボランティア活動を支援する視座

～若者達が地域で活躍（ときめき）、学び成長をしていくために 社会教育行政ができること～

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

客員教授 服部 英二

1. はじめに

今回の調査は、大学生等のボランティア活動の実態（実際の関わり方やニーズ、意識等）を把握し、今後のボランティア活動等の支援の在り方などを探る基礎資料を得るとの目的で行われたものである。実態調査の結果を概観すると、大学生の 37.5%が大学入学後に、何らかのボランティア活動・社会貢献活動に参加したと答えている [p.4 参照]。この中には授業等で参加した活動も含まれているが、その中で自主的に参加した割合だけを取り出してみても 30.7%となっている。また、活動日数を見てみると、自主的な参加に限っても 30 日以上が 19.2%、そのうち 100 日以上が 8.4%となっている [p.10 参照]。

また、今後やってみたいボランティア活動については、まちづくりや子ども達を対象とした活動などを中心に様々な分野に対して関心があるといった結果が得られた。

今後やってみたい活動	割合	今後やってみたい活動	割合
まちづくりのための活動	31.3%	スポーツに関する活動	23.4%
文化・芸術・学術に関係した活動	30.6%	就学前の子どもを対象とした活動	22.8%
小学生を対象とした活動	28.3%	中学生・高校生を対象とした活動	21.6%
自然や環境を守るための活動	28.2%	災害に関係した活動	21.1%

※ 2 割以上の関心があった項目のみ抜粋。[p.10 より作成]

これらのデータを見る限り、現在、地域社会が直面している多様な課題に対して大学生がボランティア活動等を通じて、その力を発揮するベースやニーズは大いにあるのではないかと心強く感じられる。

しかし一方、社会教育活動の観点からは危惧される結果も今回みられた。ボランティア活動をしてみたい教育関係施設を尋ねたところ、社会教育施設の中では、図書館の割合は 34.1%とボランティア活動の場として比較的認知されているが、それ以外の社会教育施設については、美術館・博物館（25.8%）、公民館（19.5%）となっており、学生にとっては馴染みが薄い傾向にある。さらには、青少年教育施設に至っては 12.0%と衝撃的なデータが得られた [p.21 参照]。本来、若者達を対象としているはずの青少年教育施設でありながら、肝心の多くの若者にとってボランティアとして活躍する場としてイメージされていない数値は何を物語るのであろうか。「学生ボランティアフォーラム」参加者へのアンケート調査では、対象者が日頃から青少年教育施設に関わりのある大学生がほとんどを占めるといった条件の違いもあってか、全く異なる結果になっており、ニーズが全く無いわけでもなさそうである [p.53 参照]。

社会教育施設では、ボランティアが活躍できるプログラムの提供や場づくり、広報活動など様々な支援が一般的に行われている。しかし、若者達にボランティア活動の場として必ずしも認知されておらず、社会教育施設と若者達との間に仮にバリアがあるとすれば、どこに課題があるのだろうか。

本稿では、現代の若者達にとってボランティア活動がどのような意義を有し、それらを支援する立場からは、特に何に留意して置く必要があるのか、また地域の社会教育活動が大学生にとって、その活躍の場として魅力あるものとなるには、どんな点に留意しておくべきなのかを探って見たいと考える。

2. 大学生のボランティアを支援することの社会教育活動上の位置づけ

社会教育行政の視点から、大学生のボランティア活動を支援するという事は、大きく二つの意義があると考えられる。

一つ目は、何より大学生自身がボランティア活動を通じて、自己の成長を凶ってもらふことを教育的に支援していくことである。それは、若者達の全人的な成長を促し支援するという教育的な観点から、現代の若者に欠けがちな実践的・体験的な活動の場の一つとしてボランティア活動を奨励していくことである。また、若者の成長の糧ともなる社会参加体験の機会を意図的に創り出し、社会や他者と積極的に関わってもらふこと、すなわち、若者が自立した市民として育てていくために必要とされる教育機会を提供することである。それは社会人としての準備教育の一つに大学生のボランティア活動を位置づけ、社会教育活動の中でも、その支援を展開するものである。

もう一つは、大学生を含む若者自身が地域社会の一員、担い手としてボランティア活動を通じて、その力を発揮できるように支援していくという視点である。これはどちらかという、若者も一人の地域住民・地域のボランティア活動の実践者として、その力を十分発揮できるように、その学習支援を行なうものである。したがって、大学生に地域の社会教育活動の担い手、主役としての役割を期待するものと捉えられる。

もちろん両者は必ずしも相対立するものではない。しかし、あえて区分してみたのは、地域社会における大学生のボランティア活動を支援することは、単に若者自身の成長にとって教育的意義があるというばかりではなく、社会教育活動の中で若者の力が発揮されるようになることにも重要な意味がある。なぜなら若者のボランティア活動は地域を活性化し私達が暮らす社会を駆動させていく上で大きな役割を担うからである。特に今日、人口減と高齢化が進み、若者の姿が見えない過疎に喘ぐ多くの地域社会にとっては若者が社会教育活動に関わることは、文字どおり地域が蘇り生き返ることでもある。(注1)

なお、こうした観点に立って、画期的とも言える青少年教育施策が既に今から約35年前の1983年に文部省から打ち出されている。参考までに当時の「青少年社会参加促進事業」の予算要求資料を少し抜粋してみたい。そこには、次のように記されている。

「青少年の人格形成を助けるとともに、青少年の創意とエネルギーを生かして、我が国が将来にわたって活力ある社会を築いていくための具体的施策として、高校生等のボランティア活動を促進する必要がある。」(注2)

若者のボランティア活動を支援することは、若者自身の成長に寄与する教育的な意義が重要なことは言うまでもないが、若者達を専ら教育活動の受け手として受動的に捉えてはならない。それでは極端に言えばお膳立ての弊害が生じかねない。若者達の地域における

ボランティア活動を支援することは、様々な配慮は必要になるだろうが成人と同様にその自主・自律的な活動を基点にすべきだと考える。それには、大学生であってもボランティア活動を通じた地域活動の実践者・学習者としての役割を踏まえた視点やそれに基づくサポートが社会教育活動には求められることを先ず押えて置きたい。

3. 若者にとってボランティア活動の教育的な意義

では、そもそも若者にとってボランティア活動は、なぜその成長にとって教育的に意味があるのか。これについても二つの視点から考えてみたい。ドイツ語の「なぜ」には、二つの意義があると言われる。一つは、何のために (Wozu) という目的を表わす言葉である。もう一つは、どういう仕組みやプロセス、どういった理由で効果 (Warum) があるのかの視点である。ボランティア活動が教育的な意義があるとするなら、それは何のためにと問われれば、あえて簡潔に言えば、若者を自立した市民として育てていくために意味があるからである。または、文部科学省が掲げる「生きる力」を若者達に育むためであり、若者達の全人的な成長発達を促していくために大切だからである。

一方、どういう点で教育的に効果があるのかと考えれば、特に今日、若者達が青少年期の成長発達の過程において、社会との関係が希薄であったり、かつては日常的に得られた様々な体験的な活動の機会が得にくくなっている現状にあって、若者がボランティア活動を行うことは、社会や様々な人々と関わり、実践的な直接体験ができる豊かな体験活動の場として大きな意義があるからである。この二つも必ずしも切り離せないことかもしれないが、どのような理由から特に現代の若者にとってボランティア活動が必要になっているかを分析していくためには、区分を試みて考察してみることも一つと考える。

(1) 社会貢献活動は「社会を知る」「自分をみつめる」「学びを深める」うえで効果的

一般的にボランティア活動・社会貢献活動は、具体的にどのような点で教育的な意義があると捉えられているか。ボランティア活動の普及実践に永年携ってきた本研究委員会の座長である興梠 寛氏は、ボランティア活動の持つ潜在的な教育力に着目し、その教育的な意義を大きく次のような3つの観点から取りまとめ整理している。(注3)

一つ目は、他者や社会に関わることを通して、地域社会の課題や世界のグローバル社会で起こっている諸問題等に直接触れることができ、社会に対する関心が高まり、社会への理解が促される「社会問題への理解 (Understanding Social Issues)」に役立つという観点である。

二つ目は、ボランティア活動を通して自らの生き方を見つめ直すことができ、「自己への探究 (Personal Insight)」につながるのではないかと教育効果である。

三つ目は、習得したスキルや学校で学んだ学習成果などを社会に還元活用し、さらなる学習を深めていくという「学習成果の応用 (Application of Skills)」に関するものである。

つまり、これら三つは平易な言葉で表すと、「社会を知る」「自分をみつめる」「学びを活かし、深める」といった教育効果と捉えることができ、それらは相互に関連しているものの大学生が社会貢献活動を行う際に得られる教育効果を端的に表していると考えられる。

(2) 現代の大学生にとってのボランティア活動・社会貢献活動の具体的な効用

ボランティア活動などを含む社会貢献活動は、現代の学生自身にとっては、社会の変化

の中で日常的には中々得られにくくなった直接体験や社会参加体験など豊かな体験活動の機会や場を補完し、多様な人々と触れ合う場を提供する教育プログラムとして大きな役割が期待される。こうしたことを踏まえ、現代の大学生にとっての社会貢献活動の具体的な役割や効用を、改めてまとめてみると次のとおりとなる。(注4)

【大学生にとって 実践的な体験活動の場としての 社会貢献活動】

- ① 社会の課題を知る（社会の課題を「自分ゴト」として捉えられる。幅広い視野を獲得する）
- ② 実際の社会に触れる（コミュニケーション力が身につく。社会性が体得できる）
- ③ 他者と触れ合う（異なる世代、異質で多様な人々との交流が図られる）
- ④ 社会の中での役割を学ぶ（連帯感を醸成し、社会の一員としての意識が育まれる）
- ⑤ 自分自身との対話ができる（他者等を通し自分をみつめる。自己への探究が促進される）
- ⑥ 深く学ぶことができる（学びと実践を往還させることでさらに学習が深まる）
- ⑦ 進路を考えるのに役立つ（自分自身の将来や進路選択に影響を及ぼし、寄与し得る）

なお、これらの教育効果はあくまで一般的なものであって、個々人が何に感銘を受け、何を学びとるかはみな違ってくるのかもしれない。なぜなら何のためにボランティア活動を行うかは、一人ひとりが主体的に考え、自分自身で継続して問い続けていくべきものだからである。さらにボランティア活動等に様々な教育効果が期待されるにしても、若者達が実際に活動に携わっていく中では、各々の想いや動機も異なり、活動を行う場所等も多種多様であることなどにより、その効果もむしろ各々異なるものだからである。

4 社会教育活動の観点から、若者のボランティア活動を支援する視座

若者にとって、ボランティア活動が持つ教育効果について掘り下げてみたが、社会教育活動の観点からは、冒頭でも触れたように若者のボランティア活動を単に社会人への準備教育としてのみ捉えるだけでは、その全体像を明らかにし得ないと考える。

そこで、若者のボランティア活動を支援する上での基本的な視座を探るために、若者にとって地域におけるボランティア活動が社会教育活動の場における学習活動とどのような関連があるかについて、次に検討してみたい。

（1）学習活動として位置づけられるボランティア活動の性格から、若者を支援する視座

ボランティア活動が若者にとって教育的な意義があるのであれば、それは若者の側から見ると、ボランティア活動は「生涯にわたる学習活動」の一つとなっているということである。したがって、ボランティア活動と生涯学習との関連について先ず見てみよう。国の答申を見ると「生涯学習は、学校や社会の中で意図的、組織的な学習活動として行われるだけでなく、人々のスポーツ活動、文化活動、趣味、レクリエーション活動、ボランティア活動の中でも行われるものである」とされ、学習活動はボランティア活動など能動的な学習も含めて幅広く捉えられていることが分かる（中央教育審議会答申「生涯学習の基盤整備について」1990（平成2）年）。

また、その具体的な位置づけについては、次のように3つの関連が指摘されている。

「一つ目は、ボランティア活動そのものが自己開発、自己実現につながる生涯学習となるという視点である。二つ目は、ボランティア活動を行うために必要な知識・技術を習得す

るための学習としての生涯学習があり、学習の成果を活かし、深める実践としてボランティア活動があるという視点である。そして、三つ目は、人々の生涯学習を支援するボランティア活動によって、生涯学習の振興が一層図られるという視点である。」(生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」1992(平成4)年)

地域の社会教育活動で若者のボランティア活動を支援推進するには、先ずこうした観点を踏まえた対応が求められる。補足する必要もないが、例えば、スポーツ教室を主宰しているNPOの活動に参加して、子供にサッカーを教えるボランティア活動をしたとしよう。子供達から慕われ、自分なりにうまく指導できたことで達成感等が得られる。また団体の指導者から感謝されることで、自分が役に立ったといった自己有用感も生まれるかもしれない。ボランティア活動そのものが喜びとなり、自己実現が図られるのである。二つ目の視点は、子供達を指導する以上、「無知の善意は許されない」ので、安全のために子供の発達上の特性やリスク管理等について予め学習をする。つまりボランティア活動に入る前に準備のため事前学習を行う。また逆に活動を終われば、子供達との接し方はどのようであったか等を振り返り、自分のスキルや知識、対応等を再確認し、さらにそれらを深めるための学習活動を展開したりもすることだろう。若者のボランティア活動を支援するには、このような循環的な学習プロセスを大切にしたいサポートが求められる。

さらには、ボランティア活動が、現代の若者にとって生涯にわたる能動的実践的な学習活動として捉えられるならば、人々が地域における学習活動を展開する際に留意しておくべき要件も満たしておくのも効果的と言えるであろう。

(2) 学習活動に必要な3要素(①興味・関心②良き導き手③仲間の存在、継続の大切さ)

社会教育活動の場における学習活動にとって高い学習効果が上がる要件としては一般的に3つの要素が挙げられる。一つ目は、「興味・関心があること」、すなわち「好きこそ、ものの上手なれ」である。興味・関心があることには人は意欲的におのずと取り組むことができる。動機づけが明確であれば、より自発性・主体性も発揮しやすいということである。そのためには、若者達の興味関心を踏まえた多様なニーズに応えられる様々なボランティアのメニューの提示が重要となる。ただし、活動プログラムやメニューは、あくまで一步を踏み出してもらうための参考例でそれが固定化され、それ以外のボランティア活動はお断りといった対応では本末転倒である。若者達の自主性を尊重しつつ、パターン化されない魅力的なボランティア活動を発想力の豊かな若者と一緒に開発していくことで、さらに地域の社会教育活動はパワーアップしていくということを肝に銘じて置きたい。

二つ目は、学習活動にとって大切なことは「一流の指導者、助言者、導き手に恵まれること」である。ボランティア活動を通して目指してみたいモデルや意味ある他者に出会えることは、若者達にとって大きな飛躍への一步である。また、若者のボランティア活動は社会的な未熟さも内包しているのが通例である。その意味で、社会教育活動における指導者・コーディネーター役の大切さを改めて強調して置きたい。

三つ目は、「仲間の存在」である。コンパルソリーでない自発的な学習活動には、互いに励まし合い、ある時には切磋琢磨する仲間がとても重要である。こうした条件があれば、学習活動に継続性が生まれ、さらに継続することによって学習活動はより効果が高まり、スキルや技も上達するのが一般的である。ボランティア同士が相互に交流できる機会や場づくり、ボランティアフォーラム等のサポートはその意味でも若者のボランティア活動を

支え、効果あらしめる上で大きな役割を果たす。

（3）ボランティア活動が持っている特質によって若者が学べること、それに必要な要素

さらに、若者がボランティア活動を通じて「何を、どのように学ぶこと」で、その学習効果が上がるかについて、他の学習活動には見られない特徴を探るために、ボランティア活動を基礎づける固有の4つの特質に再度立ち返って、検証してみたい。

① 自発性の観点から⇒ボランティア活動のように、自由な意思で自発的・主体的にものごとに関わる実践的な活動を通して、若者達は、他に依存するのではなく、自分の意思で物事を捉え、自ら課題を見つけ考え、行動していきける「自立的な態度や方法」「課題探究力・課題解決力」などをより身に付けることができる。

② 無償性の観点から⇒経済至上主義的な考え方が広く蔓延しつつある現代社会の中で、基本的には無償のボランティア活動に参画することで必ずしも金銭や経済行為に直接換算されない普遍的な価値観や社会に必要とされる円滑な人間関係の在りようの大切さ（例えば、社会的な繋がり「ネットワーク」や絆、相互の信頼関係に基づく協力・協調の考え方、人間が人間であるための共生の文化、社会関係資本「ソーシャルキャピタル」、相互扶助、お互いさま・互酬性の規範等）に気づくことができる。また無償で見返りを求めない基本的には「手弁当の活動」だからこそ、市場原理に巻き込まれた価値観や事象に依存せずに、自立（インデペンデント・独立）し、自由（フリー）・自律的な立場で他者や事物と関わり、自分自身で考え判断し、行動できる余地が広がるものとする。（注5）

③ 公共性の観点から⇒社会に貢献するボランティア活動を通じて、一人ひとりが社会的な役割を実感し、「社会の一員としての責務や責任、権利」などを観念的なものではなく、実践を通じて考え、学ぶ機会を得ることができる。また、社会生活を営む上で必要とされる社会性を体得するとともに、他者とのコミュニケーション力などを磨くことができる。

④ 先駆性の観点から⇒人々の関心が薄い社会的な課題や、政治・行政がとると見落としがちな生活課題、グローバルで国際的な課題等に、民が主体で他に先駆けて創造的かつ柔軟に機動的なカタチで取り組まれているボランティア活動やNPO活動等に参画し関わったりすることで、過去の常識等に捉われない考え方や未知の分野に挑戦していく力等を育むことができる。また、これから起こり得るであろうリスクを予測し、準備し解決していく「イノベーション的な」思考方法や習慣を身に付けることもできると思われる。

こうした活動の特質を踏まえて、若者達のボランティア活動を支援するためには、どのようなことが必要であろうか。私は、次のような4つの視座は欠かせないとする。それは、若者達の自発的なボランティア精神を尊重し、①自主性・自発性を基点にしつつ、②若者自身の自立・自律性に配慮して、③社会の最前線で若者達はその役割を發揮できるようにサポートすること、さらには、④若者の持つ清新さや創造性を發揮できるような場の設定などに努めることが特に大切であるとする。

さらに補足すれば、①活動面では、その自発性・主体的な関わりがきちんと担保できるようにすること、②無償・手弁当だからこそ得られる喜び、人間関係の機微や在りようが伝わるような活動の提示、活動に際して若者達の自立（独立）・自律的な活動が行えるような配慮、③多様な社会課題等に触れられる場や機会の提供、若者達が必要とされているという実感が持てる場、若者の力が發揮できる「要場所づくり」（単なる居場所ではなく、そ

こに「役割」がある)、若者の適性を踏まえたプログラムの工夫、④若者の可能性を信じ、若者達が持つ柔軟な既存の常識等に捉われない思考や感性を尊重(リスペクト)し、その力や可能性等を引き出すコーディネート機能などが重要になってくるものと思われる。

(4) 若者の地域におけるボランティア活動を活性化する上で、大切な「環境醸成」

地域において、若者達のボランティア活動を支援していく取組としては、一般的に活動プログラムや活動場所の提供、情報提供などが行われている。

今回の実態調査では、調査事項を焦点化した関係等で、特に調査項目に挙げられていないが、「学生ボランティアフォーラム」参加者へのアンケート調査では社会教育施設等においてボランティアがさらに活躍するには、どのような取組が必要かを大学生に聞いている。その結果を見ると、①参加しやすいプログラムの提供(71%)、②広報活動や情報提供(65.5%)が占め、③集まれる場所や活動資材等の便宜(37.9%)、④相談に応じてくれるコーディネーターの配置(36.9%)、⑤ボランティアに対する研修会の実施(32.1%)の順となっている [p.53 参照]。

しかし、こうした個々の取組を行う前提となる若者へのアプローチの視点や地域の社会教育活動を推進する上で留意して置くべき要素や条件があるに違いない。

社会教育法の第3条では、社会教育行政を進めていく上での国や地方公共団体の任務として、「社会教育の奨励に必要な施設の設置や運営、集会の開催、資料の作製等を例示しつつ、すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自ら実際生活に即する文化的教養を高め得るような環境を醸成するよう努めなければならない。」と明記している。

若者が地域でのボランティア活動を通じて学び合い、一人ひとりが成長を遂げていくには、それに必要な教育文化環境を醸成していくことが肝要である。喩えは、相応しくないかもしれないが、いいお酒が醸成されるには、いいお米と清らかな水、一流の杜氏が大切である。さらに、その上で一定の条件や酵素、温度管理等が適切になされ、麴・酵母が働き、全てが互いに影響し合い、時を経て、その風土に根差した美味しいお酒が出来上がる。

若者にとって社会教育活動を魅力あるものとするには、初心に立ち返って社会教育法の「環境醸成」の意味を、もう一度振り返って見ることも必要ではなからうか。

今回の実態調査では、大学生がボランティア活動に参加した動機について、「自分の成長につながる」(45.4%)、「様々な人と関わりたかったから」(28.5%)、「楽しそうだったから」(26.7%)、「関心のある分野や社会問題の現場を見たかったから」(26.2%)と答えた割合が高いという結果が得られた [p.11 参照]。

また、活動に参加してよかったことについてみると、「楽しかった」(41.6%)、「ものの見方、考え方が広がった」(40.5%)「相手から感謝された」(38.9%)、「達成感や満足感が得られた」(32.3%)が比較的高い傾向を示している [p.12 参照]。

これらのデータからは、大学生が地域社会の中で様々な人々と出会いつつ、社会の最前線の場に触れながら、自分達が持つ力を発揮することで、人に頼られる喜びを実感し自分達の活動が役立つ手ごたえを体得している姿が読み取れ、ボランティア活動は今日の若者達にとって大きな意義を有するものと解される。

であるならば、若者達がボランティア活動を通じて、地域社会の中で、新たな出会いにワクワクと心ときめかせ活躍することできるような場づくり、さらに、その成長が促され

るような環境をどのように醸成しコーディネートしていくかは、まさに社会教育関係者の腕の見せどころである。

そうした理由から、本稿では若者を対象にしたボランティアの支援プログラムや情報の提供等の個々の取組を行う上で基盤となる視点や要素、条件の洗い出しを私なりに試みてみたつもりである。

5. 結びに

現在、地域社会は疲弊化し、地球規模においても様々な課題が山積みしている中、社会教育活動はこうした社会課題に対して何を成し得るだろうか。また、実態として若者達との接点も中々見出しにくい社会教育施設は、若者達へのアプローチの糸口をどこに求めたらいいのだろうか。進学率の上昇の結果、高校には若者の98.8%が進み、大学・短大等へは57.9%が進む現状にあっては(注6)、先ずこうした機関との連携を急ぐ必要があるが、連携が叫ばれている割には、あまり進んでいない実態も見られる。

しかしながら、現在、大学等の高等教育機関に対しても市場原理の導入が強く求められ、グローバル化し変化する社会の中で、大学等は学生の教育活動における質の保証をどのようにしていくかが問われるなど様々な課題を抱えている。一方、文部科学省は平成29・30年に改訂された学習指導要領において、子供や若者が生涯にわたって学び続けられるようにする観点から、アクティブ・ラーニングを提唱し、「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」をテーマに掲げ、「社会に開かれた教育課程」を標榜し、学校等に対して、その授業改善に取り組むよう改革を進めている。

主役となるべき若者達の現状に目を転ずれば、経済がグローバル化し、インターネット等の普及のおかげで、地球規模で様々な情報へのアクセスも可能な社会が生まれていながらも若者達は益々孤立化を深め、疎外感を感じ将来への展望や希望を抱けない状態にある者も少なからずいると言われている。このことについて村上龍は、その小説『希望の国のエクソダス』の中で、主人公の中学生に「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」と語らせている。(注7)

しかし、そうした状況にある現代だからこそ、学校教育のアプローチとは異なる特徴を持つボランティア活動を通じた地域での学習活動は一層大きな意味を持つ。

現在、開かれた教育活動を目指すことが求められる学校機関と地域の社会教育活動が各々の強みを活かしながら、連携し協働する機はまさに熟しているのではなかろうか。

さらに今回の調査からは、ボランティア活動・社会貢献活動に参加している大学生ほど、〈へこたれない力〉や〈意欲〉、〈コミュニケーション力〉、〈自己肯定感〉の4つの指標の数値得点が高いという知見も得られている [p.33 参照]。

こうしたことから、若者のボランティア活動を通じた地域における学習活動の意義はもっと注目される必要がある。若者の真の成長を願う大人社会や教育関係者は、今一度、地域におけるボランティア活動を通じた学習活動の重要性を再評価すべきであると考えられる。

最後に、「ボランティア活動を通じた学習活動」は、「なぜ」現代の若者にとって意味があるのかを問い直してみよう。(注8) 答えは人それぞれであろうが、取りまとめに代えて、私が考える3つの可能性を掲げ、本稿を閉じることとしたい。

ボランティア活動を通じた地域における学習活動は、

- ① 真の総合的な学力を身に付けるうえで大いに役立つ。過去の知識の蓄積だけではなく、不確実な将来に対処し得る「未来のための学習」の基礎を学ぶことができる。
- ② しがらみや社会の偏見、私たちを取り巻く見えない壁に捉われず、自分の頭でものごとを捉え、考え、行動していける「自立・自由であるための学習」として効果的である。特に主体的・自律的に行動していける態度やスキル・智慧を身に付け、磨くことができる。
- ③ 将来への『希望』が見出しにくい現代の社会にあって、若者が他者と関わり共に希望を紡ぎ合い、この社会の中で皆が共に生きることを学ぶ「閉塞感を打ち破るための連帯・協働のための学習」として、いっそう重要な役割を果たすに違いない。

(注9)

(注1) 地域社会の過疎の問題は、都市の漂流し孤立化に益々拍車をかける日本全体の課題でもあり、「グローバル」という造語にみられるように、地球規模や世界の問題ともつながっている課題である。

(注2) 社会教育局青少年教育課「青少年参加促進事業」『文部時報』文部省大臣官房編集 第1285号(特集『青少年の社会参加』)1984, p.46 ほか参照。青少年参加促進事業は、関係の補助金等の整理統合や事業の組換え等により、昭和60(1985)年に地方生涯学習振興費補助金に一元化されている。また、その間に事業実施に当たっての補助要項や運用の記載方法等も変更されている。なお、本事業が、青少年を地域社会の一員として明確に位置づけていること、高校生に焦点を絞ってその政策展開を試みたことは、35年経った今でも色褪せないし、むしろ民法改正で成人年齢が2022年から満18歳に引下げられる中では、とても意味深いと考える。

(注3) 興梧寛『希望への力 地球市民社会の「ボランティア学」』光生館、2003年、p.160。日本ボランティア社会研究所ボランティア学習事典編集委員会編『ボランティア学習事典 まあるい地球のボランティア・キーワード』春風社、2003, p.195。興梧氏はボランティア活動を取り入れた社会貢献型の体験学習を「ボランティア学習」として位置づけ、その潜在的な教育力などを考察し、論じている。

(注4) 田中暢子ほか編『実践で学ぶ！学生の社会貢献—スポーツとボランティアでつながる』成文堂、2018, p.16。

(注5) 有償ボランティアと言う言葉があるが基本は対価を自ら求めないことであり、手弁当が原則である。費用負担は実費(交通費、食事代、材料費等)程度に留めるべきである。対価という果実を認めてしまうと、ともするとボランティア活動が手段に陥ってしまうリスクを生む。また対価により、活動自体に優劣が生じてしまうと、ボランティア活動本来の公平性や平等性が阻害される恐れもある。無償で対価が伴わないことで、よりボランティアの自立・独立性が確保され、活動面の自由や自律性が高まるものとする。

(注6) 進学率は平成30年度学校基本調査による。ただし、大学・短大に加えて、高等専門学校、専門学校も含めた高等教育機関への進学率は81.5%となっている。

(注7) 村上龍『希望の国のエクソダス』文春文庫(文藝春秋社)2002, p.314。

(注8) ドイツ語のなぜ「Wozu」に関連した用語にはWarumの他に、「Wofuer」もある。

(注9) 玄田有史『希望のつくり方』岩波新書、2010, p.41 ほか。玄田有史氏によると、「希望とは、行動によって何かを実現しようとする気持ち」とのこと、すなわち、「気持ち」「何か」「実現」「行動」⇒希望とし、これに「お互い」の視点が加わると、「Social Hope is a Wish for Something to Come True by Action Each Other」と述べている。

社会教育に求められる役割について ～ボランティア活動に関する政策と言説に注目して～

明治学院大学社会学部
教授 坂口 緑

ボランティア活動に関する政策と言説は、揺れ動いてきた。本章では、日本社会におけるこの数十年のボランティア活動と社会教育の関係がどのように連関してきたのかについて、まずは国家による社会福祉政策の変遷を、つぎに政策を批判する立場をとる複数の社会学者の言説を確認したい。その上で、社会教育領域におけるボランティア活動がどのような観点から期待され、それがNPOや企業といった民間セクターにとってどのような意味をもつのかを概観したい。

1. 社会福祉政策の転換

国家による社会福祉政策の転換として特筆すべきなのは、1970年代から1980年代における障害者福祉の文脈において、当事者運動とノーマライゼーションの思想が同期したことである。脳性麻痺者による当事者団体として発足し、差別告発運動を展開した「青い芝の会」が訴えたのは、隔離や管理を主とする当時の福祉政策に対する当事者からの強い反対だった。また、昭和56(1981)年に国連の国際障害者年を契機に日本にも広まったノーマライゼーションの考え方は、障害を持っていても地域社会で普通の暮らしを実現できるとするもので、隔離と管理を主体とする施設中心主義が差別や排除の構造を再生産するのではないかとの考え方に反対するものだった。両者は、コミュニティ福祉の考え方をもたらした。これを機に、障害を持つ人たちが専門職とともに施設で生活するという暮らし方から、適切な介助を受け地域で暮らす方法への転換が支持され、その方法が模索されるようになる。そして地域での展開に合わせて、専門職以外の人たちが障害者の暮らしを支える必要から、障害への理解や介助の方法を学び、社会福祉制度への理解を深めるためのきっかけづくりとして、ボランティア活動に関する入門講座等がさまざまな場所で展開されるようになった。保健所や社会福祉協議会を中心とする地域医療や地域福祉関連の施設だけでなく、公民館や地域センター等の社会教育施設においても広義の社会福祉に関する理解を促進する講座が企画され、地域における新たなコミュニティづくりの一環として進められた。昭和60(1985)年に始まる厚生省(当時)によるボラントピア事業はこの流れの上に展開された施策で、数々の新しい自助団体、地域組織を発足させただけでなく、学生や主婦をボランティア活動の担い手として想定する参加型福祉社会論を実装する政策だった¹。

¹ 仁平典宏『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会、2011, pp. 157-196.

2. 社会教育領域への影響

このような福祉政策の転換は、社会教育実践の領域においても、当初は、地域を中心とする社会教育事業の展開を支える担い手づくりという観点から影響を及ぼした。例えば、昭和46（1971）年社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」においては、国民の「自主的学習の多彩な展開を促進する中心的な力となるもの」として「民間における有志指導者」が想定されている。ボランティアという語そのものではないものの、スポーツや青少年活動などを念頭に、地域スポーツを推進する「民間」の「有志」指導者の活動に期待があったことがわかる。また、昭和61（1986）年社会教育審議会社会教育施設分科会報告「社会教育施設におけるボランティア活動の促進について」においては、ボランティア活動そのものが学習活動である、という視点が示される。社会教育施設で展開されるボランティア活動の体験プログラム等が、学習という観点から整理されたことがわかる。平成3（1991）年の中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」においては、「地域の活性化や家庭教育の充実のため」に、「ボランティアなどの育成・確保がますます必要」という点が強調された。社会教育施設等だけではなく、地域の活性化、家庭教育の充実という視点が示され、社会教育や生涯学習実践の領域で展開されるボランティア活動自体の幅が広がったことがわかる²。

3. 評価という新しい視点

ただし、社会教育や生涯学習実践の領域におけるボランティア活動に関する説明が、社会福祉政策の動向から離れて、有志による活動という意味の範囲を超えて、評価という新しい視点が示されるようになるのは1990年代以降のことである。

平成4（1992）年の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」に盛り込まれたのは、生涯学習とボランティア活動の関係だった。ここでは、ボランティア活動そのものが自己開発、自己実現につながるという視点が示された。またボランティア活動を行うために必要な知識・技能を習得するための学習として生涯学習があり、学習の成果を生かし深める実践としてボランティア活動がある、との視点が示された。これらの視点は、現在においても引き継がれ、生涯学習とボランティア活動の関連性を補強する論点となっている。議論を呼んだのは次のような点だった。すなわち、今後の方策としてこのような方向性を持つボランティア活動の経験を、「適切に学校における教育指導に生かすこと」、「ボランティア活動の経験やその成果を賞賛すること」、「ボランティア活動の経験やその成果を資格要件として評価すること」、「ボランティア活動の経験やその成果を入学試験や官公庁・企業等の採用時における評価の観点の一つとすること」といった点が提示されたことだった³。生涯学習の領域におけるボランティア活動について言及されていたにもかかわらず、生徒や学生等若い人たちによる活動を念頭に、その後の進路に関わるような評価の対象とすることが提言されたことにより、ボランティア活動が目的ではなく手段にもなりうるような捉え方が示されるようになった。このように、平成4（1992）年の生涯学習審議会答申が、社会教育におけるボランティア活動にとって大き

² 讃岐幸治・住岡英毅編『生涯学習社会』ミネルヴァ書房, 2001, pp. 157-159.

³ 生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」平成4（1992）年.

く踏み込んだ内容だったことがわかる。

しかし、現在の時点から振り返ると、この提言は実際には限定的にしか実現されなかった。例えば、平成9（1997）年には「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に関わる教育職員免許法の特例法」が成立している。この特例法は、たしかに、ボランティア活動の義務化をめぐる議論が審議されていた時期に議員立法によってわずか2週間ほどで成立したため、当時はボランティア活動の義務化の事例として報道された⁴。けれども特例法の内容を見ると、ボランティア活動の義務化という文脈は慎重に回避されている。特例法設置の目的は、小中学校の教員免許取得を目指す学生たちが「障害者、高齢者等に対する介護、介助、これらの者との交流等の体験」をすることであり、法の趣旨も「義務教育に従事する教員が個人の尊厳及び社会的連帯の理念に関する認識を深めること」、そして教員志望者の「教員としての資質」を高めるためである⁵。とはいえ、若い世代が多くを占める教員志望者を対象に、教員免許の資格要件に、教育実習とは異なるかたちで「体験」が取り入れられたのは事実であり、そのこと自体は次に見るような社会学者による批判的考察を喚起することにもなった。

4. 社会学者による批判

1980年代にみられた国家による社会福祉政策の参加型福祉社会論への転換、および1990年代以降に導入されたボランティア活動自体が評価の対象になるという新しい視点の導入について、複数の社会学者が批判的に考察している。

まず、当事者運動の意義を問い直す安積純子や立岩真也らは、障害者がボランティア活動として関わる介助者を頼りに地域で暮らしていく際に、支援される側に押しつけられる「障害者役割」を批判している⁶。地域における障害者支援は、ボランティアと被支援者が対等ではない関係におかれる傾向にある。介助なしで生活が成り立たない重度全身性障害者にとって、日々の生活が契約関係にない気まぐれな「ボランティア」に全面的に依存せざるをえない。そのような非対称的な関係において、障害当事者は常に、謙虚で魅力的な「人を惹きつける」障害者であることが期待され、そうではないことのリスクを当事者が背負わないといけない。安積・立岩らはこのような非対称性を「障害者役割」の押しつけとし、批判する。

次に、評価による軸という点については、中野敏男がボランティア活動を声高に称揚するのは誰かという疑問を呈し、国家によるボランティア活動の制度化を批判した⁷。中野はボランティア活動自体が何らかの「大義」となり、それが「個人を犠牲にして体制に尽くす」という態度を押しつけることにならないか」と懸念を示している。というのも、ボランティア活動は何らかの本業がある学生や主婦や会社員等が専従的ではないかたちで従事する活動である点で、個人の発意よりも「現状の社会に適合的のように水路づける方策」に

⁴ 毎日新聞東京本紙 1997年2月26日朝刊。

⁵ 文部科学省「平成9年介護等体験特例法の概要」

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1314079.htm, 2020.1.10 アクセス)。

⁶ 安積純子・立岩真也・岡原正幸・尾中文哉『生の技法』藤原書店, 1995。

⁷ 中野敏男『大塚久雄と丸山眞男』青土社, 2001。

なっていると疑われるからだという⁸。

これら二つの批判をまとめる仁平典宏は、ボランティア活動自体が贈与のパラドックスをはらむからだと解説する⁹。例えば障害者支援において、よかれと思って障害者を手取り足取り助けすることは、当事者の残る力を保ったり試したりする機会を奪うことになる。また、地域の伝統行事において、すでに継続不可能な規模になっていたとしても、その時だけ手助けする人が現れることで、主催者の判断が鈍り、外部に依存する関係が生じてしまう。仁平はこのような善意がもたらす思わぬ陥穽を贈与のパラドックスと呼ぶ。ボランティア活動においては、贈与は反贈与として観察されるが、それは契約に基づく対称的な関係や、金銭や市場を介する交換とは異なる原理をもつのだという。ただし仁平は日本のボランティア活動が「時の政府や社会の要請に応えながら、関係者の不断の努力でパラドックスから脱するための実践や議論を重ねてきた」点を評価する。その上で、贈与のパラドックスに憑依されやすいボランティア活動に関わる言説が、「アンペイドな労働力の需給と＜教育＞の意味論とが接触する限定的な領域において、ささやかに生を送っていく」だろうと予想している¹⁰。

5. 「大学生のボランティア活動等に関する調査」の結果から

以上のように揺れ動いてきたボランティア活動に関する政策と言説は、実際にはどの程度インパクトを持ったのだろうか。少なくとも今回の「大学生のボランティア活動に関する調査」の結果をみると、社会学者の批判の対象となったボランティア活動の経験を公的な評価に導入するという考え方について、当の大学生たちは比較的冷静に受け止めていると言えるのではないだろうか。

実態調査では、「大学は、ボランティア活動の経験を入試の評価に加えるべきだ」という意見に「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」と回答した人が 67.2%となっている一方、「少しそう思う」「とてもそう思う」と回答した人が 32.9%となっており、入試に加えるという観点については否定的な意見をもつ人が多い。ところが、大学入学後の大学での単位となると、意見がやや変化する。すなわち、「大学は、ボランティア活動の経験を単位に加えるべきだ」という意見に「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」と回答した人が 59.7%となっている一方、「少しそう思う」「とてもそう思う」と回答した人が 40.3%となるなど入試に比べると肯定的な意見の割合が若干高くなる。しかし、「企業は、ボランティア活動の経験を採用の評価に加えるべきだ」という意見については、「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」と回答した人が 52.2%となっている一方、「少しそう思う」「とてもそう思う」と回答した人が 47.9%であり、否定的な人も肯定的な人も半々ほどで拮抗している [p. 19 参照]。

また実態調査全体を見てみると、授業の一環としてボランティア活動を採り入れる大学が増加する中、それでも自主的に活動に参加する人の多さやその意欲の高さが目立つ結果となっている。大学入学後に行ったボランティア活動・社会貢献活動について、「自主的に参加したもの」のみと回答した人が 23.1%いる一方で、「授業やゼミの一環で参加したも

⁸ 中野敏男『大塚久雄と丸山眞男』青土社, 2001, p. 280.

⁹ 仁平典宏『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会, 2011.

¹⁰ 仁平典宏『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会, 2011, p. 420.

の」のみと回答した人が 6.8%、両方と回答した人が 18.5%となっており、単位や評価を目的としてボランティア活動に参加する学生が必ずしも多いわけではないことがわかる [p. 4 参照]。また、活動に参加した動機も「大学の成績や就職活動に有利だから」と回答したのは、複数回答を求める設問でも 14.0%と高い数字ではない。それよりも「自分の成長につながると思ったから」(45.4%)、「さまざまな人と関わりたかったから」(28.5%)、「楽しそうだったから」(26.7%)といった回答が目立っている [p. 11 参照]。このように、実態調査からは、学業や採用の評価として取り入れようという国の提言と関わりなく、ボランティア活動自体に意味を見だし、自主的に参加しようとする意欲のある学生の存在を確認できる。

6. 教育の意味論としてのボランティア活動

大学生のボランティア活動にとって、社会教育の役割を考えると、ボランティア活動に関する政策と言説のゆらぎと、それらを冷静に受け止める大学生の態度はともに重要である。なぜなら、ボランティア活動の意義は、仁平も指摘するとおり「<教育>の意味論」に存在し、それゆえに若い世代にとっての意味から立論されるべきだと考えられるからである。

社会学者の批判については、次の二点を指摘したい。第一に、安積・立岩らが指摘する障害者役割の押しつけについては、有償ボランティアが一定の解として定着しているという点である。実際に、ボランティア活動においても被支援者が実費や一部の報酬を負担することで成立する活動が数多く見られるようになっている。有償ボランティアという手法は、安定的にボランティア活動に携わる人を確保しようとする意図のもとに広まった方法であるのと同時に、実際には、ボランティア活動の担い手たちの気まぐれと無責任さを抑止し、「ボランティア」と被支援者との非対称的な関係を是正する機能を持つ。贈与ではなく交換を、というのはこのような観点からも支持できるだろう。

第二に、中野が批判する国家によるボランティア活動の制度化については、若い世代だからこそ「動員」への懸念が大きくなることが推察されるという点である。ボランティア活動を通して社会システムの手触りを体験することになる若い人にとって、それが懸念されるべき活動なのかどうかがわかりにくい。他方で人々がボランティア活動を通して得られる個人的な体験の豊かさは否定できないし、自分の見知った世界から離れた領域で多様な課題に取り組む経験は、他者への理解と社会的連帯の感覚を養うことにつながると思われる。そうだとすると、ボランティア活動への不参加よりも参加のほうが、結果的に国家による「動員」を回避できる判断力をもつ若い人を育成することになるだろう。

そのためには、ボランティア活動が若い人にとって多様な形態に開かれていることが重要になる。ボランティア活動を通して、若い人たちがどれだけ体験の豊かさ、他者への理解、社会的連帯の感覚を受け取ることができるのかは、社会教育関係者による教育の意味論への理解にかかっている。

考察 4

若者に潜むボランティアリズムをどう引き出すか？ ～「一歩踏み出せない若者」に活動の楽しさを～

神奈川大学人間科学部
教授 齊藤 ゆか

はじめに

生きづらさを抱えている若者たちは、エネルギーを余しているように見える。どうしたら若者が一歩踏み出し、地域や社会へ参加・参画していくだろうか。おもいきってボランティアの世界に飛び込んでみると、様々な人に出会い、新しい経験・体験ができるに違いない。一度その面白さを知れば、新しい活動にも挑戦したい気持ちが芽生えてくるだろう。将来、彼らの中に、社会を動かしていく若者も現れるかもしれない。

本稿では、「一歩踏み出せない若者」を地域や社会に誘うために、若者に潜むボランティアリズムをどう引き出すか、について検討したい。本稿では「一歩踏み出せない若者」を「潜在的ボランティア」と呼ぶことにしたい。彼らは、ボランティアに対して「関心や意欲があるが実際には活動を行っていないもの」を指す。筆者（2019）はこれまで「潜在的ボランティア」の研究を行ってきたが、若者に焦点をあてた大規模調査は実施していない。そこで、本稿では、調査結果に基づき、次の点を検討したい。

第一に、若者のボランティア行動の特徴を把握すること。第二に、「一歩踏み出せない若者」の潜在的な動機等を明らかにすること。第三に、若者に潜むボランティアリズムをどう引き出すのか、筆者の見解を示すこと、である。

これらは、「大学生等のボランティアに関する意識などの現状把握」と「青少年の体験活動の充実方策（支援の在り方や推進方策を探る）」に貢献するものである。

1. 若者の「潜在的ボランティア」の特徴

（1）「社会生活基本調査」からみた若者のボランティア行動

総務省「社会生活基本調査」による若年層のボランティア行動者率の特徴を把握したい。2006年最新の同調査によれば、10～14歳は26.5%（うち男性25.2%、女性27.9%）15～19歳は22.6%（うち男性19.6%、女性25.7%）、20～24歳は19.2%（男性17.5%、女性20.9%）さらに25～29歳は15.3%（男性15.9%、女性14.6%）となっている。①10～14歳を除き、どの年代も全国平均（26.0%）を下回る。②男性に比べ、女性の行動者率が高い。最も高率なのは10～14歳女性（小学校高学年から中学生の学年）である。これは、学校教育におけるボランティア学習が活発化している表れである。③20代は年齢が上がるにつれて行動者率も下がる。20代後半は、仕事や生活との両立に加え、ボランティア行動に費やす時間とエネルギーを持ってないであることを示唆している。④最も多い活動の種類として、「子どもを対象とした活動」「まちづくりのための活動」の順である。「子ども」や「まち」は若者にとっても身近な存在であり、活動のきっかけをつかみ易いことが分かる。⑤行動者率の低い種類として「国際協力に関係した活動」「障害者を対象とした活動」

「災害に関係した活動」などが挙げられる。これは専門性を有し、一般からみて距離があることが推測される。

2001年～2016年の経年変化をみると、若年層のボランティア行動者は5人に1人程度で、2001年をピークに殆ど変化がないことが分かる。つまり、若者のボランティアは、必ずしも増加傾向にあるわけではないのである。

（２）学生ボランティア調査からみた特徴

では、実態調査の結果における「自主的に参加」した学生ボランティア（以下「自主」）の活動率は30.7%である。しかし、「授業やゼミの一環で参加」（以下「授業等」）等を含めると37.5%で、4割弱と増える[p.4参照]。「自主」活動は、「小学生を対象」「まちづくり」に多く、「授業等」は「高齢者を対象」の活動が加わる。これらは学生の学部学科及び専門領域に近い活動だと考えられる[p.8参照]。「自主」及び「授業等」の活動日数は全般的に短い傾向にある。学生時代のボランティア活動日数は、「10日以内」が約6～8割（「1～2日程度」自主36.8%、授業等43.6%、「3～10日程度」自主30.2%、授業等34.4%）を占めていた[p.10参照]。

一方、「学生ボランティアフォーラム」の参加者のボランティア活動率は94.2%（自主64.7%、授業3.5%、両方26.0%）と高率であった。「自主」日数も、「30～100日程度」が34.5%、「100日以上」20.4%と長期間に渡って活動する学生が多い[p.42参照]。以上から、初参加の学生にはたとえ日数が短くても、有意義な活動の場・プログラムの提供が不可欠である。初めの活動イメージが、次のステップに影響を与えていることが推察される。

その他、実態調査において、「自主」活動を行う学生は、次の特徴がある。①活動の時間は「土日・祝日」65.0%、「長期休暇中」31.6%など「まとまった休み期間」に活動していること[p.15参照]。②活動形態は多様であること。「大学内の部活動・サークス活動」39.4%に多く、次いで「一人で行った」28.0%であった[p.16参照]。③活動の情報提供は「紹介」が有効であること。「友人や知人、先輩ボランティアから紹介」31.3%、「大学のボランティア等の所属する団体から紹介」25.9%、「大学の授業で紹介」19.2%、「大学の教職員に紹介」14.8%などから、学生にとって「紹介」は安心感に直接結びつくことだと思われる[p.16参照]。

実態調査で最も注目すべきは、ボランティア活動・社会貢献活動を「したことがない」学生のうち、「可能ならしてみたい」学生が60.3%も存在していることである[p.17参照]。つまり、活動してことがない学生のうち約6割は、一歩踏み出せない「潜在的ボランティア」と想定される。

図1のように、「潜在的ボランティア」から「顕在的ボランティア」へ参加・参画レベルが徐々に高めていくためには、どう誘っていけばよいのだろうか。青少年教育職員の手腕が問われるところである。

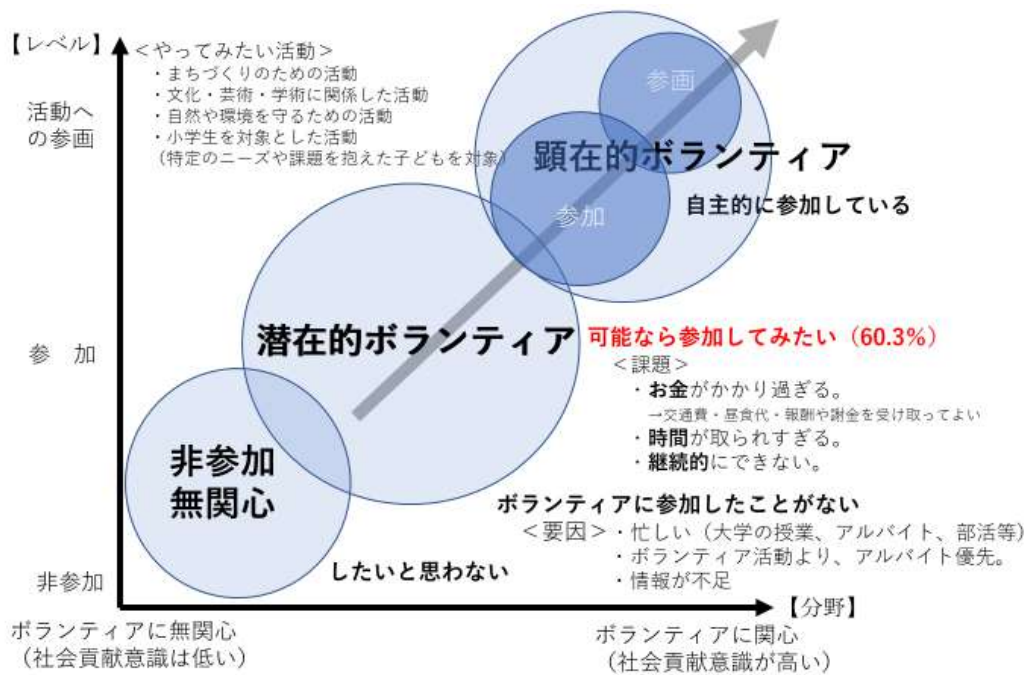


図1 「潜在的ボランティア」の学生をどう参加・参画に向けるか（注：図は齊藤が作成）

2. 「一歩踏み出せない若者」の「潜在的ニーズ」と「活動後の成長戦略」

では、可能なら参加してみたい「潜在的ボランティア」をどう活動に誘えばよいのだろうか。調査結果から、彼らの潜在的動機を解明してみたい。

まず、参加した「動機」と「よかった」の上位5位に注目したい。まず「動機」は、高い順に①「自分の成長につながる」45.4%、②「さまざまな人と関わり」28.5%、③「楽しそう」26.7%、④「関心のある分野や社会問題の現場を見たい」26.2%、⑤「誰かの役に立ちたい」25.8%である [p. 11 参照]。次に「よかった」ことは、①「楽しかった」41.6%、②「ものの見方、考え方が広がった」40.5%、③「相手から感謝された」38.9%、④「達成感や満足感が得られた」32.3%、⑤「コミュニケーション能力が高まった」24.1%の順に多い。なにより活動の「楽しさ」を味わうことが、活動を誘う第一要件だと思われる [p. 12 参照]。

一方、活動に参加して「よくなかった」ことは、①「活動に時間が取られすぎた」17.6%、②「継続的に活動ができなかった」14.7%、③「経費（お金）がかかり過ぎた」11.0%、など、「時間」「お金」「継続」が要因となる [p. 14 参照]。「活動をしたことがない」非参加の理由として、①「授業が忙しい」58.0%、②「アルバイトが忙しい」40.5%、③「情報が不足」38.9%など、「多忙感」と「情報不足」も要因となっていた [p. 18 参照]。その背景として、活動にあたり「交通費や昼食代を受け取ってもよい」78.0%や「報酬や謝金を受け取ってもよい」56.2%から、経済的な理由は小さくない。こうした志向は、「自由時間があれば、ボランティア活動よりもアルバイトを優先する」（86.4%）考えも同様である [p. 19 参照]。

しかしながら、「これからの社会では、ボランティアの果たす役割が大きくなるはずだ」は70.5%、「今後は、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい」は61.8%、と若者のボランティアに対する期待の高さが伺える [p. 19 参照]。このことは、今後、若者の「潜在的ボランティア」の参加・参画レベルが高まる可能性を示唆している。

3. 若者に潜むボランティアズムをどう引き出すか？～体験活動の推進方策にむけて～

図1のように、ボランティアは「非参加・無関心」「潜在的ボランティア」「顕在的ボランティア」の3層に分類できる。しかし、これまでの青少年教育職員は、主に「顕在的ボランティア」を支援の対象とし、特定の選ばれた青少年頼みになっていないだろうか。いわば、働きかけの容易な若者群に、もっと関わることはできないだろうか。ボランティアに心もないし意義も感じない「無関心」層は難しいが、可能ならば参加してみたい「潜在的ボランティア」にもっとアプローチできるはずである。

アプローチ方法の前提として把握しておきたいのは、実態調査の「活動のための支援」内容についてである。「とても重要」と回答した割合の上位5項目を挙げれば、①「参加しやすい活動プログラムを提供すること」53.5%、②「ボランティア活動に関する情報提供」(45.4%)、③「ボランティアが集まれる場所や活動のための資材等を提供すること」(33.4%)、④「ボランティア同士が交流したり、情報提供できる機会を充実させること」(31.6%)、⑤「ボランティアに関する相談体制を充実させること」(47.5%)順に多い[p.20参照]。キーワードとして、「プログラム」「情報(提供・共有)」「場」「交流」「相談」等である。これは、これまでボランティアコーディネートに必要な要素と大差がない。では、本当に若者にとって必要な支援とは何だろうか。

表1 若者のボランティアの「潜在的ニーズ」と「活動後の成長戦略」(注:調査結果に基づき、齊藤が作成)

対	潜在的なニーズ(動機)	活動後の成長戦略(よかった)	若者の体験活動の推進方策案
対自分	自分の成長につながる	視野の広がり: ものの見方、考え方が広まった	自分とは何か、自己理解や自己成長を問うチャンスを創っている
	楽しそう	充足感の獲得: 楽しかった、達成感や満足感が得られた	納得した上で動き始め、充足感・満足感・達成感が得られる
		社会の一員として共存意識の高まり: コミュニケーション能力が高まった	各々歩みに合わせて、一緒に伴走してくれる同伴者がいる
对他者	さまざまな人と関わりたい	気持ちの交流: 相手から感謝された	信頼できる人(友人、先輩、授業、サークル等)からの紹介で安心感をもち、「必要とされる自分」を発見できる
	誰かの役に立ちたい	人間社会としてのつながり: 友人・知人が増えた	不安な気持ちに寄り添い、前向きな生き方や目標とは何か、共に考える 人と人との心の交流ができ、新しい人間関係ができる
対社会	社会問題の現場をみたい	地域・社会への広がり: 社会問題の現場が見られた	身近(学内)などところで情報提供・共有・相談ができ、自分の居場所もみつけられる
			個別的なメッセージが発信され、気持ちにあった選択ができる
			参加しやすい・やりたいプログラムが提供され、望みや願いが叶えられる。その後、客観的な評価も知らせてくれる

そこで、若者に潜むボランティアリズム（ボランティア魂）をどう引き出すか、西野（2015）、齊藤（2017、2018）を参考に、筆者の見解を述べたい。

表1は「対自分」「対他者」「対社会」の3分類から、若者のボランティアに対する「潜在的ニーズ」と「活動後の成長戦略」を示したものである。若者の成長における重要ファクターとは、次の3点である。第1点「対自分」は「視野の広がり」「充足感の獲得」「社会の一員としての共存意識の高まり」、第2点「対他者」は「気持ちの交流」「人間社会としてのつながり」、第3点「対社会」は「地域・社会への広がり」である。

「若者の体験活動の推進方策案」は、表1右に詳述している。まず「対自分」に向けては、若者の成長のチャンスを創るために、彼らの気持ちを受け止め・共感し・寄り添うことである。次に「対他者」に向けては、「かかわり」や「つながり」を共に創ることである。その際、最も重要なのは、若者の不安な気持ちを受け止め、「役に立つ」「必要とされる」実感を持てるよう、伴走していくことである。さらに「対社会」に向けては、地域や社会の現場を見つめている際にも、若者一人ひとりに対する個別的なメッセージや応援など、丁寧な対応が求められる。

ある若者が、初めは授業・ゼミ等の一環で、義務としてボランティア活動を始めた。しかし、通常とは異なる人間関係や地域や社会の中で真剣に活動してみると、沢山の「気づき」や「発見」が生まれる。例えば、単にまちのごみ拾い活動から、複数の課題を抱えたまちに「気づき」、もっと解決したいという「気持ち」が湧いてくるだろう。

このための実践的なプログラムを構築することが求められてはいないだろうか。つまり、これまで若者に対する積極的働きかけの戦略や参加・参画レベルに応じたミニマイズを持っていなかったと言って良い。彼らの「気持ち」や「気づき」に寄り添い、「成長」を応援していくことが、「情報」や「場」の設定以上に、必要な支援策だと思われる。

今後も、「一步踏み出せない若者」（潜在的ボランティア層）にも着目し、彼らに潜むボランティアリズムを引き出すことで「若者の体験活動の推進方策」に貢献したいと考える。

【引用文献】

齊藤ゆか（2017）「アクティヴ・シニアのエンパワメントをめぐる課題ーコミュニティとのかかわりの中でー」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』29, pp. 6-20.

齊藤ゆか（2018）「NPOへの参加を導く～市民をボランティアとして受け入れる条件とは何か～」(特集 NPO、これからの20年)『地方自治職員研修』717, pp. 27-29.

齊藤ゆか（2019）『潜在的ボランティア』が活動に踏み出す条件設定と環境づくり』『生活経営学研究』No. 54, pp. 50-59.

西野博之（2015）『10歳からの見守り BOOK』ジャパンマシニスト社.

スポーツボランティアと大学教育

文教大学人間科学部

准教授 二宮 雅也

1. はじめに（スポーツを支えるボランティアとは）

さまざまなスポーツ実践を支える人たちや活動の総称を「スポーツボランティア」という。2019年ラグビーワールドカップや2020年東京オリンピック・パラリンピックをはじめとして、国際的なスポーツイベントの開催時に多くのスポーツボランティアが大会を支える。また、全国各地で開催される国体、市民マラソン大会等のサポートから、少年団や地域スポーツクラブにおいて直接的にスポーツ実践を支える活動まで幅広くスポーツボランティアは存在している。さらに、障がい者が健常者と同じように日常的にスポーツに参加するには、ボランティアによるサポートが必要な場合もある。このように、スポーツボランティアは私たちのスポーツ活動には欠かせない存在となっている。

大学教育においてもスポーツボランティアを教育コンテンツとして展開している大学も存在する。具体的には、地域で行われるスポーツイベント等に授業の一環としてボランティア参加する場合や、地域の中学校、高校等にスポーツ指導者としてボランティア参加するなどの事例がある。スポーツには、人と人とのコミュニケーションを成り立たせるメディアとしての機能があり、それを支えるスポーツボランティアには、コミュニケーション力、サポート力、現場での課題解決能力等、さまざまな要素が求められる。そして、最大の魅力はスポーツの楽しみを共有できることであり、スポーツ参加の一形態となることである。

笹川スポーツ財団が1万人を対象に実施した「スポーツボランティアに関する調査2019」では、過去1年間にスポーツボランティア活動を「行った」者(スポーツボランティア実施者)は5.5%、「以前に行ったことがあるが、過去1年間には行っていない」者(スポーツボランティア過去経験者)は9.8%、「これまでに行ったことはない」者(スポーツボランティア未経験者)は84.8%であった。確かに、スポーツボランティアはまだ実施割合の多いボランティア活動とは言えない。

スポーツは従来、「する」もの、「観る」ものと捉えられてきた。そこに「支える」という要素を加えて考えようという動きが活発化している。この「する」「観る」「支える」、3つの側面に関心を持つことで、スポーツがより深く楽しめるようになるに違いない。スポーツボランティアは、ボランティアの側面とともに、「支える」スポーツとして、スポーツの新しい関わり方としても注目されていることも重要な視点である。

2. スポーツ活動を支える大学生の価値観

今回の実態調査において、「自主的に参加」か「授業等で参加」かを問わず、「スポーツに関係した活動」に参加したことがある学生は全体で101名であった。学生のボランティア活動において、スポーツに関係したボランティア活動の特徴を把握するために、この101名の回答と、スポーツに関係した活動を除いた全体の回答750名について、「参加した動機」「活動に参加してよかったこと」のそれぞれ2つの項目について比較した。

(1) 活動に参加した動機

「活動に参加した動機」を比較したところ、「所属する団体やサークル等の活動の一環だったから」（スポーツに関係した活動31.1%、スポーツ以外21.0%）、「余った時間を有効活用したかったから」（スポーツに関係した活動15.7%、スポーツ以外8.8%）「楽しそうだったから」（スポーツに関係した活動32.4%、スポーツ以外25.9%）、の3つの項目において差が大きく、いずれも「スポーツに関係した活動」の方が高かった。（図1参照）

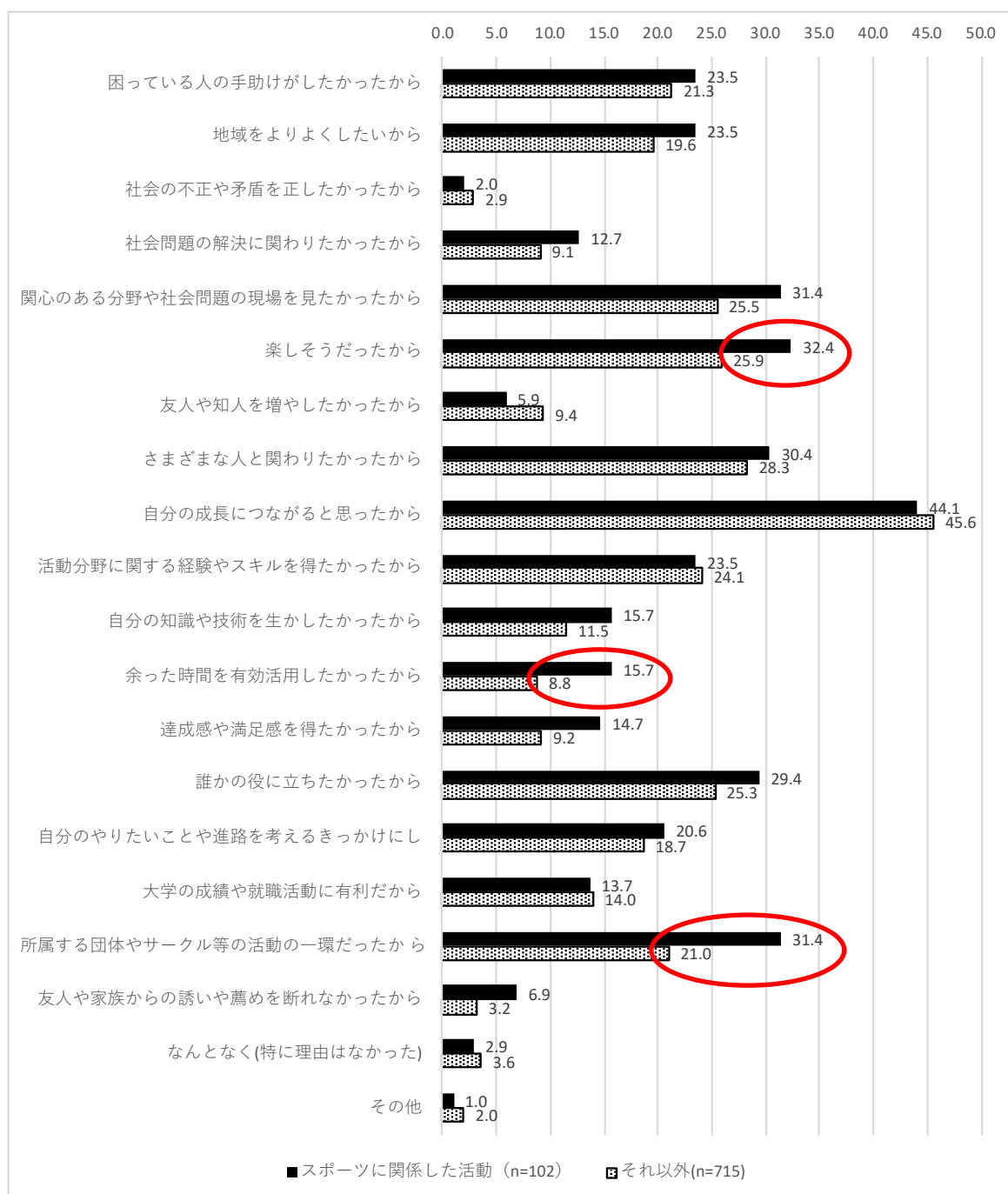


図1 活動に参加した動機（スポーツに関係した活動と全体の比較）[複数回答]

この中でも、「所属する団体やサークル等の活動の一環だったから」について特に全体との差が大きい。

スポーツボランティアは、その活動領域の特徴から、特に大学のスポーツ系部活・サークル等に、スポーツイベント主催団体や自治体からダイレクトにボランティアの依頼がある場合が多い。こうした背景が、団体やサークル活動の一環としてボランティア参加に繋がっており、全体との差が大きくなったと推察される。また、体育会に所属している学生の一部は、近郊の小中高に外部スポーツ指導者として部活動にボランティアとして携わっているものも多数存在している。こうした背景が全体との差をつくりだしていると考えられる。

(2) 活動に参加してよかったこと

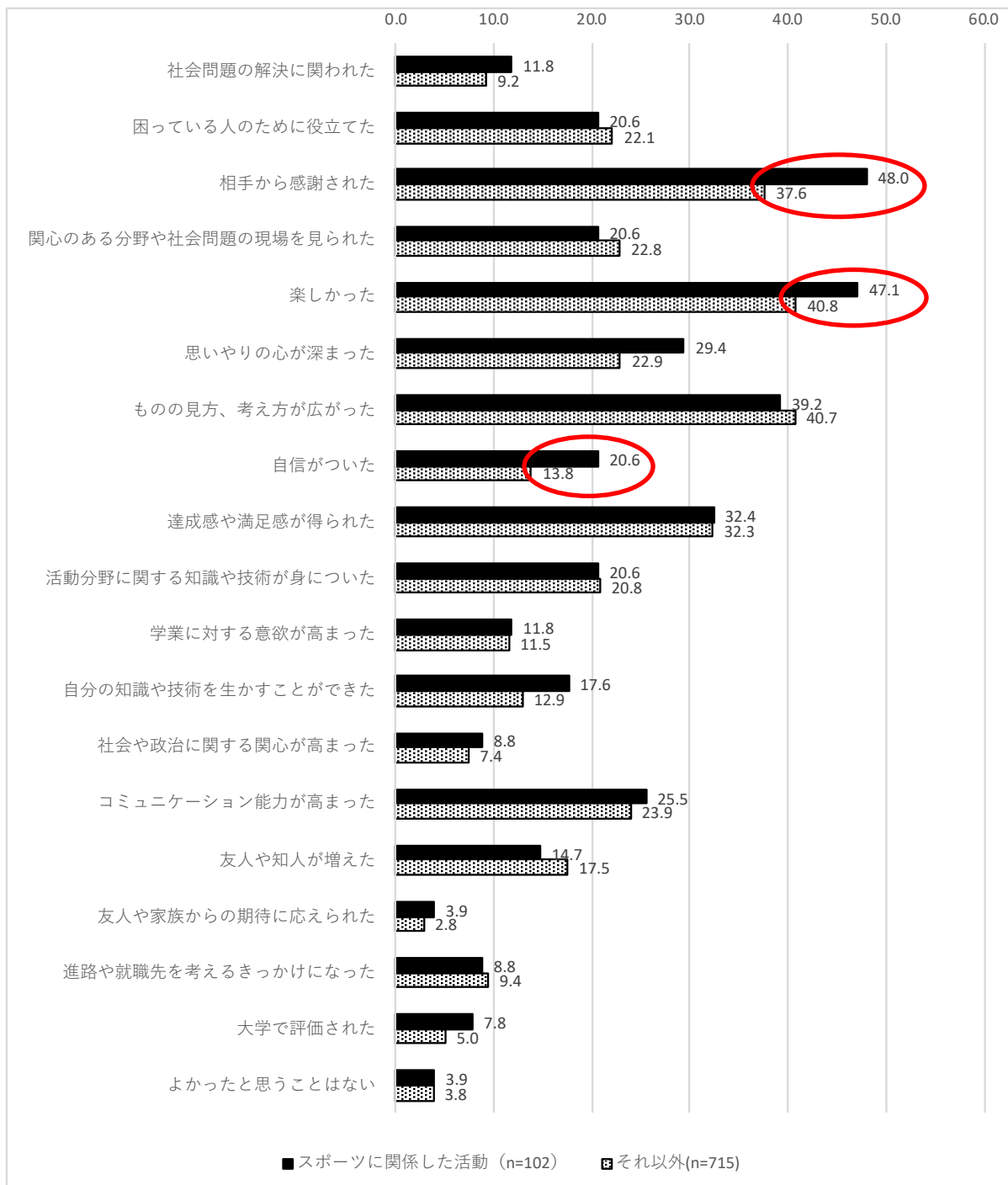


図2 活動に参加してよかったこと（スポーツに関連した活動と全体の比較）[複数回答]

「活動に参加してよかったこと」を比較したところ、「相手から感謝された」（スポーツに関係した活動48.0%、スポーツ以外37.6%）、「楽しかった」（スポーツに関係した活動47.1%、スポーツ以外40.8%）、「自信がついた」（スポーツに関係した活動20.6%、スポーツ以外13.8%）の3つの項目において差が大きく、いずれも「スポーツに関係した活動」の方が高かった。（図2参照）

スポーツボランティアの場面では、相手からお礼を言われる場面が多々ある。例えば、マラソン大会等のスポーツイベントでは、交通案内や観客のサポート、あるいは選手への給水サービスの場面において、観客や選手から直接「ありがとう」の言葉をかけられることが多い。また、スポーツ指導や審判のボランティアでは、練習や試合の前後に直接お礼を言われることが多い。こうした活動の特徴が「相手から感謝された」という項目への回答を増加させた背景であると推察される。

さらに、活動そのものがスポーツを支える活動であることから、スポーツに興味関心がある人の参加が多く、活動そのものを楽しむ傾向にある。こうした背景が、「楽しかった」という回答において、全体との差を生み出していると推察される。

3. ボランティア人材としての大学生-オリンピック・パラリンピックとボランティア-

今回の調査では、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動への興味について、「とても興味がある」と「少し興味がある」を合わせると、興味がある割合は4割強の回答となった [p.22参照]。笹川スポーツ財団が実施した同様の全国調査では、2020年東京大会でのボランティア活動の希望については、オリンピックが23.1%、パラリンピックが17.7%、合わせて40.1%となっている。この数字をみると、参加希望については今回の大学生を対象とした調査結果と同様の傾向といえる。¹⁾

また、応募状況についてみると、オリンピック・パラリンピックの「大会ボランティアに応募した」のは1.3%、「都市ボランティアに応募した」は1.0%、「大会ボランティアと都市ボランティア両方に応募した」は0.7%で、全体の3.0%が東京オリンピック・パラリンピックのボランティアに応募していた。今回の大学生を対象とした全国調査では、東京オリンピック・パラリンピックのボランティアに実際に応募した割合は2.3%であった。²⁾ この結果も、全国調査とほぼ同様の傾向といえる。

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は、全国約800の大学・短期大学と連携協定し、さまざまな活動に取り組んでいる。その中でも、学生のボランティア参加に対する期待は強く、国も「学生のオリンピック・パラリンピック競技大会及び同大会に係るボランティア活動等への参加に当たっての教育上の配慮について（通知）」といった公式文書も出すほどである。

既に、いくつかの大学では、独自にスポーツボランティアを学び実践する科目を立ち上げているところもある。また、他の大学においても、スポーツボランティアを育成するための講義やセミナーを相次いで設ける取り組みもある。

確かに、全国の大学生がボランティアとして国際的なイベントへ積極的に関わるための必要な知識などを、大学の授業等を通じて学習することは、「ダイバーシティ&インクルージョン」の観点からも重要である。特に、外国人や高齢者、障がいのある方もボランティアに参加することを前提とするならば、ボランティア同士の多様性理解と、サービス提供者への多様性理解の促進等が期待される。

しかし、こうした教育内容は、オリンピック・パラリンピックのためだけに存在するものではない。よって、オリンピック・パラリンピックへのボランティア派遣のみが目的となってしまうと、こうした多様な観点からのボランティア教育は限定的なものになってしまう。それゆえ東京オリンピック・パラリンピックが終了すると同時に、ボランティアの養成やそれに関連する授業などが終了することは、ある種の本末転倒である。むしろ大会後のレガシーとして、多様な観点からのボランティア教育

が継続されるよう、期待される場所である。

註

- 1) 笹川スポーツ財団、スポーツボランティアに関する調査(2018速報版)ラグビーワールドカップ2019、2020年東京オリンピック・パラリンピックのレガシー創造に向けて
(<http://www.ssf.or.jp/report/category6/tabid/1631/Default.aspx>)
- 2) 笹川スポーツ財団、スポーツボランティアに関する調査2019
(<http://www.ssf.or.jp/report/category6/tabid/1840/Default.aspx>)

「ちょっと不安」と「もっと不安」 ——大学生のボランティア活動の意味をめぐって——

近畿大学総合社会学部

准教授 西尾 雄志

1. はじめに——承認と生存、そしてパフォーマンスを最大化させる契機に関して

「自分の感情に“フタ”をせず、ありのままの自分でいられる場所ってあるんだろうか」
「年金はもうもらえないとか、老後の資金 2000 万円って聞くけど、私たちの将来って一体、どうなるんだろう」

「ブラック企業とか言われるけど、卒業後、私は社会でやっていけるんだろうか、社会で生きる能力ってなんだろう。そもそも能力なんて自分にあるんだろうか」

現代の若者の心象風景とは、こういったものではないだろうか。

「楽しいのかと聞かれば、まあ楽しいと答える、けど本当に楽しいとか、居心地がいいとか、そういうのってなんだろう……」

立ち止まって就活のこととか、働くこととか考えると「ちょっと不安」になる。ずっと先の将来のことまで考えると「もっと不安」になる。その不安のなかで彼らがボランティアをすることは、どのような意味をもち得るのか。そのことを、「ありのままの自分」（“承認”）、「ずっと先の将来」（“生存”）、そして「生きるための能力」（“パフォーマンスを最大化させる契機”）の3つの観点から考えてみたい。

2. 「承認の空間」としてのボランティア

「自分の感情に“フタ”をせず、ありのままの自分でいられる場所」、そういう場所は「居場所」と言ってもいい。そしてそういった快適な居場所は、「承認の空間」のようなものだろう。

若者にとって「居場所と承認」は切実な問題であるが、承認とはそもそもなんであろうか。哲学、心理学に造詣の深い批評家の山竹伸二は、承認の問題を論じる中で、承認を次の3つに整理している¹。ひとつめは家族や恋人、親友など愛と信頼の関係（親和的他者）から与えられる親和的承認、ふたつめは、学校や職場など集団的役割にある他者（集団的他者）から与えられる集団的承認、3つめは、他者一般の表象である一般的他者から得られる一般的承認、の3つである²。

ここから考えると、たいていの人間にとっての承認の最初の機会は、親や家族からの承認であろう。大学生の年代において、家族、とくに親の承認基準と、みずからの承認の基準——両者の価値観——がずれ始めると、人間にとってそれは多大なストレスとなる。そ

¹ 山竹伸二『「認められたい」の正体——承認不安の時代』講談社現代新書、2011年、60頁、他参照。

² さらに成長期に合わせ、親和的承認（幼児期）、集団的承認（学童期・青年期）、一般的承認（壮年期）と整理されている。同書、114-115頁。

れでも子が親の承認基準——価値基準に逆行しないようにしようとすればするほど、自分の感情に“フタ”をしなくてはならなくなる。それに耐えるのは苦しいので、親和的承認から集団的承認——親から身近な仲間へと、承認の価値軸をシフトさせる。これを「親離れ」の一つのあり方とみなすこともできるだろう。

ちなみに承認の観点から組織論を研究する太田肇は、SNS利用者に対するアンケートにおいて、「他人から認めてもらわなければいけないと思いつながら書くことはありますか？」という質問をしたところ、56.4%の人が「しばしばある」「たまにある」と回答していると指摘する。そして「だれに認めてもらわなければいけないと思いつますか」との質問に対しては、「友達や知人など」が74.7%、「不特定多数の人」が34.3%となっており、「友達や知人など」が承認の重要な調達先とされていると述べる³。

今回の実態調査では、ボランティアに参加した動機として、「社会の不正や矛盾を正しかかったから」という回答が極端に低い⁴のに対して、「さまざまな人と関わりたかったから」と回答する学生は少なくなかった [p. 11 参照]。そもそもボランティア活動は、さまざまな人との関わりを通して、承認を得ることができる貴重な機会である。また、ボランティア活動が興味深いのは、その活動を通して、「さまざまな人と関わる」ことで、「一般的な他者」が「知人」にかわる契機になる点である。「友達や知人など」と「不特定多数の人」のあいだの線引きを変更させるきっかけになり得る点が、ボランティア活動のもつ特異性であろう。

ボランティア活動は、ボランティアする仲間との間の承認関係を築き得る⁵だけでなく、ボランティアする側とされる側のあいだでの承認関係も築き得る。そして一般的な他者と出会い、自分の人間関係、交友関係を広げていく手段にもなり得る。承認の調達先がひとつしかない、もしくは承認の調達先の性格が画一的で、多様性を欠く場合、承認基準も画一的にならざるを得ない。そういった状況では、自分の本当の想いに“フタ”をしなくてはならなくなる。しかし承認の調達先が多様なものになれば、承認基準も多様となり、窮屈な承認競争からの回避手段にもなりえる。

またボランティア活動をしてよかった理由の上位に「相手から感謝された」ことが挙げられている点も興味深い [p. 12 参照]。我々は日常生活の中で多くの感謝の言葉を与えられている。コンビニで買い物をすれば、「ありがとうございます。またお越しください」と

³ 太田肇『「承認欲求」の呪縛』新潮新書、2019年、61頁。なお山竹は、価値観が多様化した現代社会においては、一般的承認の基準があいまいになっており、一般的承認を受けるのが難しくなっていることを指摘する。それゆえ、承認の調達先が一般的承認ではなく、集団的承認になっている点を指摘し、ここに若者の承認不安の理由を見ている。

⁴ 一般的承認の基準があいまいになっているということは、どのような社会が不正のない社会なのか、というあるべき社会ビジョン(全体像)があいまいになっていることと表裏一体であることをここから読み取ることもできるだろう。また「社会の不正や矛盾を正しかかったから」(以下、「不正や矛盾」と表記)という理由と一見似たようにも思える「社会問題の解決に関わりたかったから」という回答は、全体で見れば高い部類には入らないが、「不正や矛盾」よりも高い(約3.4倍)。ここから、全体的な理想的な社会ビジョンは不明瞭だが、個別の社会問題の解決のあり方はそれより幾分明瞭に見える、という解釈も成り立つ。

⁵ 活動を積極的・継続的に行なっている学生ほどこの特徴がみられるとの指摘もある [p. 61 参照]。

必ず感謝される。しかし、この言葉を聞いて心から「よかった」と感じる人は多くはあるまい。コンビニでの買い物とボランティア活動の違いが生み出すこの差異とは何であるのかを、立ち止まって考えてみることは、現代社会を生きる上で重要な視点を与えてくれるだろう。また、「相手から感謝される」経験は、後述する「自己のパフォーマンスの最大化」の観点からも、非常に重要なものと思われる。

3. 「生存戦略」としてのボランティア——贈与のネットワークの構築と拡大

ある男性がジュエリーショップの店員だったとする。そこにステキな女性がやってきて、ステキなジュエリーを買ったとする。それをもってその男性が、そのステキな女性とステキな仲になることを期待したとするなら、これは間違いなく、トチ狂っているとみなされる。しかし、その男性が日ごろから心寄せる女性に対して、その女性が喜んでくれるような場所を一生懸命考え、その女性の好きな料理をおいしく楽しめるレストランを一生懸命探してデートの計画を立て、夜景などを見ながら勇気を出して、プレゼントとしてステキなジュエリーをあげた場合、その男性がそのステキな女性とステキな関係になる「可能性」はまったくゼロではないし、それをその男性がそう期待したとしても、決して変なことではない。

経済学的、文化人類学的に言うなら、前者は等価交換であり、後者は贈与である。この例からもわかる通り、等価交換では人間関係は生まれにくい。逆に贈与には人間関係を構築する機能がある。男性と女性の間でジュエリーが移動していること自体はふたつのケースのあいだで全く変わらないことだが、そこからたらされる結末は全く異なる。なぜか。贈与された者はその贈与を忘れてしまうことはできない。贈与されたことを記憶し、必ずその後「返礼」しなくてはならない。これを互酬と呼ぶ。等価交換においてはモノの移動に時間が介在しないが、贈与においてはモノの移動に時間が介在する。もらった瞬間に返礼されたら、それは贈与ではない。物々交換である。贈与と返礼のスキマに生じる時間に人間関係が構築される契機が生まれる。

「老後の資金が 2000 万円」。一時間働いていくらの経済経験しかない人間にとってそれは、天文学的な数値である。「ずっと先の将来って、想像しづらいけど、間違いなく暗そう」。そんななか緊急避難的に身を守るために、まずできることは、等価交換ではなく、「贈与」の領域を拡大させることであろう。「困ったときに助け合う贈与のネットワーク」に入っていれば、とりあえずの助けは得られる。中間層が没落し、いつ貧困層に転落してもおかしくない社会であっても、こういう人間関係のネットワークがあれば、とりあえず何とかかなる。

「一般的な他者」が困窮していても、それは「自己責任」で片付けることができるのかもしれないが、「友人や知人」が困窮していたら、とりあえずできる範囲で人は助ける。そして自分が困窮したら、おそらく「友人や知人」は無理のない範囲で助けてくれるだろう。この関係を充実させ、そのネットワークを拡大していくこと、これが「助け合い」という牧歌的なイメージのものから「生存戦略」へと変わっていく時代を迎える、もしくはすでに迎えているのかもしれない。そのようななか、「一般的な他者」を「友人や知人」に変える「最初の贈与」として、ボランティアを位置づけることも可能だろう。

4. 人のパフォーマンスが最大化される時

何でボランティアをするのか。「承認」を得るためである。何のためにボランティアをするのか。格差が広がる世知辛い時代の中で生き残るための「生存戦略」である。ここまで若干、自己利益に偏った視点から社会やボランティアを見てきてしまったかもしれない。社会も、そしてボランティアも結局、拝金主義的な自己利益の追求と本質的な差異はないのか。

これをうけて最後に、「人がおのれのパフォーマンスを最大化させる」という観点からボランティアを考えてみたい。それにあたり、翻訳家であり文筆家でもある平川克美の印象的なエッセイを参照しよう⁶。ここから自己利益の追求と他者への献身とは、見た目よりもずっと分けづらく、一体化していることがわかるような気がする。

平川は母親をガンで亡くした後、ひとり暮らしとなる父と紅白歌合戦を見ながら「これからどうする」とたずねた。父親は「まあ、なんとかやっていくよ」と心細そうな声で返したという。その後、年明けに平川が実家を訪ねるとひどい異臭がした。父親が間違っただけでプラスチック製の洗い桶をガス台にかけ、洗い桶がどろどろに溶けていた。それが異臭の原因だった。それをみて平川は、在宅介護でできるところまでやろうと決意する。会社帰りに駅前のスーパーに立ち寄り、食材を抱えて帰り、料理に勤しんだ。料理の研究も進め、サラダのソースまで工夫を凝らした。父親は「お前は料理がうまい」と言い、いつも「おいしい、おいしい」と完食したという。しかし暫くして父親は体調を崩し、他界する。ここから先は、平川がこれ以上ないほどの明瞭さで、介護体験から学んだことを表現しているため、少々長くなるが引用する。

わたしが学んだことの二つ目は、自分がまったく予期しなかった、私自身の変化である。父親の生前あれほど情熱を込めて作り続けていた料理を、死後はまったく作らなくなってしまうのである。あれ以後、私の夕食は外食となった。ひとは、誰もが、自分のために生きているのであり、他者のために生きるなどというのは、所詮はきれいごとだと言われることがあるが、ひとは自分で考えるほど、自分自身のために生きているわけではない。誰も、自分のためにおいしい料理を、毎日作ろうなんていう気持ちにはなれないのだ。ただ、待っていてくれるひとがあればこそ、ひとは一生懸命に料理を作る気持ちになる。こちらの方が自然なのである。自分を必要として、待っていてくれる人間のために働くとき、その人間のパフォーマンスは最大化する。

文化人類学は、贈与とお返し(返礼)のサイクル(互酬)を中心に論じる。そのなかで贈与の思想史を研究する岩野卓司は、この平川の介護体験に対して、平川自身が「世話になった父親への返礼として解釈されるのではなく、自分を必要として待ってくれる人への一方的な献身」として捉えている点に注目している。そしてそれが、文化人類学的な互酬のサイクルの始動点とみなし得る点に着目している⁷。

もっともこの平川のケースは、自分の父親に対する介護であるからボランティアとは異

⁶ 平川克美「介護の経験と贈与論」『現代思想 特集 老後崩壊——下流老人・老老介護・孤独死…』2016年。平川克美『21世紀の楳圓幻想論』ミシマ社、2018年。

⁷ 岩田卓司『贈与論——資本主義を突き抜けるための哲学』青土社、2019年、266頁。

なるが、ボランティア活動にも豊かな示唆を与えてくれるエピソードであろう。本調査においても、ボランティア活動に参加した動機として、「誰かの役に立ちたかったから」と回答する学生は少なくない [p.11 参照]。人がなぜこの感情を抱くのか、改めて考えることはとても大切なことであろうと思われる。

先に述べた通りボランティアには、「一般的な他者」を「友人、知人」に変えていく機能がある。その理由を文化人類学者に聞けば、ボランティアのもつ贈与性がそうさせると答えるだろう。それは承認機会の増大をもたらし、かつ承認基準の多様化をももたらす。そして贈与して何になるのか、介護の体験をした人に聞けば、それは自分のためではなく、「自分を必要として、待っていてくれる人間のために働くとき、その人間のパフォーマンスは最大化する」と答えるだろう。しかしそれも自己のパフォーマンスを高める、つまりは自己利益にすぎないものか、それとも他者への献身なのか、そのような区別は無意味であろう。そのような区別が無意味な経験をすることで、ひとは初めてカネで買えないものの存在を知ることとなり、そしてカネで買えるものとカネで買えないもの、その両方の「価値」を知ることになるのである⁸。

自分の感情に“フタ”をすどこか息苦しい日常、ただでさえよく見えない将来がどうしても明るく描けない不安、そんな状況のなかで、日常を離れボランティアの現場に降り立ち「ちょっといいこと」を試してみる。そうすることで「承認の空間」が広がり、息苦しさから解放され、贈与のネットワークが拡大し、自分のパフォーマンスが最大化される。そしてそれが、自分にとっても、社会にとっても、未来にとっても「もっといいこと」につながってゆく。これがボランティアの理想だろう。学生にとっても、社会にとっても、未来にとっても。

⁸ 等価交換ですべてのものを交換可能なものとみなし、利益追求のみを社会原理とする社会を徹底すると、すべてのモノが売り買いの対象となる。そうするとすべてのモノに値段がつけられることとなる。そのような世の中では、オスカー・ワイルドの言葉を借りれば、「あらゆるものの値段は知っているが、その価値に関しては全く無知な人」がはびこることとなる。こういった社会、人間に風穴を開ける可能性を筆者はボランティアのなかにみている。オスカー・ワイルド(西村孝次訳)『サロメ・ウィンダミア卿夫人の扇』新潮文庫、1953年。なお、自己実現や承認の観点からボランティアを検討したものとして、拙著『ハンセン病の「脱」神話化——自己実現型ボランティアの可能性と陥穽』皓星社、2014年、西尾雄志／日下渉／山口健一『承認欲望の社会変革——ワークキャンプにみる若者の連帯技法』京都大学出版会、2015年、を参照頂ければ幸いである。

資料

大学生のボランティア活動等に関するアンケート調査

(独) 国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター

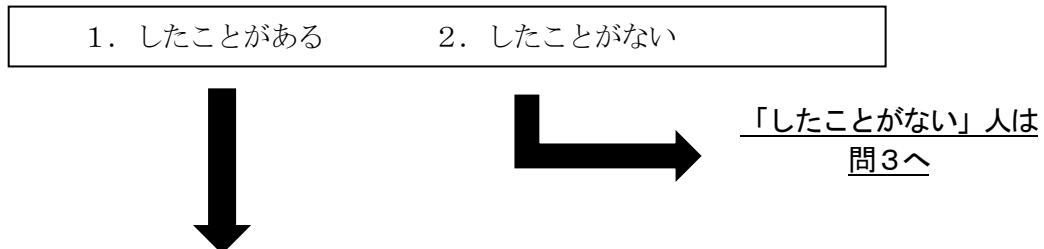
- ・この調査は、全国の大学・短大の学生の皆様を対象として、ボランティア活動等に関する意識や実態を調べることを目的としたものです。
- ・調査は統計的に処理され、個人が特定されることはありません。
- ・設問は、数字を記入するか、当てはまる番号を選ぶ形式になっております。正しい答えはありませんので、あなたの思った通りに教えてください。

問1 大学（短大を含む、以下同様）入学後に行ったボランティア活動・社会貢献活動についてお聞きします。

ここでの「ボランティア活動・社会貢献活動」には、

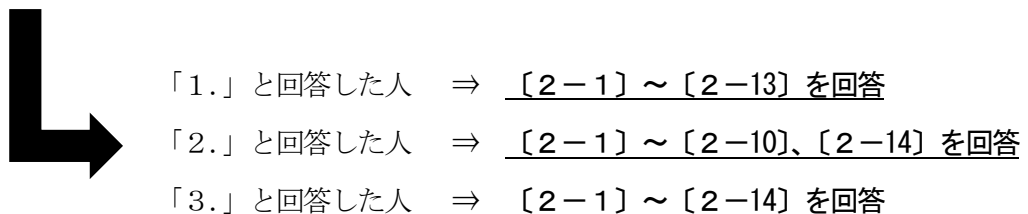
- ① 「自主的に参加したもの」（サークル等での活動も含む）だけでなく、
- ② 「大学の授業やゼミの一環で参加したもの」（単位にかかわるもの）も含むものとします。（ただし、「アルバイト」「インターンシップ」「資格のための実習」は含みません。）

〔1-1〕 大学入学後に、なんらかのボランティア活動・社会貢献活動に参加したことがありますか（○は1つだけ）。



〔1-2〕 大学入学後に行ったボランティア活動・社会貢献活動はどのようなものでしたか（○は1つだけ）。

1. 「自主的に参加したもの」のみ
2. 「授業やゼミの一環で参加したもの」（単位にかかわるもの）のみ
3. 「自主的に参加したもの」と「授業やゼミ等の一環で参加したもの」の両方



問2は、〔1-1〕で大学入学後にボランティア活動・社会貢献活動を「1. したことがある」と答えた人のみ回答してください。

問2 大学入学後にしたボランティア活動・社会貢献活動についてお聞きします。

※どちらか一方に参加した人は該当する方のみ回答してください。

〔2-1〕 取り組んだ活動はどのような分野の活動でしたか (✓はいくつでも)。

		自主的に参加したもの	授業やゼミ等の一環で参加したもの
子どもを対象とした活動	(1) 就学前の子どもを対象とした活動	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	(2) 小学生を対象とした活動	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	(3) 中学生・高校生を対象とした活動	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	(4) 特定の課題やニーズを抱えた子どもを対象とした活動	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(5) 健康や医療サービスに関係した活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(6) 高齢者を対象とした活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(7) 障害者を対象とした活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(8) スポーツに関係した活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(9) 文化・芸術・学術に関係した活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(10) まちづくりのための活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(11) 安全な生活のための活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(12) 自然や環境を守るための活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(13) 災害に関係した活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(14) 国際協力に関係した活動		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(15) その他 (具体的に:)		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

〔2-2〕 最も重点的に取り組んだのはどのような分野でしたか。〔2-1〕で✓をつけた選択肢のなかから1つ選んで番号を記入してください。

自主的に参加したもの	授業やゼミ等の一環で参加したもの

※どちらか一方に参加した人は該当する方のみ回答してください。

〔2-3〕 入学後に取り組んだ全ての活動について、活動した全日数 (準備等も含む) は概ね何日程度でしたか (○はそれぞれ1つつ)。

自主的に参加したもの	授業やゼミ等の一環で参加したもの
1. 1～2日程度	1. 1～2日程度
2. 3～10日程度	2. 3～10日程度
3. 10～30日程度	3. 10～30日程度
4. 30～100日程度	4. 30～100日程度
5. 100日以上	5. 100日以上

※どちらか一方に参加した人は該当する方のみ回答してください。

〔2-4〕活動を最も多く行ったのは、何年生のときですか？それぞれ数字を記入してください。

自主的に 参加したもの	授業やゼミ等の 一環で参加したもの
年生のとき	年生のとき

※どちらか一方に参加した人は
該当する方のみ回答してください。

※「自主的に参加したもの」、「授業やゼミ等
の一環で参加したもの」を問わず、あてはま
るものを回答してください。

〔2-5〕活動に参加した動機はどんなことでしたか（○はいくつでも）。

1. 困っている人の手助けがしたかったから
2. 地域をよりよくしたいから
3. 社会の不正や矛盾を正したかったから
4. 社会問題の解決に関わりたかったから
5. 関心のある分野や社会問題の現場を見たかったから
6. 楽しそうだったから
7. 友人や知人を増やしたかったから
8. さまざまな人と関わりたかったから
9. 自分の成長につながると思ったから
10. 活動分野に関する経験やスキルを得たかったから
11. 自分の知識や技術を生かしたかったから
12. 余った時間を有効活用したかったから
13. 達成感や満足感を得たかったから
14. 誰かの役に立ちたかったから
15. 自分のやりたいことや進路を考えるきっかけにしたかったから
16. 大学の成績や就職活動に有利だから
17. 所属する団体やサークル等の活動の一環だったから
18. 友人や家族からの誘いや薦めを断れなかったから
19. なんとなく（特に理由はなかった）
20. その他（具体的に： _____）

〔2-6〕活動を始めた最も中心的な動機はどんなことでしたか。〔2-5〕で○をつけた選択肢のなかからそれぞれ1つ選んで番号を記入してください。

自主的に 参加したもの	授業やゼミ等の 一環で参加したもの

※どちらか一方に参加した人は
該当する方のみ回答してください。

※「自主的に参加したもの」、「授業やゼミ等の一環で参加したもの」を問わず、あてはまるものを回答してください。

〔2-7〕活動してよかったと思うことは何ですか（〇はいくつでも）。

1. 社会問題の解決に関わられた
2. 困っている人のために役に立てた
3. 相手から感謝された
4. 関心のある分野や社会問題の現場を見られた
5. 楽しかった
6. 思いやりの心が深まった
7. ものの見方、考え方が広がった
8. 自信がついた
9. 達成感や満足感が得られた
10. 活動分野に関する知識や技能が身についた
11. 学業に対する意欲が高まった
12. 自分の知識や技術を生かすことができた
13. 社会や政治に関する関心が高まった
14. コミュニケーション能力が高まった
15. 友人や知人が増えた
16. 友人や家族からの期待に応えられた
17. 進路や就職先を考えるきっかけになった
18. 大学で評価された
19. よかったと思うことはない
20. その他（具体的に： _____)

〔2-8〕活動して最もよかったと思うことはどんなことでしたか。〔2-7〕で〇をつけた選択肢のなかからそれぞれ1つ選んで番号を記入してください。

自主的に参加したもの	授業やゼミ等の一環で参加したもの

※どちらか一方に参加した人は該当する方のみ回答してください。

〔2-9〕活動してあまりよくなかったと思うことは何ですか（〇はいくつでも）。

※「自主的に参加したもの」、「授業やゼミ等の一環で参加したもの」を問わず、あてはまるものを回答してください。

1. 社会問題の解決に関われなかった
2. 活動が面白くなかった
3. 経費（お金）がかかり過ぎた
4. 活動に時間が取られすぎた
5. 活動中の人間関係がうまくいかなかった
6. 学業と両立できなかった
7. 親の理解が得られなかった
8. 与えられた役割・責任が大きすぎた
9. 与えられた役割・責任が小さすぎた
10. 自分が考えていた活動ではなかった
11. 継続的に活動ができなかった
12. 自分の成長につながらなかった
13. 将来の進路について迷いはじめた
14. よくなかったと思うことはない
15. その他（具体的に： _____)

〔2-10〕活動して最もよくなかったと思うことはどんなことでしたか。〔2-9〕で〇をつけた選択肢のなかからそれぞれ1つ選んで番号を記入してください。

自主的に参加したもの	授業やゼミ等の一環で参加したもの

※どちらか一方に参加した人は該当する方のみ回答してください。

〔2-11〕～〔2-13〕は、〔1-2〕の設問において、自主的に参加したと答えた人が回答してください。
つまり、 1. 「自主的に参加したもの」のみ
3. 「自主的に参加したもの」と「授業やゼミの一環で参加したもの」の両方
のどちらかを選んだ人が回答対象者です。

〔2-11〕 自主的に参加した活動をしている（していた）のは主にいつですか（○はいくつでも）。

1. 平日の授業が終わった後
2. 授業がない平日
3. 土日・祝日
4. 長期休暇中
5. 大学を一定期間休んで
6. その他（具体的に： _____）

〔2-12〕 これまで自主的に参加した活動の中に、以下のようなものがありましたか（○はいくつでも）。

1. 大学内の部活動・サークル活動として行ったもの
2. 大学外の団体の活動として行ったもの
3. 友人・仲間同士のグループ活動として行ったもの
4. 一人で行ったもの
5. 自分で活動を立ち上げたもの
6. 活動の中心人物（世話役や幹事など）として関わったもの
7. ボランティア活動をする人の支援を行ったもの（コーディネーターなど）
8. 大学での専攻と関連があるもの
9. 海外で行ったもの
10. (交通費以外に) 若干の報酬・謝金がもたらされたもの
11. 1～10のような活動はなかった

〔2-13〕 自主的に参加した活動に関する情報はどこで得ましたか（○はいくつでも）。

1. 家族や親戚から紹介されて
2. 友人や知人、先輩ボランティアから紹介されて
3. 大学の授業で紹介されて
4. 大学の教職員に（授業以外で）紹介されて
5. 大学のサークル等の所属する団体から紹介されて
6. 大学のボランティアセンター等を通じて
7. 地域の社会福祉協議会等を通じて
8. 自治会等からの呼びかけ等によって
9. ボランティアに関する研修会、講習会、行事等に参加して
10. ポスター、チラシ等を見て
11. 新聞、テレビ等のマスコミを通じて
12. インターネットやSNSを通じて
13. その他（具体的に： _____）

〔2-14〕は、〔1-2〕において、授業やゼミ等の一環で参加したと答えた人が回答してください。
つまり、2. 「授業やゼミの一環で参加したもの」のみ
3. 「自主的に参加したもの」と「授業やゼミの一環で参加したもの」の両方
のどちらかを選んだ人が回答対象者です。

〔2-14〕どのような授業やゼミの一環で活動を行いましたか（○はいくつでも）。

1. ボランティアや社会貢献をテーマとした、講義中心の授業の一環として
2. ボランティアや社会貢献をテーマとした、実習中心の授業の一環として
3. ボランティアや社会貢献以外をテーマとした、講義中心の授業の一環として
4. ボランティアや社会貢献以外をテーマとした、実習中心の授業の一環として
5. ゼミ・研究室の活動等の一環として
6. その他（具体的に： _____）

問3は、問1で大学入学後にボランティア活動・社会貢献活動を「2. したことがない」と答えた人のみ、回答してください。

問3 大学入学後にボランティア活動・社会貢献活動をしたことがない人にお聞きします。

〔3-1〕今後、可能なら活動してみたいと思いますか（○は1つだけ）。

1. 可能ならしてみたい

2. したくない



「可能ならしてみたい」
人は〔3-2〕へ



「したくない」人は
問4へ

〔3-2〕これまでボランティア活動をしなかった理由は何ですか（○はいくつでも）。

1. 大学の授業が忙しい
2. 大学の部活動・サークル活動が忙しい
3. アルバイトが忙しい
4. 親の理解が得られない
5. 人間関係がうまくつくれるか不安だ
6. 情報が不足している
7. 活動に必要な知識や技術がない
8. 活動経費がない
9. やりたいと思う活動がない
10. 身近に相談できる人やリーダーがいない
11. 事故にあうなどの安全の問題が心配である
12. その他（具体的に： _____）

問4以降は、すべての人が回答してください。

問4 大学入学前に参加したボランティア活動・社会貢献活動についてお聞きます。

〔4-1〕大学入学前に、なんらかのボランティア活動・社会貢献活動に参加したことがありますか（〇は1つだけ）。

1. したことがある 2. したことがない

↓
「したことがある」
人は〔4-2〕へ

〔4-2〕大学入学前に行ったボランティア活動・社会貢献活動はどのようなものでしたか（〇はいくつでも）。

1. 学校の授業や行事等の一環で参加したもの
2. 地域活動（自治会やお祭りなど）の一環で参加したもの
3. 青少年団体（ボーイスカウト・スポーツ少年団など）の活動の一環で参加したもの
4. 家族の活動として参加したもの
5. (1～4以外で) 自主的に参加したもの
6. その他（具体的に)

問5 ボランティア活動に関する意識や関心についてお聞きます（問5以後、「ボランティア活動・社会貢献活動」のことを「ボランティア活動」と言います）。

〔5-1〕今後、ボランティア活動をするとしたら、どのような分野の活動をしてみたいですか（〇はいくつでも）。

1. 就学前の子どもを対象とした活動
2. 小学生を対象とした活動
3. 中学生・高校生を対象とした活動
4. 特定の課題やニーズを抱えた子どもを対象とした活動
5. 健康や医療サービスに関係した活動
6. 高齢者を対象とした活動
7. 障害者を対象とした活動
8. スポーツに関係した活動
9. 文化・芸術・学術に関する活動
10. まちづくりのための活動
11. 安全な生活のための活動
12. 自然や環境を守るための活動
13. 災害に関係した活動
14. 国際協力に関係した活動
15. その他（具体的に)

〔5-2〕以下の教育施設等の中で、ボランティア活動をしてみたい場所はありますか（〇はいくつでも）。

1. 公民館 2. 図書館 3. 美術館・博物館 4. 青少年教育施設
5. 幼稚園・保育園 6. 小学校（授業中） 7. 小学校（放課後） 8. 中学校・高校（部活動）
9. 児童館 10. 児童養護施設 11. 公園等の遊び場
12. その他（具体的に) 13. 活動してみたい施設はない

〔5-3〕あなたはボランティア活動について、次のように思いますか（○はそれぞれ1つ）。

質問項目	とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
(1) 自由時間があれば、ボランティア活動よりもアルバイトを優先する	4	3	2	1
(2) 大学は、ボランティア活動の経験を入試の評価に加えるべきだ	4	3	2	1
(3) 大学は、ボランティア活動の経験を単位に加えるべきだ	4	3	2	1
(4) 企業は、ボランティア活動の経験を採用の評価に加えるべきだ	4	3	2	1
(5) ボランティア活動で、交通費や昼食代を受け取ってもよい	4	3	2	1
(6) ボランティア活動で、報酬や謝金を受け取ってもよい	4	3	2	1
(7) これからの社会では、ボランティアの果たす役割が大きくなるはずだ	4	3	2	1
(8) 今後は（今後も）、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい	4	3	2	1

〔5-4〕大学生がボランティア活動をしやすくするために社会全体（大学や行政機関等も含む）ができる支援として、以下のものはどのくらい重要だと思いますか（○はそれぞれ1つ）。

質問項目	とても 重要だと思う	少し 重要だと思う	あまり 重要だと思わない	まったく 重要だと思わない
(1) ボランティア活動に関する講習会・研修会を開催すること	4	3	2	1
(2) ボランティアに関する相談体制を充実させること	4	3	2	1
(3) ボランティア活動に関する情報の提供すること	4	3	2	1
(4) ボランティア活動に関する保険を充実させること	4	3	2	1
(5) 参加しやすい活動プログラムを提供すること	4	3	2	1
(6) ボランティアが集まれる場所や活動のための資材等を提供すること	4	3	2	1
(7) 高校までの学校教育においてボランティア活動について理解を深める授業を行うこと	4	3	2	1
(8) 大学でボランティア関連の授業（講義科目）を開設すること	4	3	2	1
(9) この設問には「4」と回答してください	4	3	2	1
(10) 大学の授業の中でボランティア活動や社会貢献活動を行う機会を作ること	4	3	2	1
(11) 大学がサービスマーケティング（ボランティア活動を活用し多様な分野を実践的に学ぶ）科目を積極的に導入すること	4	3	2	1
(12) 大学がボランティア活動に関する単位を認定すること	4	3	2	1
(13) 大学がボランティア活動で休んだ授業を公欠扱いにすること	4	3	2	1
(14) 大学が「ボランティア休学制度」を整備すること	4	3	2	1
(15) 企業がボランティア活動をする社員を応援する制度を整えること	4	3	2	1
(16) ボランティア活動のための資金の援助をすること	4	3	2	1
(17) ボランティア同士が交流したり、情報交換できる機会を充実させること	4	3	2	1
(18) その他（具体的に： _____）	4	3	2	1

〔5-5〕 今後、ボランティアに関する相談体制を充実させていくために、充実させる必要があるのはどのような機関だと思いますか（〇はいくつでも）

1. 高校までの学校	2. 大学	3. 地域にある関連機関	4. NPO
5. インターネット上の相談機関	6. 企業	7. その他（具体的に：_____）	

〔5-6〕 今後、ボランティアに関する情報提供を充実させていくために、充実させる必要があるのはどのような機関だと思いますか（〇はいくつでも）

1. SNS などのソーシャルメディア	2. SNS 以外のインターネットメディア	3. テレビ・ラジオ
4. 新聞やタウン誌	5. 高校までの学校	6. 大学
7. 地域にある関連機関	8. NPO	9. 企業
10. その他（具体的に：_____）		

問6 あなたの子供の頃の体験についてお聞きします。

〔6-1〕 あなたは、子供の頃（「小学校（4～6学年）」から「中学校」まで）、家庭で次のようなことをどのくらいしたことがありますか。(a)、(b)の各質問でそれぞれ当てはまる番号に〇をつけてください(〇はそれぞれ1つ)。

	(a) 小学校高学年 (4～6学年)			(b) 中学校		
	何度もある	少しある	ほとんどない	何度もある	少しある	ほとんどない
例) 兄弟とケンカしたこと	3	②	1	3	②	1
(1) 家で「おはようございます」「いただきます」「いただきます」「いただきます」「いただきます」といったあいさつをすること	3	2	1	3	2	1
(2) 自分のふとんの上げ下ろしやベッドを整頓したこと	3	2	1	3	2	1
(3) 朝、人に起こされなくて自分で起きたこと	3	2	1	3	2	1
(4) 夜更かしをして、遅くまで起きていたこと	3	2	1	3	2	1
(5) 買い物の手伝いをしたこと	3	2	1	3	2	1
(6) 料理（準備や後片づけを含む）の手伝いをしたこと	3	2	1	3	2	1
(7) 家の中の掃除やごみ出しの手伝いをしたこと	3	2	1	3	2	1
(8) 洗濯（とりこむ・たたむを含む）の手伝いをしたこと	3	2	1	3	2	1
(9) 家族の誕生日を祝ったこと	3	2	1	3	2	1
(10) 家族で季節の行事（クリスマス、節分等）をしたこと	3	2	1	3	2	1
(11) 家族で旅行に行ったこと	3	2	1	3	2	1
(12) 家族でスポーツをしたり自然の中で遊んだりしたこと	3	2	1	3	2	1

〔6-2〕あなたの小学生の頃について、次のことがどのくらいあてはまりますか（○はそれぞれ1つ）。

質問項目	あてはまる とても	あてはまる 少し	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
(1) 学校の友だちとよく遊んだ	4	3	2	1
(2) (学校以外の) 近所の友だちとよく遊んだ	4	3	2	1
(3) きょうだいや親戚の子どもとよく遊んだ	4	3	2	1
(4) 公園や広場など屋外でよく遊んだ	4	3	2	1
(5) 海や川、山や森など、自然の中でよく活動した	4	3	2	1
(6) スポーツなどでよく体を動かした	4	3	2	1
(7) 地域の行事によく参加した	4	3	2	1
(8) この設問には「1」と回答してください	4	3	2	1
(9) テレビゲームやコンピューターゲームをよくした	4	3	2	1
(10) 本をよく読んだ	4	3	2	1
(11) 勉強が得意だった	4	3	2	1
(12) 宿題を忘れずにやっていた	4	3	2	1
(13) 塾や習い事に通うことが多かった	4	3	2	1
(14) 家は経済的に裕福だった	4	3	2	1

〔6-3〕あなたは、大学入学までに、次のことをやったことがありますか（○はそれぞれ1つずつ）。

	ある	ない
(1) 児童会・生徒会の役員	2	1
(2) 体育祭や文化祭の実行委員	2	1
(3) 委員会の委員（保健、美化、図書等）	2	1
(4) 部活動の部長や役員	2	1
(5) 企業や商店等での職場体験	2	1
(6) 青少年団体での活動 (子ども会、スポーツ少年団、ボーイスカウトなど)	2	1

問7 あなたは現在、次のことについてどのくらいあてはまりますか（○はそれぞれ1つ）。

質問項目	あてはまる とても	あてはまる 少し	あてはまらない あまり	あてはまらない まったく
(1) 何事も前向きに取り組むことができる	4	3	2	1
(2) どんなに難しいことでも、努力をすれば自分の力でやり遂げられる	4	3	2	1
(3) 厳しく叱られてもくじけない	4	3	2	1
(4) 失敗してもあきらめずにもう一度挑戦することができる	4	3	2	1
(5) ひどく落ち込んだ時でも、時間をおけば元気にふるまえる	4	3	2	1
(6) 分からないことはそのままにしないで調べる	4	3	2	1
(7) いつも新しいことに挑戦している	4	3	2	1
(8) 人任せにせず何でも自分でやっている	4	3	2	1
(9) 人がやりたがらないことは自分から進んでやるようにしている	4	3	2	1
(10) 常に目標を持って行動している	4	3	2	1
(11) 自分の意見や考えを言葉でうまく表現できる	4	3	2	1
(12) 自分の気持ちを表情やしぐさでうまく表現できる	4	3	2	1
(13) 初めて会った人とでもすぐに話ができる	4	3	2	1
(14) 人の気持ちや微妙な表情の変化を読み取れる	4	3	2	1
(15) 相手の立場に立って物事を考えられる	4	3	2	1
(16) 今の自分が好きだ	4	3	2	1
(17) 体力には自信がある	4	3	2	1
(18) 人よりも仕事や勉強ができる方だ	4	3	2	1
(19) 自分には自分らしさがある	4	3	2	1
(20) 友だちは多い方だ	4	3	2	1

問8 2020年の東京オリンピック・パラリンピックについてお聞きます。

〔8-1〕あなたは、今後、東京オリンピック・パラリンピックに関するボランティア活動にどのくらい興味がありますか（○は1つだけ）。

1. とても興味がある 2. 少し興味がある 3. あまり興味がない 4. ほとんど興味がない

〔8-2〕もし、東京オリンピック・パラリンピックに関するボランティア活動をするとしたら、どんなことをしてみたいと思いますか（○はいくつでも）。

1. 会場（周辺）での観客案内
2. 競技の運営支援
3. 通訳
4. キャンプ地でのサポート
5. その他（具体的に：）
6. なんでもよい
7. してみたいものはない

〔8-3〕あなたは、2018年9月から募集が始まった東京オリンピック・パラリンピックのボランティア活動に応募しましたか（○は1つだけ）。

- | | |
|---------|------------|
| 1. 応募した | 2. 応募しなかった |
|---------|------------|

問9 最後に、あなたの現在の状況についてお聞きします。

〔9-1〕あなたの性別は次のうちどれですか。（○は1つだけ）

- | | | |
|------|------|--------------|
| 1. 男 | 2. 女 | 3. どちらとも言えない |
|------|------|--------------|

〔9-2〕あなたの年齢と学年を記入してください。

<input type="text"/>	歳	大学	<input type="text"/>	年生
----------------------	---	----	----------------------	----

〔9-3〕あなたの通っている学校は次のうちどれですか（○は1つだけ）。

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 1. 国立 | 2. 公立 | 3. 私立 |
|-------|-------|-------|

〔9-4〕あなたの専攻分野は次のうちどれですか（○は1つだけ）。

- | | |
|----------------------------|--------------------------------------|
| 1. 人文科学系（文学・言語・歴史・思想など） | 8. 医・歯・薬学系 |
| 2. 社会科学系（法律・政治・経済・経営・社会など） | 9. 家政学系 |
| 3. 理学・工学系 | 10. 教育学・保育学系 |
| 4. 農・林・水産学系 | 11. 芸術学系 |
| 5. 社会福祉学系 | 12. 体育科学・スポーツ科学・健康科学系 |
| 6. 情報学系 | 13. 環境科学系 |
| 7. 国際学系 | 14. 心理学系 |
| | 15. その他（具体的に： <input type="text"/> ） |

〔9-5〕あなたは現在、卒業後に希望する進路が決まっていますか（○は1つだけ）。

1. 決まっている 2. 決まってない 3. どちらともいえない



進みたい進路が決まっている場合、
どのような進路を希望していますか
（○は1つだけ）。

1. 一般企業
2. 教員
3. 公務員
4. NPO
5. 福祉・医療関係の専門職
6. 技術職
7. 進学
8. その他（ ）

〔9-6〕あなたは、大学でこれまでに以下のことがありますか（○は1つだけ）。

質問項目	ある	ない	わからない
(1) 大学でボランティアに関連する講義を受講したこと	3	2	1
(2) 大学でボランティアに関する相談や問い合わせをしたこと	3	2	1
(3) 大学でボランティアに関する掲示板を見たこと	3	2	1

〔9-7〕大学内の、ボランティア活動に関する窓口がどこにあるか知っていますか（○は1つだけ）。

1. 知っている 2. 知らない

「知っている」場合、
以下の2問に教えてください

その窓口はどこにありますか（○は1つだけ）

1. ボランティアに関することを専門的に扱う窓口
2. 学生支援に関する窓口の一部
3. その他（具体的に ）

その窓口をあなたはどのくらい利用していますか（○は1つだけ）

1. よく利用している
2. ときどき利用している
3. あまり利用していない（利用したことはある）
4. 利用したことはない

〔9-8〕 あなたの住居形態は次のうちどれですか（○は1つだけ）。


- | |
|---|
| 1. 実家に住んでいる
2. 寮に住んでいる（学生会館や学生寮など）
3. 一人暮らしをしている（借家、アパート、マンションなど）
4. その他（具体的に：_____） |
|---|

〔9-9〕 あなたは平均して大学のサークルや部活動でどのくらい活動していますか（○は1つだけ）。

- | |
|---|
| 1. 週に3日以上 2. 週1～2日程度 3. 月1～2日程度 4. 月1日未満（未所属を含む） |
|---|

〔9-10〕 あなたは平均してどのくらいアルバイトをしていますか（○は1つだけ）。

- | |
|---|
| 1. 週に5日以上 2. 週3～4日程度 3. 週1～2日程度 4. 週1日未満 5. していない |
|---|

 アルバイトをしている場合、バイト代を
どのくらい生活費や授業料に
あてていますか（○は1つだけ）。

1. 主に生活費や授業料等にあてている 2. 一部を生活費や授業料にあてている 3. ほとんど生活費や授業料にはあてていない
--

〔9-11〕 あなたはこれまでに、選挙で投票に行ったことがありますか（○は1つだけ）。

- | |
|----------------------------------|
| 1. ある 2. ない |
|----------------------------------|

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

「大学生のボランティア活動等に関する調査」報告書 執筆者

- 興梠 寛 昭和女子大学総合教育センター特任教授
コミュニティサービスラーニングセンター長
(第5章 考察1)
- 服部 英二 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部客員教授
(第5章 考察2)
- 坂口 緑 明治学院大学社会学部教授
(第5章 考察3)
- 齊藤 ゆか 神奈川大学人間科学部教授
(第5章 考察4)
- 二宮 雅也 文教大学人間科学部准教授、
(第5章 考察5)
- 西尾 雄志 近畿大学総合社会学部准教授
(第5章 考察6)
- 青山 鉄兵 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター副センター長
文教大学人間科学部准教授
(第1章、第2章、第3章、第4章)

「大学生のボランティア活動等に関する調査」報告書

令和2年3月

編集・発行

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
電話番号 03-6407-7741 FAX 03-6407-7619
E-mail kenkyu-soumu@niye.go.jp